

やない。喧嘩づくに一太刀浴びても、生命を賭して、お嬢さんのために戦ふのが人間の道であつたかも知れないからなあ。

と云つて、巫女の言をきいて、胸に抱いた活ものを我手で井戸へ投込むを断然拒絶したほどの元氣は出ない、あの場合。

「こゝが今でも、情として、道として、人間の迷ふ處だと思ふ。」

額を壓へた手を拂つて、矢野は、やゝ、うつろな笑を漏らしたが、

「私ばかりぢやない、皆だつて、其の心なきにしもあらずだらう。知らん顔の青い小浪に、黒い影を映して、白け返つて立つて居た。」

その場合だ。生死の隔ての潮を幽冥から敲くやうに、タ、タ、タ、と發動汽艇の音がすると、水には紛れるが、緑色の屋根船が一艘顯はれたよ。

……見るとだ。心あつて今は沖にたゞよつて居るらしい短艇を指して、波を大吸ひに吸つて近くなる。——其の舳に、白衣で紅い袴……あ、井戸を覗いた女だ。……續いて、黄薔薇の島田

鬚、艦に居たのは、ドレスのそれです。真中に、これが妙だ。按摩の良助が頭を据ゑて乗つて居た。な、金兵衛さん。」

「目に見るやうだ、旦那。」

「あれを忘れて堪るものか。お剩にひた／＼と船が寄ると、良助めべたんとなつて、短艇のお嬢さんにお叩頭をした。あの頭が、兀げた烏帽子ほどに光つたぢやあないか。これは頼もしい。で、泣むしの平判官隠居の康頼はじめ、忽ち那須與一となつて、棧橋の尖端へ驅出したぜ、見給へ、紅の袴が舳へすと現はれると、立つて袖を伸ばす嬢さんの手を取つた、島の上の白い雲から天降つたやうに思ふ。」

中尉は乗らなかつたね。挨拶を何うして、どんな相談が出来たものだから、嬢さんが乗移ると、兩方の船が、沖で並んで、今度は紅い袴が船で来た方とは反對に、棧橋から向つて右へ。……」

筆染崎、唐島、臺ヶ崎、瀬嵐の岬など名所の續く、西灣で、即ち近くは此の白濱、遠くは中島川に溯る……と金兵衛たちが交々言つた。

「で、沖へ小さく緑の船が綺麗な吉丁蟲に見えて、遙な島陰へ波を飛ばやうに入つて行つた……日の暮前だつたさうぢやあないか、中尉さん唯だ一人で、短艇を漕いで、裏棧橋へ歸つて来たのは。——」

「おつしやる通りでに。——食事も最う済ましたちて、晩飯も食らねえで……あの、だんまり様さ、尙の事、口を利く取つかゝりがありましねえ。ほれ、給仕にも、誰も出ねえもんだね。けんども、何となく、不斷よりは目の色が柔こいやうだ、女中が、へい、恐る恐るだけんど、(お

嬢様は、ちて、密と聞くと、(遊びに行つたよ、知合へ。)で其切また書物だでね。——それでも隠居どもは氣にするで、早い處が、同じ短艇に乗つて居たもんだ。

良勳按摩を尋ねるが早かんべ、で、あれが住居へ、へい、人さやつた處がや、出たきりでまだ歸らねえと云ふもんだで、そんなら、あの發動汽艇を捜すかなど、相談打つてる、八時さがり、かれこれ九時ごろでがしたべいよ。

館の表玄關の處へ、あの嬢さまの小さいのが、ツと来て立たツしやつた。立たツしやつたかと思ふと、へい、(唯今)ちツてね、學校から歸つたやうに、衝立を越して、廊下をひいらひら行かしたさうで。……や此の時は、帳場中寒氣がした、と言ひますだ。あの神かくしが、スツと、へい、門の大櫓の梢から下つた氣がしたちゆうだ。

其の癖、路が入組んで、總湯へ廻る、丑角の、何處か、其の暗い處に、送つて來たものが、ちつと、此方を見て立つてござるやうな氣がするもんだで、さしあたり、二階より、其の辻の方へ、皆が氣を奪られて、顔と鼻が集ると、山の風が寒う吹込んだらげな。陰氣にのう。

すとすとん、がちん、がちん……早や其處へ、何と、軍人さまだ。装束は速か、最う軍服に着換へて、劍をつけさした中尉殿、嬢さまの手を曳いて、ブラ〜と出て來さしたわ。自分で、靴を取らつしやるで、女中どもが慌てて立つと、(構ふな可々)軽い機嫌できれいな手袋を被

めた手で、ひよいと嬢様を抱上げさして、其の時さ、莞爾と笑はつしやると、嬢さまも嬉しうに、頬邊を寄せ合つて、暗い大櫓の下を出て行かしたもので、え、旦那。

旦那が浴室で、わしらが流して進んで居た……あの間の事だてば。——あの後で、やつとお晩飯だつつけの、いや、よく寝さした。

「寝たとも、——午過ぎから、ぐつすりだ。一時に疲勞が出たんだ。夜一夜狸にからかはれて、朝からも氣を揉ませられ續けたからな。……いまの中尉さんの其の話は、雑と其のおそい夕飯の時に、私も聞いた。が、人の事より、我が事だ。……」

——ほかに手掛りはなし、好かない奴だが、平家の船で、ぼろ琵琶でも引きさうな、あの凹入道が、何か知ら様子を知つて居ようと、早速口をかけて貰つたが……此奴が居ない。」
「居ない筈で、あれつきり歸りましねえとの。……そんで、へい中尉殿も。」

掛 蓑

「其ツ切分らないんだな、可、よくはないが、ま、待てよ。軍人の行方の知れないのも、私がかこで酔つてるのも、一つ狸の所業らしい。」

いや、飛でもない。……あ、狸は飛びも刎ねもするが、待てよ、狸ぢやあない、婦三人の井戸のせるだ。……

私は、あの船が二艘、島に見えなくなつてから、もう一度、井戸の處へ引返した、見すく沖へ出て行つた紅い袴が、却つて、其の底に、影でも映るやうな気がしたので——如何にも、温泉をほり掛けたあとだらう。そんなに深くもない底に、石ころ交りに草が生えて、湯の香がする。が、何にもない。

鬼灯どころか、あの邊ぢや雀の聲もしなかつた。が、不思議にカタ／＼カタと發動機の音が海から底へ響く気がする。——あの三人で、何を覗いて立つて居たらう。

——は、あ、婦が三人で、井戸を覗く光景を、……然うだ、私に見せるためだ。一人が何う見ても神巫の姿をして居るにつけても、——夜中の（長太居るか）につけても。——

——忘れもしない。其の事があつて後、いま話した、花屋の二階に三つ並んだ女の顔を見て、あと又四五年……それも記憶から遠ざかりさうな頃、ふと奥州から手紙の來た事がある。

みちのくの穂屋の蔭より——

穂屋といふのは、ある意味で路ばたの丘の祠、野中の森の妻社などの事です。勿論男の書だが

……これは他人行儀でない……わけがある。

……これは他人行儀でない……わけがある。

われらの教祖のあふせによれば、賢兄は、女人の命を顧みずして、雀を助けられたるよし。不善とは、如何か、不仁をばなされたり。其の心を改められずば、子孫は必ず斷絶せむ。

われらの教祖に宥恕を請はれよ。

(案ずるに、此の状をうつし讀む時、矢野の口調子まじりたるべし。)

……こゝに名があつた。

ほやのすゝきのかげにて、

安場嘉傳次。

と、久しく打絶えたが、少年の時の塾朋輩で、さまざまな事をやつた男でね。……おそろしく眞面目で、馬鹿にとぼけて居る。……故郷で醫師の弟子にもなれば、東京へ苦學に出て來て、俵の曳子、新聞配達をするかと思ふと、其時分の事だ、すぐ巡查になれた。——忽ちやめて、地方

の新聞のたねとりをして居るかと思ふと、運送屋を營んで見たり……そのうち催眠術に凝つて、素人療治をはじめたつけが、やがて、火災保険の外交員——年に一度ぐらゐる——以前は尋ねて来て、身の上ばなしをするんだが、外交員の時が得意だった。忘年会の餘興に、大おちを取つて一座を驚倒せしめたと言ふ。……何だと聞くと、若い藝妓の緋縮緬の長襦袢を……よく貸した。

と、いひかけて苦笑したが、

「素裸へ着込んで、豫て用意の館屋の盤臺さ、灯を入れた紅提灯を十六張、おいらん簪に盤臺にさし廻して、頭へのせたわ。合圖で大廣間の電燈を一齊に眞暗にすると、襖を左右へ押開いて、太鼓を敲いて、鬱紺の扱帯の尻を振つて、テンコ、テンコ、テンコ、ありや、月の圓さと戀路の道は、と練つて出た。紀伊國も、春雨も手心のあるのをやらすに、館屋のめちや踊と云ふのが山で、後段、かつほれに變つてからも、頭の提灯を焦しもしない、と生眞面目で居た人だから。

……

危いよ……火災保険の勧誘は、むづかしからうと思ふと、果して留めた……と云つた男だから。——これは、奥州の何處かで、神職になつたんだらう。

神職と云つても、何か、別途の神に事へて居るのだらう——安場——然ういつた男の事だから、活計のために、とばかりで済まされないので、一種の警告状とも云ふべき中に、雀の事がかいて

ある。見ると同時に、古井戸が腫に映つた。

あゝ、あの、もの凄、不氣味な巫女に附隨して居るんだな。……然うか、子孫が絶えるのか、祟つて居るのか。む、呪詛はれたんだな。

よし其の呪詛は、はづれたぞ。……これでも、私には家内がある、——

矢野は運轉手に銚子を向けたが、依然として猪口を手にしなから、しばらく途絶えたビールに代へて、硝子盃に蓋する硬直な手を押のけて注いだ。

「すでに、其の雀の頃から、約束はあつたんだ。が、はなつから子を持たうと思つたための女ぢやあない。成程、子孫は断えるだらう。此の年をした、今に於て、蚊とんぼ程の子の影もないんだから。」

渠は大人氣なく見ゆるまで、昂然としていつた。

「しかし、年紀だ。……寝られない夜の寂しさに、ふと、ものを思ふ事はある。かりにも三人の婦の生命にか、はると、巫女のいふのを、反撥した行爲の、善か、悪かは知らないが、欲しい子孫がそのために断えても、後悔は断じてしない！安場の讒言は焼棄した。

が、つぎつぎに、其の巫女、其の安場などは、前刻から言つた、オシラ神に奉仕する一黨だと云ふのが、よく分つて來た。つい、其の矢先に向つた的が、この和倉の井戸の三人の婦の姿だ。

其の姿の消えたあとの、私は——今、たつた今、其の井戸を覗いて立つて居る。……とすると一寸不思議な気がしようぢやないか。

巫女に通力もあらば、あの珠数が此の井戸の内を二巻きして、其の中に、猿、蛇、百足、鷲、蜘蛛、釘も鏃も、ついでに洋鉄屑も硝子の缺も顯はれよう、と思ふのに、何もない。其の筈だが、却つて頸首を、ほつと撫でて、頬に觸るやうな、良い薫が、磯の香を分けて、ほんのり通つた。

湯氣をさへ分けてだね。

あの廣場は、ブツと出はづれが波止場だが、總湯から向つて、井戸の右手に高い石垣をついて、上が塀で、石垣と塀との間が、づらりとすかしになつたのが、角地面を取つて、波止場から右手の濱に押廻した、大きな三階建の旅館があるね。

「朝六館でや。てうろく、てうろくとも言ひますだ。」

「土地の人ぢやありません。以前、何でも、越前、麻生津の出ださうで。其處の名所の朝六つの橋——え、明六つには、冬の夜半でも、もう其處ばかり薄あかるい處ださうで。——自動車ぢや、夢中で通つて來たですが、それを宿の名にしたのださうです。」

「其處の板壁の透間から、牡丹の花が見えたんです——紅白の。……それも二三輪、然も井戸か

らは、ブツと遠い。

塀の角を折曲つた庭に咲いたらしい。が、斜つかけに直線に透いて見えたんだね。氣の所爲だらう。まさか、其の牡丹が香つたわけでもなからうし……それに鉢植だと思へば、別に見る氣もしなかつたのだが、其處で見えたのは、ほんの牡丹の棲ぼづれで、向うは花畑で見事に咲いて居るらしく思はれた。

い、景色だね、波止場の處は——磯馴松の中に處々に、ばら／＼と巖があつて。——しかし一方は直き畠になるが、其の間にはテニススコートの眞似などがしてある。

其處へ行くと、もう正面だ。黒い塀の裾に、花瓣が觸りさうに、紅いのが磯風にちら／＼と見える、見事な牡丹畑らしい。——其處を覗いた。堪忍してくれ、よく覗く男だが、石垣に足をかけて、すかしの竹を力に伸上ると……あ、皆目を塞いで聞けよ、うつかりすると目が潰れる……大變なものを見た。

——十五疊ばかり、青々とした廣間で、無地の金屏風が立つた——其處が出入口になつてでも居ようかね。床の間は見えなかつたが、正面に黄金金具を打つた、塗り衣桁が立つて居て……」

「え、其の上に——女の生首でありますか。」
と言つて、掌を拂つた運轉手が、ふと目を開いたが、忽ち又掌で覆ひ隠した。……見ると、

おとなしい女房も、金兵衛も、おなじやうに目を隠して居たのである。——酒の酔が然うさせたか、話の勢ひに乗つたか、知らず。……「目を塞いで聞け——悪くすると片目潰れるぞ。」矢野の其の聲と齊しく、三人の手が其の兩眼を押へたのであつた。

「いや、色ある衣と思はれる、うつすりした袖褌に、新しい加賀蓑の長いのが一杯にか、つて居た。主は、と思ふ其の顔は見えないで、皓い膚が見えた。眞白な長い蛇が、四筋、羽二重か、緞子か、濃い萌黄の敷蒲團の上から、横にした琴を擲んで居る——と云ふのが、ふつくり蒲團が高から、抱いたので。……抱いたのぢやない絡つた形で——十三の絃と巻合つた、其の四筋の白い蛇と驚いたのは、湯から上つたまゝ、だらう……姉の手足だ！……伸々と庭の此方向で、何の事はない、寝ながら琴を脇息に使つたのだね。

白牡丹の苔が一輪、葉ながら、祕密を封じて、ぴたりと、覗く目に當つた、と思へ。人氣勢を感じたらしく、する／＼と手足が動いたが。

ハツと心着くと、矢野は、自分でも何時の間にか、片手を額に當てて、話しながら目を蔽うて居るのに心着いた。

とともに、いまだ三人が、目を隠して居るのを見た。同時に土間が暗かつた。

申戯にも、恚ういふ事をするものではなからう。四人が一所に目を隠す——矢野は人知れず悚然とした。

爾時である。

わつと叫ぶ諸聲が街道の兩方に湧起つと、中島の方の地に響き、白濱橋の方の空に揚つた。其の中島の方から出掛つて、啜を覗く、八九人の頭が、慌しく、後へ引込んだと思ふと、

「やあ、暴れ馬が三匹、——天と宙と地面！」

と第一番に運轉手が叫んだ。睜くと、突立つと、見ると、同瞬間の不意の視覚は、時として、ものを三つにするらしい。

が、殆ど事實である。まつたく天を鼠色の雲が馳つた。中空を其の影が飛んで、地をまつくらに、橋の堤防から逸れて來たのは一頭の黒馬である。

ものこそ、暗くなつた店頭を、雲と、風と、軽い埃とともに、前脚が軒を抱いて飛ぶ時、鹽依か、石灰か、五俵ばかり粉を積んだのが、濛々と、ハドソンを壓して、煙つた。

たとへば一所に堰留められて居たやうに、みな草鞋穿きの人数が二三十人、酒にも肴にも目もくれず、おの／＼叫び聲を上げて其のあとに駆け續く。

大畝りする道の二本の松蔭へ、馬も人数も隠れた時、軒前に立つた矢野に、女房が呆氣に取ら

れて、押並んで居たのである。

近々と、客の胸、餘り袖の附着いたのに、女房は顔を赤くして衝と退いた。

「引上げ時か。」

矢野は其のま、海を見た。

「もう、晩方だ、波は白い。」

「いまの騒ぎと、旦那の話で、一時に酔が醒めた。」

そのくせ運轉手は、箆を掬んで居たが、硝子盃の雫をうつむけて切つて、

「四十メートル以上でしたな、あの速力は。」

「おかみさん、勘定を。……」

逢魔ヶ時

「金兵衛は何うした。」

時におぢいが居ない。女房も知らないのである。

「狐に馬を乗せる、と云ふたとへがあるです。あの、よたもの、あばれ馬が引攪つて行つたんで

せうな。」

人々の心には、飛ぶ鳥の勢ひが鱗爪にかけて、おぢいを屋の上へ消したほど、其のこゝに見えないのが急遽を極めた。

それとともに、卓子のぼかんとした、寂寞さは度を超して、酒席の一人が座をはづしたやうなものではなかつたのである。

喧噪のあとの静肅さに、機音がまた聞こえる。

これから歸る旅の宿は、細君が待つ我が家でないと同時に、東京にひとり其細君を「お澄をばさん」とする處の、「好きな」芝門前の師匠の娘の影もさ、ぬことを矢野は思ひ知つたらう。

「おかみさん、熱くして、もう、一銚子——一銚子だけだから。」

「申戯ちやありません、先生。——東京の火事と同一で、馬の騒動と云へば、此處等で驅出さない奴は一人だつてありませんので。……待つていらつしやる事があるもんですか。」

運轉手は土間にも歸らず、軒さきに立つて雲を見た。

「それに空模様が些と變です、——おともしませう。」

「別に、そのためではない、私も少し里心がついて來たんだ。一杯やらう。きみが一所だ、天氣の方の心配は少しもない。……それに親仁だつて、大船に、いや、自動車に乗つた氣で飲んだん

だ。——こゝで見棄て了つては岡場所の俊寛あはれだからね。

——ありがたい、湯が沸つてると見えて、もう爛が出来た。」
矢野は今度は茶碗へ注いだ。

「まあ、お掛け。それに肝心な事がある。すぐ其處なんだらう。合歡の花に、其の衣桁のお姫様のある處まで歩行かうぢやあないか——いや、歩行くよ。まあ、お掛け。」
「私も可なり頂戴しました。一つエンジンを掛けて見ませう。」
ハドソンの轡へつと寄る、靴を、コツンと留めて突立つた。

「あの、おぢい、あ、あんな處から驅けて來やがる。」
「あれ、まあ。」

思ひがけない、正反對の橋の方からだつたので、矢野も連れられて軒へ出た。
出た、出た、風は吹出した。が、あんなにも吹迷はさるゝものかと思ふ。酔つたのが急ぐから、

据腰の突張脚して、よたくふはくと、野分に淺瀬を渡るやうに、とぼけた形で驅けて來て、
「やあ、旦那。」
傍へ寄る間も、もどかしさうに、自動車のヘッドへ、ぬいと立つて、

「別嬪の神様、見届けただ。引抱き申すは勿體ねえ言はつしやるで、おらが、へい、へイカラで

寫し取つた。

此の通り、ほれ、正のもの、正のもの。」

成程、功名なのに急いだらう。半紙を一枚、引摺んだまゝ、抜いたなりの矢立を握つた片手で、片端を持添へて、一度よろけながら踏張つたが、ぐつと押開いて、高々とさし翳した。

「此の通り。此の通り。」

矢野も運轉手も無言で寄らうとした瞬間である。白い風がパツと當つて、金兵衛の手から姿が飛んだ。

眞横に、ふつと自動車の屋根の上、およそ四五尺の空に、吹靡いた紙の撓ひ様が、小さな被衣ですらりと立つと、……

——やがて……

色はあせたが、茜木綿の六尺ひとつで、金兵衛が、布子も、股引も一からげに、黒い裸體になつたのを見ると、ともにあるものは恰も海の中に沈んだやうで、自動車は唯其の底の巖の青い洞窟かと疑はれる。

和倉自慢の相良運轉手が、ハンドリングで、飲屋から操縦したハドソンが、白濱橋の弓なりの眞中で、高く立すくんで居るのであつた。——

一度、此の自動車の上に、吹かれ立つて佇んだ、金兵衛が、神のうつし繪と稱へた、白紙の被衣の姿は、見る／＼斜に舞上つて、飲屋の草の屋の棟、およそ一丈ばかりの空中に、二三尺、三四尺がほどづゝ、舞上り、舞下りして吹漂つた、が、それも束の間で、細い旋風が其の背戸を捲いたのであらう。吹切らるゝ木の葉が、紙の裾にばら／＼と飛散つたが、其の一枚をも交へず、すつと一文字に高く上り、白くのはつて、凡そ人の目の仰向けに届く大空の、早や、結び、解け、縋れ、流るゝ、暗い雲間に昇ると齊しく、矢のやうに颯と切れ、返照ヶ嶽と申して、連山一帯の中に、群を抜いて聳えてた、山際の森に、白い不知火となつて、ちら／＼と消えた。其の遠方の青葉若葉も、もう眞暗に、黒雲は海の手から魔鳥の翼に似て馳せ蒐る。

早く勘定を済ましなから、—— 恠くては一層其の氣になつたらう。オシラ神が其處にと思ふ、堤防の中途まで、歩行かうと、矢野の云ふのに對して、

「先生、不可んです、ばら／＼と來ました、大粒が。——」

合歡の蔭で停めます、と云ふのに従つた。が、金兵衛は度肝を抜かれたらう、呆氣に取られたらう。紙の怪しき行方に、伸び上るだけ伸び上つたあとを、ぐしやりと潰れて、たゞ脚のない蟹の如く、街道に踞つたのが、口も利かないで、助手の席へも／＼と潜り込む。

「お入り——同じ事だよ。」

けれども、金兵衛は、黙つて、大がたの古鳥打帽に手を掛けて、揺ぶつて、叩頭をしたばかりであつた。

「ぎやつ。」

蛙のやうな聲は誰ぞ。

無い。

「ありません。先生、見えません。」

一叫を揚げた金兵衛の背へ、のしかつて、右手を見廻らした運轉手が、もつけない顔して、

「捜して見ませう。」

同時に、其の茶の中折帽を引脱いだのは、もう、どしや降りになつた雨に、不用意の用意であつたと見える。

「捜す處はない、合歡は此處にある。」

ほのかな其の花の面影は、大雨の簾にかくれ、吹靡く葉は、黒髪くろかみの如く湖の面へ亂れて居た。

「此の降りだ、もう可からう。」 革紐を引いて、厚い硝子を閉じた。風をよけ、風に背いた此の扉さへ、雫は瀧を吹き掛けた。

「こんな事もあらうかと思つた。いや、かうなるのが眞個かも知れない。」
「何故です、先生。」

「まあ、行れよ。……とに角急がう。」

前途の橋は、ほの白い船の浪を乗るやうに架つて、灰汁とも、鼠とも、欄干に亂る、雲の中を、打ちかゝる濤は橋袂に三角のしぶきを上げて居るのであつた。

一氣のスピードは其の風雨の中を、橋の中央まで乗上げた。が、つつんと水に沈んだやうに留まつたのであつた。

「大丈夫か。」

矢野が、思はず聲を掛けたのと殆ど同じ時と言つても可い。

見よ、前途の堤防は、打ちかゝる波で凄じく白泡を流して居る。最と其の低いのを、湖へ煽つて越すのに、處々むら消えの隙間が見えたのも瞬く間で、縦一條の道は忽ち飛ぶ雪、舞ふ雪の曠原となつて、次の瞬間には、海潮も湖面も、一様に大車輪をつらね重ねて、泡の渦の數々が驅廻る。

勿論、背後の堤防も、殆ど倏忽の隙に、おなじ状態になつた事は言ふまでもない。
あまつさへ、降りに降る雨は、溢れ漲る水を叩いて、一度に幾何千の千鳥の足あとなりに波を

芻上げ攪亂す。

や、遠見に、一叢の樹立に包まれた、いま其處を出た、飲屋の状は、忽ち焼亡し盡すかと、棟に雨煙が立騰る。

並木の白楊樹は、前後に亂れ、左右に揺れて、一樹づゝ一軀の悪鬼が、藍色の蓬髪を石橋に振被つて、其状、狂ふとよりは踊るのである。踊りつつ亂れつつ、粉しぶきにぶつかる波と雨を、シュツ〜と漏斗形に青い呼吸を噴いた。

「先生。」

「……………」

「相良。」

運轉手は、此の時、自ら其の姓を呼んだ。

「相良一人でありますれば、思ひ切つて直進するのでありますが。」

「危ねえ、うんや危ねえどころでねえ。危ねえ。」

両手で肩を押へるやうに、おちいが留めて、

「道も波も區分がねえだ。一寸でも踏違えたが、それが最後、海へ逆勦斗を打つてねえか。」

「運轉手さん、かういふ事は時々あるかね。」

「秋の末から、冬分は、白山嵐が屢々です、が、然ういふ時は運轉しない事になつて居ります。尤も二度ばかり、此の暴風雨に出逢ひました。二度とも客人を送つた歸途で、しかも夜分で、單身ですから盲滅法に突切つたです。しかし暮切らないのに、此の模様ですから朦々とものが見え、ますだけに却つて心が迷ふのです。一度はしかし思切つて、あとの宿に此の車を預けました。その時も雨風で、歩行となると、殆ど一夜です、一晩かゝつて——何だかわけが分かりません。——馳れば十分とか、りません處を、それに、闇夜を透して、和倉の灯が浦なぐれの出端に見えたですものなあ。」

「今も見えるだべい、黒雲の中に、天へ上つたあの燭臺見たやうのものは、おらがの塔だんべい。高い處にしゃあ、揺れとるわ、振れてるだ。」

「おぢい、晴れ渡つても此處からは見えやせんよ。」

「うんや、見える。わあ、見えて、それ、波に乗つて、風で驅けて来るやうだ。——はッあ、一度は、あの鴻仙館へ歸れるだかやあ。」

「馬鹿確乎しろ。」

「まあ落着け。——しかし例によると、此のあれば、時間が何うだらう。」

「急に來たんだから、すぐ留むと思ふがな。」

「勿論——と存じますが。」

「構ふ事はない、こゝで徹夜だ。雀が鳴いたら飛出すつもりで。……だが、自炊より不自由だね。飯も味噌汁も、此の申ぢやあ間に合はない。いや申戲はよして慥うと知つたら、飲屋から一升提げて來ればよかつたよ。」

「先生が其の氣ならハドソンは小さな城です。」

相良は昂然として、白波の原の浮木の上で、あらしを睥睨したのである。

さりながら、風伯と雨師の暴威は、ハドソンの自負を許さず、その矜持を認めなかつた。須臾すると——それまでは、橋の上さまに逆つて翻る濤のたゞ大なる楯形の欄干に千條の瀧にどうと落つると思へば打上げ打上げしたのが——一度、一處、象の鼻の如き變怪なる水柱が立つて、自動車屋根を捲越して、うつむけに湖へ越したのを相圖として、幾處ともなく潮しぶきの狼煙が揚つて、扉ともいはず、屋根ともいはず、打越し、打越し、張り落ちる。

中に居るものの目は、大川の裏を見るやうになつたのである。

爾時であつた。——

「鱈の腹が空に見える、わあ……」

と、謔言のやうに云つた金兵衛が、帯を解き、布を脱ぎ、矢立を包み、股引を引かなぐつて、赤禪の尻を、もくくと押立てながら、助手席から仕切のシイツを高這ひに跨いで、もぐり込んだのは、――

運轉手が、興さめ顔して、

「おぢい、何をする。」

「いや、構はん、入つた方がいゝ、入つた方がいゝ。」

と矢野はいたはるやうに云つた。

「いえ、其のことではないのです、衣ものを脱いでよ？おぢい。」

「追剝に合つたやうだな、いや、これは難船だ、龍神に魅込まれるには、些と毛だらけ過ぎる。分つた、其の矢立を見込まれたんだぜ。」

矢野はまだそんな事を云つた、が耳もかさずに、

「おらは泳ぐだよ、ひやあ、もう半分泳いでるけに。」

其の濤の激しく被る都度、橋とともに、車體の揺れる氣がしない事はない。

「入りたまへ、きみも。此方の方が濡れなからう。」

「は。」

「しかし、餘り大人氣ない事を聞くやうだけれど、轉覆るやうな事はあるまいな。」

「大丈夫、そんな事は。」

と云つて、相良は唇とともに指を嚙んだ。

矢野の色がやゝ變つて、

「斷じて行へば鬼神も避く。決行するか、驀進を！」

「さあ。」

幽冥の境を照らす一道の光明を求むる如く、しゆんじゆんし、ちうちよする聲の下にも頭光を投げた。日はまだ暮れては居ないが、暮れ迫る暴風雨の山と山に、其の谷河なす堤防筋に、黄なる光が散り、泡を切れぬに潜つて、明滅する。……

唯、其の燐光の末に、視線の及ぶ眞向へ――一點の黒い影が、雨に埋もれつつ顯はれた。

「化鯰が出た、でツかいぞ――ぬしだ、ぬしだ。」

と夢中で、魚尺に手を擴げて、

「立つた、立つた。ありや海坊主だ。」

「先生、」

「……………」

「地藏様です。」

「……………」

「いつか、大良越の山中で、真夜中に見ましたのに肖如ですわ。……あ、母親に拜ませたい——歩行いて来られます。段々背が高くおなりになります。」

矢野にも其の形がはつきりと認められた。はじめは、遠く雨に領伏すが如く見えたのが、白楊樹の亂れを左右に拂つて、光りの中に隠現しつ、足に大魚を踏むが如く、波が其の裾に跳つて、たゞ頭から眞黒に立つて動くのが見える。

運轉手が一固唾、ごくりと飲んで、

「先生——きものを、お脱ぎなれ！」

「うむ……………」

「おつげです、先生。こんな場合です、狼狽のあまり、其の考へが出なんだのです。歩行けます、堤防は——相良が貴下を負つて行きます。衣類が濡れますからお脱ぎになつて。」

「そんな事を厭ふものか。よし、歩行かう、三人で手を曳合へば尙ほ安全だ。」

聲の際に、早くも近づいた、其の眞黒な僧形は、偉なり、丈二丈ばかり、肝を奪つて、人の目を駭かしたが、車輪の雨と、潮柱と、渦巻く流れのために、長く曳いた影と身の丈と相混じた幻

覺で、忽ち、自動車の一側へ寄つたのを視ると、此の屋根を宙へ浮いて、ふはくと黒雲を乗越すには其の装が重からう。却つて水底を行くに適する一個の潜水夫に似て、それよりも華奢に、瘖せて見える。

「蒼雲寺様に何體もござらつしやる。」

と、震ふ聲をひそめるとともに、金兵衛は早口に念佛を唱へた。

——白濱山、蒼雲寺——白濱の里に、しかし荒廢しつ、曹洞の其の巨刹のあることを、やがて知つた。

けれども、其處を出現の菩薩でないことは、刻下に認められた。姿は石でも法衣でもない。北國には、雪に、霰に、器の用に從つて、坊主合羽、裏頭合羽とも稱へて、天窓から裾下りに、ただすつぽりと、半ばすぼめた傘の形に被つて、目ばかり覗く雨具がある。廂がついて、風向上げ下げをするのである。……護謨、防水布などと云ふ贅澤なのではない。單に眞黒な桐油製の、それを着て居た。

而して、目廂を深くして居たのであるから、鯨とも、海坊主とも、全身は皆黒い。

濡れに濡れた其の全身に、ひた／＼と着いた、銀杏の若葉の、柔に優しいのがものの可哀に見えるまで吹ちぎられ、たゞきつけられながら、大暴風雨の棟、廂の藁に、却つて、吹きつけられ

て離れない、その取違つた風情して、流る、雫にも、其の雫を蓑に亂す風にも吸ひついて落ちないのが、光の直射に、薄藍とも、浅黄とも、裏透くやうに綺麗である。

唯ばかり見る間に、欄干にすれすれに自動車の左側へ着いた、と思ふと、ドンと外面から扉を開けて、一波避ける其の早さ。——相良が居る運轉手臺へ、ひらりと無言で衝入つたのであるから、呆氣に取られながら、思はず助手の席へ肩がかはつた。

途端に欄干が消え、橋が隠れた。

叫ぶ風、唸る波の中を、頭光は一幅の閃電を堤防に飛ばして、蹴上ぐる轍に、水の隧道の中を、一文字に突進する。……

餘りの事に、しばらくは、合羽に散つた銀杏の葉の、や、揺ぎこるばかりを見つつ、矢野は、卯の花の大密叢を分け行く心地して、ともすれば窓を開けようとする誘惑をさへ感じたのである。五六分時——

自動車かびたりと留まつた。

坊主合羽の肩のあたりの、さすがに此の一種の冒険に、緊張したのが、軽く寛ろぐのが見えて、目びさしを少しあげると、スツと通つた鼻筋と、目ばかりに、額髪、眉が、ほのかに黛のやうに半ば顯はれた。

打徴笑んだやうである。

小説家には背きながら、襟さきを掻きひろげると、下は白身かと疑ふ、雪を欺く胸に、色ある衣が亂れて居る。

また莞爾した。

「似て居ますか。」

金兵衛は、突臥して両手で拜んだ。

「お、女神様、難有く存じ奉る。勿體ない。」

「否——邪魔でしたから。」

一句、人を冷殺した。下り状にハタと扉を閉づると齊しく、ひたくと行くのは跣足で。その

顧みて立つたのは、半ば頹れた山門の石だたみの前に、荒天を白く掃く銀杏の巨樹の根であつた。

——白濱山、緑雲寺である。

「行けよ。」

と、白い手がさしづをした。その時まで、肩にとまつた一枚の銀杏の葉が、梢に、一星の降れる如く、藍を溶かし、浅黄をすかしたのが、幹の夜目の高さに美しく描かれた。

「何をこくだ、此の作は——おらが店前へ突立つて、魚にあたつた話を大聲で饒舌るといふ法があるけえ。」

茶とも、鼠とも、濼色を埃で捏ちた、擬ひパナマを芋重被りに、鍰の挫げた下から、落窪んだ目を、血目と云ふ赤目勝に光らして、頬から頤へ一面の不精髻の口端を尖らした爺の魚屋——魚屋か知らん——おらが店前……と喚いて、魚にあたつた話を憤つたのであるから、其に相違はあ

るまいが、一見した處は、ばさら屋の、然も河豚賣と言ひたい。
日中だけれども、露店の片隅へ、かんでらで出るやうな腐れ板を兩馬で支へた上に、恐るべし、慎むべし、江海無鱗中の大悪魚。其の形、略鯨の大なるに似て、肥太り、眼に金色あつて、およそ魚族の中に、此の眼開闊すと云ふ、邪相を顯はし、鐵漿齒を豁出した、腹の滑々と白きと、背の膩脂と黒きと、仰向けに、俯向けに。しかし店の割には、ちよぼくと手許に内端に七八尾。其の仰向けにしたのは、腹に斷割の庖丁目が入つて、一つかみづゝの白子が、小人の國の雲の峰に似て、ずる／＼と蠕まる。右の端に、血黒く、肉腐なる大ぶりの鯨つきの頭ばかりを堆くこつ

重ねた、また前ならびに突出したのは、タカベ、ニベ、黒穴子。またゴンズイと云ふギンボウに似て毒針の鋭いやつ。舌びらめ、魷、魷、魷魚と云ふ變なもの。そのほか小鯖も、鰻も、青、黄なる、べらの類も、どれも鰭尾が半ば溶けて、なかんづく、不氣味なのは、さよりの長いのが、どろりとして、畝つて交つた、唯海蛇のないばかりの一山で……

爺の曰く、皆これ鮫鯨の一度呑んだ、其の胃袋から顯はれた、小魚で、人間の胃腸に取つて、これほどの良薬はない、と言ふ。……ぶりを土用に賣り、鯨は四季に鬻いで、むつはお惣菜でなくなつた、當節の事である。まだ薄寒いと云つても六月のはじめに、或は鮫鯨を開くかも知れない。しかし、一山、まるで以て海鼠腸で和へたやうなのは、魚市の陽樽から摺み出した、と見るのが確らしい。

賣りものはそれだけではない、臺の下に古莫塵がかゝつて、上を桐油紙で包んだ荷籠の中から、およそ、籠一杯ほどの大河豚が、さながら新墓を發いて、女の死骸を引出したやうに、仰向けに白い腹が覗かれて、ひかへのゴンズイが、蛭のやうに動いて居る。惟ふに、密賣して同好に頒つ、虎斑の特別の逸品らしい。

この陰慘たる魚塵を領した爺は、汚れくさつた手木綿の古單衣をぢん／＼ぼしよりで、肩繼ぎ、裙繼ぎの唐棧柄の双子の羽織を引掛けたのであるから、益々魚屋の風采でない。——聞くにつけ

て、おなじやうな、髯むしやの瘦こけた爺が、幾年かの間、佐竹原邊の露店で、鼠捕……石見銀山ではない、彈機仕掛を賣つたのを、作者は覚えて居る。――

時に、爺が腹中の籌策の、殆ど端倪すべからざるのは、河豚を賣るのに、寺の裏――竹垣は、一重破れなりに隔てたが、石碑も、塔婆も、少し奥には新佛の白張が漏れる墓所の前で、即ち是背水の陣である。

――前段の續として、この寺を、白濱の里はづれの縁雲寺とあやまられては不可い。

墓所は、すぐ山のすそで、温泉の廓から狭い家並を縦横に隔たつた、村近間の片側町で、二日おき三日おきぐらるには、こぼれ市が此處へ立つ。

となりは、大道の古着店で、霜げた古女房が、それも賣りものの足袋を繕つて居る。……づつと離れた、バナナ屋の前には、二三人、人立ちがして居るが、……いま其の次第は言ふまい。海近い土地も、日かげの此處等は、あらしのあとの散り亂れた樹々の葉も、其のまゝに、土もぬかるんで居るのであつた。

其のバナナを賣るあたりから、段々町へ入つて、小料理屋、鮎屋、蒲焼屋など取々に、藝妓屋が交るのである。

「だからよ、誰も中毒つたとは言やしない、目をまはしたと云つたぢやあねえだか。」

でバットを吹かす、この若いものが紺の腹掛の上へ、白地に蝙蝠を紺で染めた、去年の揃衣を着て居て可笑い。いづれ其處等の廂間から湧いて來た、關東焼と稱ふる鰻屋か、東京鮎などといふの、出前持か。酢屋、油屋の何ぞであらう。晩方からは何うかは知らない、眞日中の目鼻も伸びて、翼を際さうな顔である。

「目を廻せば尙ほ悪いがい。少しぐらる中毒つたら、鹽ンばを舐めとけ。」

頬をびく／＼と、目では睨むが、爺は憤つた様子でない。若いものを倅あつかひに、半ばからかつて居るらしい。

「一々そんなに尖がらかなよ。」

と、のう／＼と踞むと、下ぶせの莫塵を一寸まくつて、大河豚を覗きながら、

「かますの面ぢやあるめえし、賣りものやうに、些と、腹を大かく持てや。」

「此の倅が、しやうもない。河豚は怒つた時、腹を大きくするげえ、しやツ、しやツ。」

と痰のからまつたやうに、咽喉くびへ息を引いて、鹽辛く笑つたが、

「ほんで、何けえ、其の鰻で目をまはしたと云ふ阿魔子は、」

「罰が當るどう。阿魔子呼ばりしをつてよ。どえらい別嬪だでな、和倉はじまつてから、おら見た事がねえ。」

「ふん、お前が生れてからちつて、これ、幾年経つものけえ。」
と又赤睨みに、煙管を捻くり、

「ま、可いわ。——聞いても悪くねえもので、別嬪として置けちや、が、別嬪にも、天變にも
鰈にあつた例はねえだ。……うんにや、待ちろよ。——越中の神通川に、むかし舟橋のあつ
た時分、淵のぬしが莫大な星鰈(いし)を云ふ方言でや、人が橋を渡る時、ひらりと顯はれるだ。
背を見せる時は眞つ暗になるばかりだげな、腹を翻すと、此の光が日をうけてパツと輝んで、渡
るものは、目さ眩んで刎ね落ちる處を、男でも女でも引啣へて喰つたげだがや。——化けてな、
夜さり月夜に橋を渡る姿といへば、京上藤の被衣をかけた格好だ。……」

「よせやい、爺的、そんな古い話は——おらのがは今日の事だ、今日の朝だ。」
「まんづ、何處けい。」

「何處にも彼處にも、鴻仙館の奥座敷よ。一昨日の晩げえの、あの一暴風雨で、海を強くほどで
たもんだで、魚がまごついて居べいでな、——足袋屋の六造よ。」

「あの、次男、拙な癖に好きな倅だ。」

「この錢儲けのせち辛さだ、釣でもあんめえに、波止場の方は、それでも餘程の人が出た。方々
のお客まじりで、鴻仙館の裏棧橋は、ちよくら通りがかりでは様子に分らねえもんだで、此處が、

土地のものの附目だい。——足袋六め、今朝——それが滅法早い、夜が白むや白まないに、カア
と鳥になつて、一羽、彼處へ、羽ばたいて留つたのよ。

釣つてるとな、然うするとな、爺的、からく、からくとうしろで硝子戸の開く音がするだ。

それ、塀の中でよな、煩い、と思つたくらるだつてよ、こんな事で氣が散るやうでは餌を抜か
れる、もう青鱈が一尾と、鮎並の小こいのが掛つたとかで、奴は夢中だ。

處がです——

蝙蝠浴衣は急に更つて、

「これが二階の戸だつた日には、足袋屋め、釣どころではない、沖の島を背中にして、明神山を
横にして、立つて拜む處だ。——何しろ、暴風雨の前……あの日の午過ぎから、棧橋際の、あ
の狭い處を、ぞろく、ぞろく、其の人通りと云ふものはよ……いまの別嬪の出現で……」

おらも其時、見ただがな、誂へ通りに、二階の縁前へ出て居るとばかりは行かねえだ。また顯
はれた處でよ、七段目のお輕が欄干に凭れたやうに、見物に見せるでねえで、姿が顯はれると、
大概は遠く沖の方を視めて立つた。——遠くを視めて立つと云ふものは、見る方でも遠いもので、
二階と塀の間に霞でもかゝつたやうで肝が煎れらあ。

藤椅子に腰も掛けたがな。また海ばかりも視めては居ねえで、うしろ向きに——此處で言へば此方の見當、田鶴濱、白濱の、輪島街道を見はなつとるで、——朝の間、二三臺自動車が其の方面へドライブしつけ。畜生、野郎の販りさ待つでねえか。然ういへば何となく、其の様子が落着かねえで、寂しげだ。その又寂しげな處が、小しをらしくて堪んねえ、椅子に袖を、しんなりと髪を傾げて、肩を細らこくした頸あしの好きななんといつちや、爺的、ほんとうに見せたいぞう。「見たくねえ。」

と、外方を向く時、ずる／＼と崩れ出す、鯉の臍白を見つけて、河豚の間に挟つた、研滅りのした出刃庖丁、割目を繩で結へて、血の浸んだ柄を取つて切尖で搔寄せた。

「それでもよ、これが、何うでえ、肩から、乳、胸、えへッ、白い脛まで、衣ものを脱いで温泉に浸つたら、和倉は何う云ふことになるづらい。其の時は、屏風崎の波へ人魚が浮上るだ、なんか云つて、衆が騒いだで。」

三度めか、四度めに、おらが密と通つた時は、其の座敷の欄干に、粹な手拭が濡々と掛つて居るで……入浴つた、入つた、入つたわ、いよく以て湯に入つた、は可いけどな、出て來ねえだ、其ツ切よ、二階の縁へ。——

だけれど色氣が堪らねえ、第一、い、切がすらい、ぼーつと膝下まで、……此の壁は梅ぢやあ、

手拭だけでも紅提灯が點々、今夜は——夜市が立つてい。——言ふうちに、……あの、颯風だ。よく出來たら、海の方から吹きつけたで、手拭の奴は、座敷の中へ舞込んだ。あいつ、羽が生えて、白濱の方へ、中庭を抜けて飛ぶべい。勝手にしやがれ、海へ落ちたら、泳いでも、引握んで、羽衣にして、あの……歌がるたの……雲のかよひぢを、てい、強請るべいもの。

昨日は、そのあらしが、すつかり女に成つて、和倉の湯へ吹込んだやうな、織元聯合の女工慰安會で、海も、宿も、歓迎の旗と、赤い蹴出しで充滿だ。土産の虎屋の饅頭より、土地の彼岸の牡丹餅で、それに紛れて居たつけが。——なあ、爺的。

その別嬪が居るだもん。お前、足袋六の奴、二階の戸が開いたと思へば、幾室並んで居らうとお月様の出る山で、其の方角を見ないぢやなんねえ處を、下座敷だで、けろり、くわんとして、精心を亂さねえ。

膽が据ると、えれえもんだ。ぼうと當つて、おつと撻めたわ、ぐぐつと引くの、しばらく合はせて、あ、大ものだ、が、黒鯛にしては、と、どき／＼もので、鬼の牙に觸る氣よ、びりびりと抜いて、ヤツと引くとよ。あわて鰈(方言蒸鰈をいふ)が一枚、スイと上つて、朝靄の中へ、

スツと、月夜の遠い案山子のやうに見えたつけが、ひらくと尾を振るだ。押魂消てよ、爺的。
— 其の神通川のぬしぢやあないが、絲を手繰つて天上するではあんめえかと思つたはずみよ。

(あれ、釣れた。)

と、其の縁で、朗かな女の聲がする。

「何が朗かでえ、しゃッ。」

と苦笑ひして、河豚の肚を、皺びた指で一つ突いた。

「肝が煮えらあ、今日は、新佛の來あしが遅いで。」

「お葬式が来るだかね、爺的。」

「人間の残骸を何うするものけえ、背後の卵塔場へ來ようが來めえが、そんな事に頓着はないのぢやげい。おらが店へ來る客を、新佛と祝つて言ふだで。——おなじ話をする氣なら、——陰氣な聲で——と言はねえけい。」

「皮肉をいふなよ、其の癖やつぱり聞く氣で居るだな。も一つ吃驚した事には、其處に、しつとりと、ほんのりか、朱鷺色ちけな、足袋六は、よく知つてら。あの水紅色の縮緬で、其の別嬪が霞んだやうに立つてるだ。女工連の團體騒ぎか何かで、座敷が取替つたものらしい、——すぐ、

其處だ、その長襦袢が。

(釣れましたア)

と、奴、うっかり野放圖な聲を出したで——何だ、……うぬの方が釣られて居るだな。足袋六、面食つたもんだから、鉤を抜くよりさきへ、棹を離して壓へたとよ。さうするとな、爺的、ガラリと音がして、鴻仙館の黒塀の裏木戸が開いたと來ら。」

——隠居が中尉の船いぢりを危んで驅出したのは、温泉の廓へ向つた横塀で、蝙蝠が此處で話す裏木戸は、中に道は隔てたが、明神の山の森が梢を分けた樹立が茂つて、枝には藤が咲残る。

「其處ン處へ、胸から裾まで、ぼつと、その朱鷺色で顯はれた、と來ら。素足に庭下駄を突掛け、と來たぜ。」

「しゃッ、よく來やがるな。」

「いまに新佛が來ら、まあ、聞きなよ。それが活きた女で、ふんと其のい、香と一所に、棧橋まで浮いて出たんだ。ほかに誰も人は居ねえし、身投げをするんぢやねえだもの。おのれの身に來ると思へば、足袋六め、じわく、ぞくく。……

やあ、年紀は少し東京ッ子は、えら元氣だ。朝は寒いぜ、それなのに、そのなりは、と思ふと、

慌てるなよ、爺的。」

「何て状けえ、其の口の端を何うにかしろでは。」

と起身で吸殻をすぼくと拂く。

「う、其の、乳のふつくりと、透けさうな胸を、白博多に藤色の獨鈷とかの伊達巻で、細そりと、こゝがものだ。——薄青ツこい半纏を着て居ただが、通し黒襟の廣袖とかでよ、誰が見ても、へい、男ものだ。野郎の衣服だ。」

と云つて唾を吐いた。

矢野のものなら心當りがある。紺地に藍のらんたつ縞のお召で、お澄をばさんが、其の人形の夜寒を厭つて、よそゆきを直して着せた半纏だから、蝙蝠の憤懣に値しない。引返しもので、繼ぎのあたつたのを、北國の旅の要心に、鞆に納れたものである。

「巫山戯て居やがるぢやねえだか、此處だ、慌てるなど言ふのは。——これさへなけりや足袋六の奴、何だつけなあ、それ、其處等で藝妓が譚ふだ、——兜も鍔もか、首でも持つてけと言ふ處を……考へた、しばらく考へた。——」

それといふのが——褌を合せてこゝみ込んで、きすと、鮎並と、いまの鰈を覗いて居つけが、姉さん、姫つ子、おくさん、妾か、いろか、おくせん、何て言はうかなあ。」

爺は手首を少しばかり、不精たらしく、庖丁で板を叩いて、

「穴子とでも、にべとでも、河豚の腸とでも、鰯の臍とでも、何とでも吐かせ。——はて新佛が來せねえわい。」

「そいつは、何うもその勿體ねえだ。……癩は癩だが東京なみに……姉さんだ。——譲つて欲しい、といふだな、(あれ、刎ねる、)とかいつて、手つきで、半肩遁げながらよ、(賣つて下さいな、)と來た。」

「來たけえ。」

「きたぞッ。」

と、大乘氣で蝙蝠は、ふはりと飛んだ。

「其處を——男ものの廣袖にこたはつたで、(おらいち、商賣ではねえもんだで、)何か言つけよ。(い、)でせう、後生だから。こんな泳ぐのは、はじめて見たわ。……と此奴は然うだらう。まあ、そりやお望みならば、と勿體をつけるうちに、いれものと、もう極めてよ。裏木戸を入つてから一寸間があるで、奴は、兩腕を組んで、其の間、つくねんと、浪打際で磯蚯蚓の脈を引くやうに考へてる處へ、金盃……」

「金盃……」

「洗面臺からはづして来たんだ。——半分ほど汐を汲んで……なあ爺的、こゝで腰に蓑をつければ、いつかの明神様のお祭りの踊屋臺だ。……あれは、村雨か松風か。」

その汐が、もう、うつすりと白粉の香がするもんだから、面くらつたのは鯨どんよ、龍宮の化粧の室だか、極樂の蓮の臺だか、陸の花ざかりだか差別がつかねえ、で、おとなしく、ぼんやりして居る。……

「いくらに賣つたてけ。」

「さあ、それがよ、藍ッほい寝ン寝子一件だから、慾にころんで、しめて遣れ、だけれど、又其の媚かしいとも、艶ッほいとも何とも言へねえのが鼻ツさきにあるだでな、斷念めても色氣が出て、思ひ切つて吹掛ければせす、むずくして、鼻ばつかり白粉にびこつかせるで、別嬪の方ぢや——何しろ其の衣装だ、……手間が取れるのは辛かつたらうで、(可いわ、あとでお帳場へ)——てきばきとしたものよ。——(帳場でお代を取つて下さい。矢野——と言ひます。)きつぱりとしたものよ。白い踵があつた黒堀へかくれたけがな、……」

となりの古着店と、些とばかり地を分けた、其處はもう横が竹藪になり、うしろが畑になる、畦の日向草の三時さがりに、石盤色の古中折帽をぢかづけに枕して、爪さきに穴のあいた緇子の紺足袋を草履なりに踏伸ばし、瘦せた両手を胸さきへ肩を抱くやうに引掛ぬいて仰向けに反つて

寝て、鼓草のほうけを吹き飛ばして居た、四十ぢかな男が此の時ぬくりと起直つた。

長くした髪が、鍔下から溢れて居る。鍔金らしい、金縁の目金を掛けた顔面の憔悴した、その嶮相は、迫つた眉にも隆い小鼻にも蔭を刻んで暗く顯はれたに似ず、くんなりと軟かな片膝立になつて、其の膝へ巻いた肘に、頬を押着けるやうにして、たとへば脇の下から覗く如く、白睨みの薄目でじろ〜と河豚爺と蝙蝠の對話をぬすみ聞いた。

これは、近頃何處の浦にも、よく見られる、いかさまの萬年筆を賣る人物で、手摺れて兀げに兀げた、三毛猫のやうな折靴を壓にして、地板二三枚敷重ねた、土地の古新聞の上に、賣品が並べてある。

昨日の、其の女工の大慰安會の幾團體を目的に流れ込んだのが、こゝにこぼれて柵んだものであらう。河豚の肥腴なるに對して、恰も黒く瘦せた泥鰌に類する。

爺の眞鍮煙管は、ゴツンと腰に納つた、が、蝙蝠の煙はいやが上に濃く上つて、

「——錢高は言はねえ、言はねえよ足袋六の奴。あとで帳場から打奪つたのは。……言ふと、それ、おらに奢らんばなんねえからな。それよりか、大變な事がある、別嬪のかくれたあとから、奴は密と其の木戸へ忍び込んだぜ、爺的。」

堀裏の庫納屋まはりには、古箆がいくらかもあるで、そいつを一本尻べたへ隠して持つてな……」

「何けえ、其の狐の尻尾を出したやうな状は。」

「其處が智恵だ——鴻仙館は、あの大構へで、もの事ゆるやかだからな、庭の中は何處を抜けた處で、一々咎めだてをするぢやあねえども、其處は要心よ。爺的も知つて居る、あの堀の中には、湯の神様を内で祭つた、小さなお堂があるだ。」

朝がけにお詣りをしました處、お鳥居前に、大分、其の藤の花が散らかつて居りますで、御冥加に掃寄せます、とよ、言ひぬける智恵だと吐かす。

「吐すけい、しやツ、あの次男坊、其の智恵を足袋につかへば、能登の國産も出来るだに、むだな倅だ。」

「な、藤の花を掃くと吐いて、緋縮緬を覗く氣だ、畜生め。」

萬年筆屋の、こけた頬げたが、立膝の上で傾いて、又尖つた。

「座敷の客は、いゝ氣なもんだ、しめても硝子戸と、障子の嵌込と二重に透して、坐つてて、灣も島も寛々と、うぬばかり眺める量見で居るだらうが、其のまた二重を透かしてよ、海からも庭からも、外道がこそく〜と見て居ると知らねえだ。床が二つふつかりと取つてある少しかう亂れてよ、霽が藤の花にかゝつたやうに。」

「床が二つ。——」

爺は苦々しさうだが、何故か、ほつとした面構をする。

「箆を尻に附着けて、大な杓脱石と、高縁の間へ、眼球を出して覗く奴には、それがよ—好いこととか、悪いことか分らないが、—床の間の方が別嬪の塗枕だ。野郎甘いと見えて、下座に敷かれて居やがる。……」

其の爺的、床の間へ、鯨の洗面器を据ゑたとよ、金魚の氣だらう、いゝ氣なものよ。しばらく、九の字なりになつて見て居たが、枕許を密と通つて……はてな、と來ら。背後向きで寝て居る野郎の頭の前へ端然と坐ると、少し顔を横にして、野郎の毛髪を二三度撫でて、一寸唇の動いたのは、ものを言つたらしい。——靜に起したのだらうと思ふが、罰當りめ！起きない……と、恚う其の足袋六が話すのよ。」

「當前でねえけ、お前の知つた事ではねえ。」

「其處で別嬪が——敷島だか何だか巻蓑を一本抜いて、燐寸を摺つた……處で、又……はてなだ。いきなり吸はねえ、堅氣だな、内端だよ。燐寸の燃えるのと巻蓑をくつつけて、フツ〜と吹くと、それ火がついた。其奴を、野郎の口の邊へ持つて行つたけれど、まだ起きねえ……でな、自分で一吸ひ吸つて見つけ、艶麗に浮んで、コホン、コホン。」

と、くにやりとして胸を擦つて言ふ。

「止さねけえ、てめえで阿魔つ子の呼吸を吸つて、身體の痺れるやうに言やがる、いやな奴だ。」
「それでよ、火のついた處を剪刀で切つて、灰吹へ落とすと、着て居た寝子寝子を込らかして、すつと脱いで、縮緬の腰がしなくと浮いたもんだから、思はず、なんまいだ、と稱へた、足袋六がよ。

けれどもだぜ、爺的。別嬪は、其中へは摺込まずに、柔々と、自分の寢床へ入つたもんだ、一つ、ふはりとして、搔卷がスツと細くなつて、其ツ切りよ。

春中合せで——ひつそりと静まつた。何うもお目覺が早過ぎたから、もう一寝入り、すやくと來たらしい。見えない顔だが、眉の上あたりへ、ほんのりと花か蝶々か、ぼつと薄い影が浮上りさうに思はれたが、熟と視ると、晃々と目が青い。蜻蛉の束髮簪が寢息に幽に動いて居るのだ。其のうちに——床の間の洗面器から、鼈が首を出したやうに、ぬつと持上つたのが蝶の尻尾……と思ふと、ひらり、や、それこそ、ひらりだ、飛ぶと、刎ねた、刎ねたの何のと、枕許へ、びちぴち、ぴち。が八寸餘の蝶ぢやねえか、緒で踊る、宙へ翻る。突張る、反る、疊をた、らだ。途端に、お前、刎起きて、襟をくづした別嬪の驚きやうがよ。あれえで、もろに立つと、ちらつく裳へひらくと刎返る尾緒にくるくると絡はられて、キイと遁廻ると思へだ。覺悟はしても、一度寢忘れたらしいから、どつちが夢だか分るまい。足へからみつくのが、中くらの河童に見え

た、足袋六の目にもよ。それだもの爺的、悶へる拍子に、だて巻がするくくと解けるとな、燃えるやうな緋縮緬が朱鷺色の下を舐めて、蝶と一所に上下に狂ひながら漸と揉みからんだ白い處へ……此奴怪しからんと思ふが、考へて見れば蝶の方が道理だ。奴は火を逃げて雪の中へ潜る氣だ。い。(あれ、あれえ、) (何、何うした。) もう野郎は先刻起きたが、火事だか、海嘯だか見當がつかない。かなんだらうよ。——何うした、何うした、何がなし、坐つたま、両手を舉げると、弱腰をささへ、肩をしめて、膝へ横抱きに抱込んだ、確乎と……」
疲せがれた萬年筆屋が、聳やかすとよりは、肩を尖らして、胸に手を組んで襲つて來た。
「大分、面白さうな話でないですか。」
折靴は手に持つたが、中折帽は脱いで、うりものの上へ覆つて來たから、長い毛髪が、半ば逆立つて居たのである。

其の白眼で、じろりと見られて、蝙蝠は氣を挫かれたやうに、

「やあ。」

と唯言ふ。

爺は構ひつけず、無頓着で、

「そんで、目を眩はしたといふのけえ、……阿魔子は。」

「うん、白つけえ脛のぶる〜と震へる、其のお前、爪尖に、あわて鯨は、へたりと草臥れてら。——急いで寝ン寝子を取つてな、薄りと青く、別嬪の乳から下を、野郎が引包んで遣つけえが、半分水へ浸つたやうだ、色氣がな、そして浪打つ。其の時よ、女の瞑つた口許から耳ツ子の根まで、桃色に紅くなつた。」

「ちえッ。」

と鴉のやうな舌打して、金縁は、藪の暗い方へ面を背けた。

「足袋六は這かゝつて居た、沓脱を乗出す拍子に手が這つて、庭へスットンよ。了つた、氣がついたと思ふから、木戸口へ通げた時、硝子戸が開いたつけ。——（おばけが、泳ぐよ。）」野郎の聲で、真正面の海へ、菱形に煽を切つて、どぶんと——な……甘くやつた、鯨はしめたぜ、鯨はしめたが、棧橋へ驅戻つた足袋六はみじめを見た。

何故あんで、と言ひねえ、置忘れた釣棹がひとりでに、波を歩行いて居る。」

「變だな。」

「何、變なことも何もねえだ。餌を附放しだもんだで、小黒鯛でも啣えたらうが、また悪く海が平でな。其の上を、二三尺ついで〜ついと、それ、あれ、手の届きさうな處に行く。……だもんだから、奴は氣の上ずつて居る最中だ。うか〜と、追つかけに海を歩行く氣で、浪へ足を出すと、どぶんと〜と沈んだぜ。」

「おやつかな、呆れもしねえげ。」

「ちえッ、はッはッ。」

と、たゝきつけるやうに、金縁が胸を絞つて笑つたが、

「其處で浮いたですか。」

「足袋六かね、え、目から、鼻から、辛い奴を飲んだですね。」

「うぬ等、畜生、人に鹽を舐めさせよつて、——其の婦は高岡（越中）から一所だつたですよ、僕と。……鯨が可恐い、馬鹿にするな、そいつを又引抱きよつて、おばけを棄てたと、生意氣な、われ〜は河豚の血といへども飲まずんば！ 腸といへども食はずんば！」

「あ、これ何するけ。」
いきなり、残骸を入れた、血みどろに骨皮の浮いた、腸樽へ手を突込んで、飛沫をかへしたのに驚いて爺が言つた。

「啜るんだ。はあ、」

と大息を咽喉へ引いて、

「飲むんだ、食ふんだ。」

「食ふなら食ふやうにするが可いげい。」
爺は蝙蝠と目を合はせて、

「まあ、落着いてぢや、ね、吃驚したげえ。」

「分つた、可、落着くぞ。」

と、悪く静に、搔汚した拳のまゝ、折靴をぎし／＼と開けて、一綴した洋半紙を、四五冊懐中へ抜取つて、蝦蟆口を袂へ投げると、口が開いたか、ちやらんと鳴る。同時に體をぶる／＼と半廻りに、ぴしやり折靴を足許へ叩きつけた。

「食ふなら食ふやうにしろ、と申されました、でありますな、します、いたします、食ふやうにします。」

とぐいと、脇の下まで見せたまくり手を、綻びた袖口へ突込んで錢を鳴らした。

「買へばよろしい、幾干です、幾干ですか。」

「はて、何をあげますけえ。」

「血、血、血だ。」

「……………」

「血は賣らんのか。」

「賣るだとも、賣りますだが店の估券にかゝはるで、古い血は賣られましねえだ。何の血がお望みだね、——人間のほかに——えゝとござりますものは、タカベ、ニベ、黒穴子にゴンズイ、鯨の反吐の類——表看板は河豚でござい。」

此の爺的、海へはまつた足袋六の比ではない、好んで山鹽も舐めたしたゝかもので、びくともせぬ。

青帽女子

「勿論、河豚だ。」

「一頭、五錢ぢや。」

「くれない。」

たゞきつけた白銅の、朽板の上で馬を傳はつて踊るのを、爺は庖丁の柄で、コッソリと留めた。其の出刃を返す手で、ぐわんと頭を離すと、切口がはせて、河豚の面はびくりと脈を打つて動いた。

「ぼう、活きとるわ。」

その首が腸樽でパチヤリと刎ねたのに、蝙蝠はあとへ引く。

「死んだ魚とは味が違ふ、魚軒で食へる。」

帯朱暗紫の臍もつを、どろり／＼と抜いたが、

「此の肝は何うするけ。ギラ／＼と黄褐の光澤のぢや。」

「何でも食ふ、食はずには活きたられん。」

「話せるわい。」

無精髻で、ガクリと頷いて、口をぱく／＼と動した、河豚ではない、此の爺が笑つたのである。

「大切な客人ぢや。悪い事は言はぬで、此の肝だけは留めぬと不可んで。まつこと食ふならば、

此ばかりは熟煮つせえ、そら、そのかはり。」

で、悪女が鬢つけで束ねたやうな、黒い背筋へ、生切れの庖丁を一當あてつつ、

「ごり／＼と、ごり／＼と。」

切るのではない、剔つたのである。

「この料理の仕方が悪いと、生命が危え。そら、白つけえ肉ばかりにしても、水につけとくと

其の水が赤くなるちゆうは、此の背筋の黒血が、双こぼれで浸みる所爲だで、大毒ぢや。憚りな

がら、おらが手に掛けた此上、安心をするがい、見つけえよ。」

ギリリ！

「な、此の血を見せえ、黒血を。毒血をよ。」

片身へ逆つたのは、漆の蝶の如くに擴がり、片身へ流れて板の濡れめに其の末の淡まつたのは、

赤い小蛇のやうに走つた。

「庖丁貸してくれ。」

足をばた／＼と踏んで、金縁は、其のまくり上げた腕をぬいと伸ばした。

「庖丁を貸せ。庖丁を。」

「双ものは危えぞ。」

と呟いて、蝙蝠は又一步退つた。

「貸せつたらい。」

「え、。」

さすがの爺が、血みどろの庖丁を腰へ隠して、

「此奴は素人には切れねえよ。」

「切るんぢやない、塗るんだい、ちえッ。」

拳で其の黒血を攔んだと思ふと、片手で懐中から引出した——近々と見れば、細字を認めた、

野入の原稿用紙の一綴であつた。——一冊にべたくくと、塗りながら、めくりながら、塗りながら、齒を鳴らすやうに、舌打を続け、続け、

「次手に腸だ。」

と、開いた紙の面に敲きつけた。一層渠等を驚かしたのは、裂くのも、棄てるのでもなく、急に落ちて、澄まして疊んで、其處で靜に折靴を拾つた事である。——

で、人情で、はじめは手を拭くのだと思つたから、お使ひなさいと、そのために取つて握つて居た、庖丁拭きのぼろ切を黙つて引込めて、きよんとする。其の肩を……

「お爺さん。」

背後からボンと敲いた。

「やあ。」

背後と云ふのが、卵塔場で、たゝいたのが、しなつた手で、竹垣越にのしかゝるばかり覗いて居るのが、膚もあらはな若い女の淡青の帽子である。ドレス姿の令嬢である。

藪から狸でも、驚くまい。墓、塔婆、白張の前に、一騎、河豚を屠る不敵の爺、——背水の陣潰えたり。

赤目を白くなるまで、たゞ睜る。……

「頂戴な。」

むかし波斯の一國なる、黄金殿の厨人が、四色の魚を炙る時、傍の壁の中よりして、嬋娟窈窕たる美女、忽然と立顯はれ、策もて、焼鍋を覆したと言ふ、一千一夜物語を聞くよりも——こゝに見る爺と蝙蝠の方が一驚を吃したであらう。

淡青の帽子して黄柑色の洋装した、目鼻立の、白くあざやかなのが墓の中から、河豚屋を差覗いた、其姿は。——

そこに、黄べら魚、赤べら魚の形はあつた、けれども、「頂戴な」——は、それではない、河豚の一行をさしたのである。指さきで——が其の指から、忽ち小さな蜜蜂のやうな魔が踊つて、魚を其の露呈な胸へ、乳房へ吸込みさうにさへ見えたのである。

「此の事けえ。」

氣を呑まれた顔色して、御意のお肴を庖丁でおさへた爺はもとより、金縁も、蝙蝠も、唯じろじろと見上げ見下ろす。

「一頭五錢ぢや。」

我に返ると、爺は其の不敵を取返した。

「知つてるわ。」

すぐ、其の不敵を奪はれた。

「六尾ばかり。」

「いま料理でね。」

「其のまんまで可いの、丸ごと。」

「丸ごと、丸ごとけえ。」

「この、マツウラへ入れてよ。」

さすがに味噌汁ではなかつた。が、蝶、蜻蛉でも伏せさうに竹垣がくれて小さな笹をひよいと出された時、爺は再び聲を上げた。

「や、貴女は——此の笹をマツウラは押つ魂消た。なかまになうては知らねえげ。」

ぶる／＼ぶる／＼と背皮が震へて、目が動く、鮮しい處を、一尾、二尾、三尾と。——

「東京からおいでけえ。……江戸子だね。」

「違ふわ、博多よ。」

時しも金縁は、ストンと憑ものの落ちたやうに、發作の肩の聳立が見る間に衰へるとともに、顔の色にも蒼味がさし、折靴の砂を拂はうとして、唯、指も掌も、にちり／＼血だらけなのを持餘した體で、再び、腸樽の血の池を覗いた。

爺は五尾を装りながら、あはれむが如くに見て、

「その切で拭かつせえ。」

「一寸、およしなさい、そんな中で洗ふのは。新佛の前に水があるわ——待ていらつしやいな。」
裳を翼に、もう飛んで、帽子の其の青鸚哥が、日中の鼻の腹に似た杉の陰の白張提灯をなぶるのを、向うに見込んで、三個が目を見合はせた。

「何けい、あれは。」

「うむ。」

と、うめくやうに、いつて、金縁が、ぐたりと踞むと、蝙蝠は漸と一步出た。

「とに角、ばけものには違ひないだが、山のもんか、海のもんかよ。」

「それがよ、來たのは卵塔……」

もう其處へ、竹馬がまへに、竹垣へ片手が掛る。靴が匆ねて、閻伽桶が其の上へ乗つたので、至極尋常な意味だが、貝の字を描いて、道へ出た。

「お使ひなさいな。」

皆魅せられて居た。——眞珠の頸飾だと思つたのは、豆絞らしい手拭を頸に弛くわがねたので、其の下に珠数を二巻きに巻いた粒が廣いV形の胸に黒子の並んだやうに數へられて、魅惑と妖媚

の相が装束上つた。

「感謝します——貴女は宗教家ですか。」と金縁が、唾を乾かした掠れ聲する。朱い唇で、につこりして、

「當ててご覧なさい、卜筮は私の方がうまいんだけど。」

宗教家かと聞いたのに對して、卜筮をすと言ふ。金縁は謎を解きかねて、びく／＼と眉を動かす。

蝙蝠は翼を組んで、のつそりと立つて居たが、地廻りだけに、ふと思當る様子があつた。

「お嬢さん——波止場のわきに、壊れた小さな御堂がありますだね、外側ばかりの。」

「知つてよ。」

「風當りが強いもんだで、御神體はわきへ移した荒堂ですが——昨日は、女工の何團體かで、あの磯は、舟から上るやら、乗つて出るやら、松原で鬼ごっこやら、えらく賑かで、商人が、澤山出つけえが——然ういへば見たやうだで、あのお堂の中で、鬼灯の店の前で。」

「え、然う。」

「買つておいでの、は、嬢様だつたけ、洋服の色が違つて居たでね。」

「え、そりや違ふわ、蛸も海月も、波の色で。人間は場所と、舞臺面でさ。でもね、買つても

しないわ、賣つてもしないわ。」

「へい。」

「投げて居たの、……鬼灯ではないことよ、神様のお札だわ。」

爺が、口の端を、もしやく、

「そんだと、此の間から、ちらほらと見掛けるだ、あの白ツこい衣もので、紅い袴はいた。」

「私の姉さん。……」

「ご姉妹。」

「分なの……あの方は、出雲の松江よ。」

「ほんなら神巫様だ、何神様けえ？」

「扮装を見たつて、分るぢやないの。」

と長い指が帽子を弾くと、柑子色の肩をたいて、唇を指すとともに、靴足装を揃んで摺合は

しながら云つた。

「青いのが回々教、赤いのが拜火教、黄色いのが猶太教、新舊混色が基督教——黒いのが髪で、

雪より——純白なのが、私の神様。」

と兩の腕で乳を抱いた。

「真白い、
白い神様。」

金縁は、人の言語を掻分けるやうに乗出して、

「僕には分つたです、貴女は、女優でせう。お札といふのは、比羅か、廣告ぢやないですか。映画か、舞臺か、いつれ、新派、新劇團。」

「新新新新劇團。」

と指さきを刎ねて、白粉の濃い鼻を指した。

「興行は何處ですか。劇場は。」

「こゝで演つてるぢやあないこと。河豚の老爺さんと、貴方の萬年筆屋さんと、此の蝙蝠の方と、私とで、すぐ社會劇の一齣だわよ。撮影すれば、それがすぐ映畫だし、聲を出せばトオキイだわ。」

「なあるほど、ご尤だ。」

と些とも分らないのを、腹の底まで合點んだやうに、日向へ胸を張つたのは蝙蝠で。

「感謝します。僕も俳優だ。」

「誰でも、俳優よ、私の一派は。」

「おらだけは儲からねえ。」

と河豚の爺さんは呟いた。

「ご不禮ですが、貴女の一座は。」

「大勢よ。」

「お乗込みになつたのは。」

「海から。」

と額の影を青く見せた。

「……海から——來たですか。」

「まあ、汽車や、車には限らないことよ、歩行いて、と言つてもいゝわ、波の上を。」

「波の上をですか。歩行いてですか。」

「舟さへあればだわ。」

「まるツちやつたあ、——座頭は誰方ですか。」

「私の……おかみん。(註。奥州にて巫女の通語。)」

と、言つて、瞳をぼつちりと、頸の珠數に手を掛けた。

「神……お神様。」

「うつし身でおいでですから、お頭とも、お師匠さんとも言ひますわ。」

「その方が河豚を食うのけえ。」

爺は商賣を忘れない。

唯、サツクに口に掌をあてて、

内證。

「しやツ、お嬢さんは話せるで。此の六尾を幾人だけ。」

「六七人——宿では食べさせないんですもの。これから、かへりに地葱も買つてよ。」

「お宿は何處ですか。」

金縁が思ひ入つた氣色である。

「ほ、當ててご覧なさい。」

「然うでした、然う、然うでした。」

それで、お嬢さんは、卜筮をされるとお言ひでしたな。

金縁は額に下る長い毛を搔上げながら、目の色とともに白く笑つて、

「一つ、卜筮つて頂きたいですな、たとへばですな、僕が俳優を志願するとして……ですなあ。」

「トふまでもないぢやないの。貴方はもう俳優だし、いまからでも、すぐなれてよ。」

「しかしですな、しかし……貴女の一座としてですな、真劍の、真劍のお尋ねとしてですな。」

今度は毛を揉んで引張つた。

「それは、お師匠さんに伺つてからよ。」

「座は何とお言ひですか。」

「はくしん座、白、神——よ。」

「矢張り、すんでは、お神巫でねえけ。なあ、やあ、俵、何うでえ。」

「おらは、お神巫でも、女優さんでも、そりや可いだが、それにしても珠数がよ、——尼様見てえだ。」

「何でもい、わ、こんな扮装をした、人で、こ、が舞臺だと思へばい、ぢやあないの。あら、鳥が鳴いた——其のお魚を頂戴。」

箸を受けると、爺が伸上つて、

「料理れえすとも大丈夫けえ。ほか魚とは強く違ふで。……背割きというて、其處に、それ、あるだがね。見さつせえ。骨を割いて黒血を取るだ。廣い東京は知らねえだが、此の遣り方というては、北陸道に、へい、おらが外にはやり手がねえで、素人には危えだが。」

「鬼灯賣に、神巫に、女優に、尼に、ほ、化ものに——素人は失禮ね。」

と落敷いた銀杏の葉を取つて、土だらけだから、鬩伽桶でぎツと洗ふと、河豚のピカ〜と光

らす、十幾つの眼を蔽うて、尾鰭へさらりと振掛けた。

「希臘の菓ものに見えるでせう。お師匠さんからお授かりの毒消しよ。」

「お嬢さん——」

金縁が、せい／＼と肩で息して、

「志願をするとしてですな、希望が叶ふか如何でせうか。」

瞳を大きく、凝と視て、帽子が傾くと、小刻みに靴が動いた。

「然うね、……其のお返事は、輪島街道、——白濱橋へ、入らつしやい。」

「僕は、僕は、一刻をも争ふですから。」

「今夜、夜よ。」

「心配です——では、では、其時の運命をトなつて下さらんですか、いま此處で、此の場面で。」

「手を。——貴方は、藝術家ね。」

金縁の目が白い。

「河豚の黒血で、美人の髪を呪詛つて居るわ。」

「……………」

渠は唇を震はした。

爺がのそ／＼と立つて出た。

「おらが運も見てくんさらぬか。」

「手を。——お爺さんは、これ。」

と銀貨をつかませると、先刻から針の手をとめて、口を開けて見て居た古着屋の古女房が、布

子の裾を袴の如くはだけたまゝ、のそ／＼と寄つて来て、

「おらがの運は、もしい、お嬢様。」

「あい、手を。——おばあさんは、これよ。」

と、素早く、かくしを抜いて握らせたのは、小さな銀色の袋である。

蝙蝠は幾度も、手の膏汗を脇腹で拭つて居たが、

「嬢様あ。」

「兄さんは……目カ一、ちよん、ちよんの十だから……これ！」

と、キスを投げたと思ふと、破垣を向うへ飛んだ。

すぐ其のまゝ、青い帽子が振向いて、

「でもね、真個の卜筮は、一人づゝ……誰も居ない處だわよ、——いゝこと。」

で、折れ朽ちたり、倒れたり、斜に立つたり、すく／＼と亂れた塔婆を分け、苔蒸す石碑石塔

を、黄の肩裙が縫つて行く。

目も口も鼻も、凡そ丸い顔の相格を溶かして、ニタ／＼ニタと成つて居た蝙蝠が、羽ばたきをして、いきなり垣を跨がうとすると……

「待てい。」

「何けえ。」

「待たんか。」

と、金縁は眉が迫り、眦が釣つて、

「僕が先だ、いや、おれに言つたのだ、いま言つたのは僕に云つたのだ。」

「違はい、おらだ。」

「きさまが出る幕ぢやあない、身分が違ふ。」

「こん、畜生。」

二人は青帽子の妖女の一言で、ひそかに唇を恵むとでも思つての争鬭らしい。

「きさま呼ばりをしやあがつて、身分が違ふとはどの口で吐した、この大道の、いかさまし奴。」

「ぶちやがつたな。」

「不可ません、不可ません。」

鳥が其處へとまつたやうに、杉の繁りの暗い處で、唇赤く、高らかに笑ふのが響いた。

「診察は札順です——先へ入らつしやい——萬年筆さん。」

其の穴のあいた繻子足袋が、片足墓の土を踏んだ時、蝙蝠の手は早く竹垣を握りしめ、首ばかり伸上つて覗込んだ。

義眼でも剥きさうに、五十銭の銀貨を日に翳しながら、冷評す如く、煽てる如く、じろりと喧嘩を見て居た爺が、しやツと嘲笑つて、其の顔を古女房に差向けた。

「お前はんの辻占は吉か、凶か、半吉か、末よしけえ。」

河豚店の横に立つて、銀色の袋を開いて居る古女房ばかりは、日南に、ほつかりとしたもので、

「飴菓子をやうぢやがね。」

「うむ、チヨレートと云ふハイカラぢや、ホッテントットといふ國の名産ぢや。」

と、もう一度頷で掬つた。

勇ましくも金縁が墓から出た！出ると、大道の荷を引包むや否や、ものをも言はず、づん／＼と再び墓へ引返した。が、蝙蝠はもう居ない。引續いて、二人とも卵塔場へ入つたのである。

唯、腰を捻つて、抜きかけた煙管を皮の筒へ突込み状に、ふらく／＼と、然も分別ありげな面して、爺が又破垣を入つて行く。妙な事には、そのあとへ古女房が——これは関枷桶を次手に提げ

て入つて行く。妙な事には、其のあとへ、以前から少しづつ、押寄せ、近づいて居た、バナナ屋の前の人数が、一列になつて、ぞろ／＼と入つて行く。妙な事には、町から二人三人づつ、来るのが遠くから吸はれて、入つて行く。妙な事には、然うすると、斜向うの農家からも、人が出て、飛んで隣の下駄の齒入屋も、入つて行く。……

「畜生、畜生、畜生。」

むかうに、ちよぼりと、形の小さなバナナ屋は、賣品のかはりに、しつぺいもどきで、板をたたいた。町筋から牛のやうな頭を出した、耳の垂れた黒犬は、其店を蔽うて大い。ぬつと、其の長喙を嘯いて、甘い木の實を嗅いだのである。

「畜生。」

もろに振りかぶると、あとへパツと退くのを、ドと追つて、町中へ追込んだが、人よりも先に、犬は一廻りして片側道へ、今度は、まつしぐらに河豚の店へかゝつた。

鳥が一齊に、かアと鳴いて、ばら／＼と、あたりの樹へ寄つて來た、——時に、遮るものは誰もない。

犬が乗しかゝると、片馬が刎ねて、板が轉覆へつた。此の禮を失した、ばさらものの亂れた食

卓臺の下に、大なる樽の椀もりがある。……
がり／＼と鳴る首輪を見よ。大旅館、朝六の自慢の猛犬だから、食に餓ゑはしまいもの、畜生の浅ましさに、つぶりと喙を入れると、河豚の首を一口に、だふ／＼と汁を飲んだ。
しばらくすると、木の葉も、小魚も、啄み散らす鳥の中で、一唸りして、どしんと倒れて、血泡沫とともに、だらりと舌を吐いた。

半 日

晩飯の膳に——鰈——はなかつた。

其の無いのに、お李枝は、ほつと、氣の休まつた顔をする。……膳に差向つて、矢野のをぢさん、何にも言はずに微笑むだ。

お李枝が、いつまでも起きなかつたため、づつと朝餉がおくれたので、午餉は抜いた。そのかはり晩にご馳走を、澤山といふにつけて、鰈は可厭との事であつた。私は一生食べないから、と其の食べないのを、——尤も一生だからだらうけれども——太く恩に被せるやうな。誰が知るも

のか。それなのに、人にすねるやうに言つて、少々ひぞつて居る。——おほせらるゝまでもない。旅館の料理には、めつたに小魚類を使はない。注意に及ばず、煮ても、焼いても、鰯は出さない、と思つたけれど、念のため断らう、と矢野が云ふと、いや、そんな事を言つては可厭、饒舌ると承知しないから。……で、誰も鰯が何うしたの、怒うしたの、鰯が裳へ搦んだのと、そんな、そんな因縁を説明して、故に断る、とも言はないのに、言つては可厭、と怨めしさうな目をして、ツンとすねる。

右様な次第で、黙つてご馳走を誂へる事にした。が、生憎、をぢさんは鰯が好きで、當方から申出で、二度も三度も取寄せた覚えがあるから、帳場で氣を利かして、やけに鱈にして持出しはしないかと、何だ、何だ、くだらない。……

くだらない次手に——いや、くだらない次手などといふと又叱られよう。……今日は温泉に入る前に、髪を結直したい……と成程。——汽車のまんまだし、明方の亂れの舞で、目に立つと悪いほど、もつれて居る。幾度も鬢櫛は使つたけれど。——其處で、お巳代どんに頼んで、いよいよ髪結が來るとなると、……お李枝が、ワキで見居られては可厭——よく、可厭だ可厭をいふ人で、何處か、あいた座敷を借りたい。女中さん方の部屋でもかまはぬ、とさ。……これは、故と謙遜したのでも、プロレタリアたることを標榜したのでも何でもない。震災に直

面して、一度は、くるとと袂端折で、竹杖をついて焼原を歩いた覺悟があるし、踊の師匠の住居だから、小綺麗にはしてても、おのゝ長屋住居の身は、はじめから此の段は徹底して居る。勿論、そんな遠慮には及ばない。今日は團體の客もなし、空座敷はいくらもある。第一引越して來た、すぐ二階の黒猫の座敷もある。けれども、をぢさんは、自分の目の届かない處へは、片時と雖もお李枝を一人で置くのが危まれた。いふまでもない事、そんな恐怖がらせはおくびにも出つこはなかつたけれども、何となく——「長太居るか。」——が附絡つて居て、日中と雖も、三階の魔所から出て來て、悪戯をしさうな氣がしたからだつたさうである。

尤も我が座敷だけは、城郭の氣のない事はなかつた。

髪結が來たのと入違ひに、矢野は洋杖を持つただけで、身輕な着流しで、中庭から庭下駄で出た。

唯見返ると、衣桁にたぐりよせ、たゝみ掛けた、色とりどりの女ものが——つい以前まで、焼山を轉げ出した岩の欠片が、止むことを得ず禪定に歸したる狀の鞆一つ、殺風景だつただけに、一層、媚めかしく、艶に和め彩られて、其のけばくしからぬ落着さへ、描いたよりも、寧ろ刻んだ落着きがあつて、……藍の勝つた三度摺の江戸繪の、彩壁に似る。

従つて、其處を出たものは、浮世繪の女神の堂守が、化粧の室を覗いて追出された形があつて、

ぶら下げた洋杖に、破れ傘一本の趣きがある。

頭をたたくかはりに、矢野は帽子をおさへて出掛けた。

何と……そんな小説家は、時刻もかれこれ其の頃だし、卵塔場の前へ突出して、大河豚の背筋を割く、黒血と腸をお目に掛け、瞠目驚歎せしめて、凄いと、毒だとか、咳かせるとともに、爺的等の拳でポカ／＼と撲らせてやれば可かつた。

が、聞き覚えのない處を見ると、ぶら／＼歩行が、其の方面へは、顔を出さなかつたものらしい。

残念だ。

其の洋杖一本が、漂々として、宙に浮いて、軽いやうな、然うかと思ふと、一足あるくのにも、双の肩に、柔々と綾絹の凭れかゝるやうな氣のする、たとへば、間に合せの衣紋竹のやうな男が、町中のトある自動車屋を覗いて、「相良と云ふ人が居ますね、持場は何處でせうか。」——自動車屋と雖も、モダンとは限らない。澤庵で茶漬を食つて居たかみさんが、あの人は停車場詰だと答へるのを聞いて——暴風雨からまだ逢はない。遊びながら出掛けよう。すぐ其の自動車屋から、——向うの駄菓子屋で将棋をさして居た、運轉手呼んで貰ひ、乗出して停車場へ。客待の四五臺を覗いたが相良運轉手の顔が見えない。また尋ねると、七尾へ客を送つたと言ふ。偉い。……

昨日の團體は、無論、鴻仙館へもなだれを衝いたから、無理に働いては居たが、金兵衛おぢいは……今日は寝て居た。——

待合室の窓の外に、小砂利で圍つた花畑に——菊の苗が細く揃ひ、この躑躅はもう散つたが、すゝ蘭が咲いて、ほんのり匂つて、盛りは、紅と、黄、紫のチュウリップ。

さきの井戸側の幻影と、この曙の移香が、一齊に身に沁みだ。

チイ、チイ、チイ、チツ!

停車場の屋根はづれの、電線のたるんで低い、柱の横木の、際どい端に、力のありたけ縋つて、仔雀が一羽、一天の五月の陽氣に、鳥の可愛さの珠になつて、抜け出たやうにぼつと光りながら、唯、たゞ一羽は寂しい。

息の立つほどに羽を振つて、まだ白い頸を膨らませ、嘴をありつたけ、

チイ、チイ、チイ、チイ!

と聲を絞る。

「何うした、何うしたよ。」

親鳥を呼んで鳴くのである。

「おつかさんを慕つて、一生懸命なんだな、其の尖端は危いぞ。たつた一羽は何うしたんだな。」

忽爾、背の高い巫女の影が射したやうで、はつと遠近に目を注ぐと、二條の鐵路に添つて、其の影は、三つに分れ、二つに消え、一つ遙々と白い堤防の打曲る山際へ陽炎のやうに吸はれて行く。……

時に返照ヶ嶽、鉦打山、蓬達ヶ峰は、僅に一青の海を残して、三方を繞り圍む、其の山々は、俱利伽羅を續きに、雲の立山を通して黒姫山、妙高山、白根のわたり、安達太郎山、磐梯山、田代、岩木の嶽を駆け、刈田、閉伊の奥を分けて、八甲田にも連ならう。——遠き陸奥の空を思ふと、驛の彼方に、沈々寥々として、水の幻に眠れる如き、白晝の大沼の、蘆を分けて、ひとり漕ぐ田舟をさへ、我か、他かと思ふまで、矢野はしばらく夢見心に、茫然として佇んだ。

「あゝ、いろいろの世と時をすごして来た、——」
白山は別に、尙ほ高い。

「前途は遠い。」

思はず右の手を擦つた、愛撫し且つ精勵するやうに。——

チイ、チイ、チイ、チイ、チイッ!

目覚る聲に、傍に古井戸のある氣がした。

「落ちるなよ、落ちるなよ。——おつぱいが欲しいのだらう。」

そゞろに、襟を片手で開いて、胸をさしむけたと思ふと、旅の姿の蕭條たるに、曠にひとり春たけなはなる血が上る。……襟のつゝしみ深けれど、今朝のお李枝は、乳のあたりあらはであつた。

「ぢやあ、左様ならをするよ、可いかい。」

チイ、チイ、チイ、チッ!

「かはいさうに、母さんは何うしたよ。」

もののははれに、曇目に、停車場の屋根も朦朧として、人も自動車も何にも見えない。
仔雀ばかり、乾坤に唯一羽。

ひよわな脚を、しつかりと危なつかしさうに横木を踏んで、そつと、居直つて、嘴を向けると、其の向けた方を裂くやうに大きく鳴いた。

チイ、チイ、チイ!

雲が又分れるやうに、廣場を眞向うに間を離れて、張出しの下屋の廂、石屋根を、五六羽ちよん／＼と飛び、ちよ、ちよんと匆ねて、入交つて遊ぶのが見られた。

「何だ、あすこに居るぢやあないか。」

矢野は洋杖を脇にそばめて、つか／＼と廣場を横切つた。

「おい、子どもが呼んでるよ。」
雀は知らん顔で、石屋根に飛んで居る。

「あ、然うか。——もうひとりで餌が拾へるのに……甘つたれて居るのか、——然うか。」
「入らつしやい。」

すなはち驛前の休息所だ。鳶鳥に驚かされはしないだらうか、あの弱るまでに鳴きこがる、仔雀を、且は見張りをする氣。軽く紅茶を取つて、端近な椅子で息むうちに、汽車が着き、汽車が出る。

人瀬を流し、影が淀む、出入の混雑に紛れたらしい。いつの間にか、鳴聲が止んで、今度は停車場の屋根に一群の雀が集り飛んだ。

「あ、居たね。」

些とをかしな挨拶だけれど、再び中庭の内玄関から歸り、廊下を一廻りして、襖を開けた時、早や湯上りの袖の香が次の室に、ふはりと漾ふ……其の座敷の縁に向いた姿見の前に、浴衣に伊達巻した背後むきで、髪をなほして居るお李枝を見ると、渠はうつかり然う言つた。

歸途の自動車の途中から、旅館に行つて見よ、そのはずみにか、ふいと消えて、海へか、山へ

か、お李枝がなくなつて居はしないだらうか、と唐突にそんな氣がして憂慮はれたからであつた。——思つても見られよ——あの、白濱橋の危難とも言はば言ふべき暴風雨から、僅に遁れて歸ると同時に、思ひがけず、片門前の娘を此處で視た時を。——

神か、魔か、一指を操つて、浪に自動車を驅つた、全身濃き影の如き怪しき婦人が、神通、魔法を以てして、一枚、藍の光つた、肩の銀杏の葉を咒して、此の美女を顯現せしめたとばかり驚かないでは居られなかつたであらうから。

「お歸ン……」

とともに、片膝、すらして振向かうとして、聲が消えたが、
「可厭。」

濡手拭を髪にのせて、鬘をかくすのと、肩を振つたのと一所だから、白地の柳がはらくと姉さんかぶりに、頬にかゝつて、姿見の影に一靡き。

薄化粧の美しさ。頸脚は背筋から居すまひを雪に貫いた。

「結立ての髪がこはれるぢやあないか。」

衣桁を楯に、——また破傘一本で御堂を開かせられさうな権幕に驚いて、あけらかんとして敷居に立ちながら、矢野が言つた。

「……………」

手拭をやつと、はづすと、

「ご免なさい。」

と、うつむき状に、颯と紅く映えたのは、結綿の切ではない。耳許と其の臉——で、お李枝は白の丈長ばかりの低い島田に結つて居る。

「藝妓家まはりの髪結さんだつたんでせう。——（とちからが入つて）束髪はとてもこなせないと言ふんです。此の邊はまだ堅いんですつて。其の髪結さんがハイカラを結ふと、あの……どちらから見ても、をかしいんですつて、何ういふわけなんでせうね。……どちらから見ても、をかしいんぢや、あたし可厭ですもの。」

その時ね、——かあさんが病氣をして——一寸、極つたおさらひの日なのよ。……私が後見の眞似をした時の事。」

手拭の端で、頸もとの細い汗の銀粉を、とんとくと、

「こんな髪に結つた事があるんです。然うすると……今朝でせう。」
でせう、と又ちからを入れる。お化粧を直しく言ふのだから、些と辻褃が合はないけれども

「お弟子さんが三番叟を踊るのに、うしろへちやんとついて居ると其の子が踊りながら、段々小さく小さくなつて行くから、あら！と思ひますとね、其子が私にかじりついて懷中を探すから、可厭、くすぐつたいと身ぶるひをするうちに、」

きり、と褌を引合はせた。

「足に引搦まるぢやありませんか。ぞつとして……聲を立てると目が覺めて、それがあの鱗たつたんでせう。」

と、またちからがはひる。……

どうも、今の手拭さわぎで、白粉の、のりに、むらが出来た氣がするので、——結立の湯上りだし、彌々水の滴れさうな島田の根に觸つて見た白い指で、もう一度襟脚を撫でながら、

「をぢさん。」

思はず氣に振向くと、敷居際に立つた形が見えない。たゞし何處へも出て行つた様子はない。

「何をしていらつしやるの。」

「拙者か。」

と、何だか聲がはりでもしたやうで、

「拙者は、口と咽喉へお化粧でござる。」

と、衣桁をはづれた、右勝手の方で、カタリコトリと行る。
お李枝は、少し膝を浮かせて、見えぬやうに密と覗くと、
「あら、」

と、ツイと遁げて、もとの姿見に正しく、

「可厭だ、悪口を言はうと思つて。」

茶道具を置いた棚を探して、ウキスキイで——成程口の化粧をして居る。此の鑪も、ありやうはバスケットの中に、鱈立で轉がつて居たのが、いつの間にかお李枝の手で、隣國の名産、九谷焼の金々たる中に、瑠璃の光澤を顯して居たのであるが。

「あの、ね、それで、私、つい島田と云つて了りましたの。其のおさらひの時と、三番叟と、夢と蝶とが、ふらくと一所になつて……ご免なさい。」

「罷成らん。」

と恐怖い聲をして、硝子盃を片手に、づつか、づかと打通り、

「圓鬚なら、仔細ないが。」

「ふ、ふ。」

と喉のふくらむまで、又……紅くなる。

「島田とは怪しかり申さぬ。」

と、どつかと坐す。

「だつて。」

と向うを向きしなに、あはせかゞみの手が白く撓ふ。

「李枝ちゃん。」

をぢさんは、備へつけの座敷机に肘をついて、

「然うして見ると、可なり腰まはりに部があるな、ふつくりとしたお尻だぜ。」

「知らない。」

「いつも細りして居るし、今朝抱いた時は消えて居た——あ、惜い事をした。あの時それに気がついたら。」

黙つて襟をスツと扱くと、急に立つて其の腰が消えたやうに、次の室へ、半ば浮くやうに、ふいと澄まして隠れた、襖音も唯蜉蝣の羽ずれにして。

「大丈夫、大丈夫。」

と火鉢の縁をトンと音づれ、

「……消えて居たんだよ。——裾は消えて、浪が見えて、そのかはり、一面に、蓮の花が紅白に

咲いたから、此の海が、パツと不忍の池に見えたんだよ。

向うの島に、龍宮のやうな御堂が見えてね。意味が分るのね。――

あの、去年、夏土用の炎天さ。炎天は眞晝間だが、その可恐い暑い時――十時ごろ、夜になつて、李枝ちゃん、小石川の我家へ来たつくな。おかあさんがいゝと云つたから、お約束の蓮を見に、……連れてつて、と云つたらう。

毎日、九十度以上と云ふ、暑さには弱るし、稼ぎには疲れるし、寝不足だし、うつゝにへたばつて居た處へ、夢枕に立たせられたかと思ふお言葉さ――ものが、不忍の蓮見だけに。――

さらりと伊達巻を解くのが聞こえる。其處へ遁げた急な身じろぎの今とて、又かすかな蜉蝣の息づかひ。

「あの時は弱つたよ。」

「……………」

次の室は、まことに静肅。

「成程、考へて見ると、其の以前……數枝おつかさんたちと一所に、ご飯を喰べた時、入谷だの、團子坂だのの話をした――李枝ちゃん――李枝ちゃん。」

「來ては不可い、まだ帯が緊りません。」

「殺生禁斷の場所だね、――道理で、足もとに魚が刺さる。」

「可厭だ。むず／＼する、ご覧なさい、下メがずれたぢやありませんか。」

「……不忍の話をして、蓮見に行きたいと言つたから、偉い！と思つた。近頃では梅雨時に、紫陽花が少くなつて、山の手住居の樂が一つ減つた、――入谷と云つても朝顔を思出すものも少なくならう。」

……それ、李枝ちゃんが、今度倉へ……奮發、――冒險か。大旅行をする機かけになつた、電車で逢つたと云ふ二人ね。何うも背格好、様子か以て居る。一人の目の大い人は、山の手に邸があつて庭が広いから、私の許の南天燭だの秋草が里子に行つて、つけ届もしないのに、優しく育てて居て下さるんだし、もう一人は淺草に生れて淺草に育つたから、蟬を知らない――嘘ぢやあない、蟬を知らない。が、朝顔が大好きです。其の(朝顔)を題にした、露のやうな優しい小説さへあるんだがね。――震災後、日暮里へ越した處が、諏訪の社のあたりだから、場所といひ、町にも道にも咲きさうなものが、何處の垣根にも、鉢植にも咲いて居ない、といつて、寂しがつて居なすつた……と云ふ世間になつたよ。

……處を不忍の蓮――と來たんだから、杯を上げて賛成せざらむと欲するも得んやだつたらう。劇場歌舞伎に行くのが貴婦人令嬢とすると、もう今ぢや、蓮見の娘は、天人の部だと思ひ候へ。

尤も、蜻蛉ほどの羽衣ですがね。」

「……覚えて居るから。」

「あ、わすれない、あの時の約束だ、忘れはしないが、弱つたよ——暑さにまるつて腹工合は悪し、酒はのめず……蚊にばかり食はれて、のつそりして居る。蚊遣がと云ふとね、其のお盆に、李枝ちゃんくれた、瀬戸ものの藁屋葺一軒さ。破れ障子と、破風の窓から、兩方へ、ふつと煙を吹出すのに、渦巻の線香が仕掛けになつて居ようと云ふ。——あれは何だね、矢張り片門前の内にある、一家の箱庭から案じついたものらしい、な、小宅も其の通りさ。其のあばら屋へ、夜中不意の、來臨。さあ、づつとといった處が蒸々して堪まらない内だから、門の縁臺へ連れ出さんだ、お待ちよ、一つ家のあばら屋へ來臨で、縁臺へ案内と成ると、天人よりか、お月様の影らしい。宵でないから、三日月でないとする、……さうだ、二十三夜様だよ。」

一夜、月のお宿をした。嬉しかつた。ゆかたの秋草が、蚊帳の中にしつとりと咲いた。

夜あかしは平氣だが、何しろまるつて居る處へ、翌日の稼ぎがある。自動車で飛ばして直ぐ歸れば、とをばさんも言つたけれど、揚出しへ寄らないぢやあ……寄れば酒だし……内へ歸つて、茄子汁ぢやあ寸法がつかないし……あやまり入り候て、朝歸るのを、引留めて、内で行水をつかはして、家内の鏡臺で化粧をさして……此の計略すべて無錢だね。あまり不本意だから、歸るのを送りながら、方向を深川へかへて、月島で涼んだつけかな、あの月島の橋の袂へ、をばさんと三人で立つた時は、佳い風だつた。洲崎の蘆から、鶴の羽搏くやうなモオタアが開こえて、暮れか、つて、波が石垣を、裳まで煽つた、が、ツツと、何故か紅白の蓮が開いたやうに見えたよ。

——今朝も、其の通りさ、膝の上で紅白の……

あ、丁ど此のくらるに暮れか、つて、……月島が。

小説家はむくと起きた。夢を見たのではない。ドタリと寝轉んで、襖越しに饒舌つたのが、お李枝の水際立つたお太鼓の帯腰に、吃驚して起きたのである。——お師匠さんのしつけと言ひ、身じまひのあとを、伊達巻で居るやうな女でない。

ちやんと手をついて、

「お歸んなさい。」

停車場から歸つたのを、いま更つた挨拶に、

「何、歸る！」

と吃驚して、自分で呆れて笑ひながら、其のうつむいた島田を見た。

「プラチナの簪は。」

懐紙に挟んだのを、キラリと抜いて、

「まやかしよ。」

「お、蓮池を、天人が、蜻蛉が飛ぶ。」

と、たそがれの火鉢越に、浪かけの机に取つた。

其處へ——蝶のない膳が運ばれた。

半夜

「新に燭を取つて明るくして……と云ふ處だが、電燈だから其には及ぶまい。——尤も悪く捻ると消える。」

と、口は串戲のやうに言ひながら、矢野の酔覺の目は水のやうに澄んで、熟と瞳を注いだ南天燭の根の、其處にみだれた花は、雪のやうに色も冷かである。

敢て南天燭の根と云ふのは、机の上に一幅の掛物を、半ば以上巻込んで、其の南天燭の根に添へた、らく欵の女文字を、凝視めて居るからである。

宋の間を背後に相對して、お李枝は、一筋のおくれ毛もなく、端正と袖を膝に重ねた處は、此のをちさんが先生だと、弟子も綺麗ごとの繪の門人と云ふ姿であるが、目も放たず、掛ものを見詰めるのを、その姿態で居て……言ふことを聞かぬが、

「まるで、をぢさんは、刀の詮議と云ふ様子だこと。……」

其の先生の威嚴のなさ思ふべしで。

「あら、違ひました。……小倉の色紙か、鷹の一軸つて處だわね。寶の詮議に諸國を漂泊つて居るつてわけなのよ。何が似合ふでせう。武者修行か知ら、六十六部か知ら、山伏か知ら、それとも歌、俳諧の……」

「手取り早い處は、坊主だよ。これで破法衣を着て、笠をかぶつて、餘程氣取つた處で、唇の下で、紐をしめれば、すぐに一人前さ。草鞋でなくても、跣足で間に合ふ。……何なら障子を開けて、縁側から驅出して見るか。」

と苦笑しながら、尙ほ其の注視を怠らない。

「然うすると、すぐ其の海へ紅白の蓮でせう。」

と島田を斜めに顔を覗く。

「いやな事を云ふなよ。不忍の池が、月島へかはつた處で、たかが、お約束の二割引だ。」

「五割引。」

と嬌然とする。

「ふ、それでも、入谷や團子坂で、フイにしなかつたから可いぢやあないか。」
まけをしみは言つたものの、どうもいよく威厳がない。

膳の上の晩酌で、お酌をするのから、長者とも、學者とも、先生とも、従つて此の男を小説家の待遇でない。勿論、世に名の轟いた、大家名家にした處で、小説家の待遇と云つて、さて何うするのさ、と聞かれれば、其の大家名家だつて、分りはしない。が、とに角あたりが、其の、そんな待遇でない。

早い處が、さつき膳を引くと、さつさと立つて——昨夜一昨夜より、つツと遠慮がなくなつたと見えて、次の室の戸棚を開けると、もう要害を心得て、其處に用意のある敷蒲團を一枚、袖で抜いて持つて出て、火鉢を離れた方へ支き膝で繰伸べた。

其の火鉢は、大抵襖越に備へつけてあるのが例で、上品な客は——そんな事はしない、——運びて給仕をさせるのだけれど、爛も飽迄熱いのが好し、鍋のものなら、直接掛けて箸を突込め、これは昨夜だつてか、敷藁蔭ぐるみ、チン／＼ドン／＼と、押出す方のお李枝が言ふから、手傳ふ方の小説家が、おい來た、チン／＼ドンと引いて來た——それと、机とを定規形にして、

而して其の火鉢へ、膳の聯絡を取つて居たので。……

——次に搔卷を抱いて出すと……すぐに枕を持つて來た。

其の時は、嬌態がなからうが、肘で小突くやうだらうが、お酌の嬉しさに、とろりとして、火鉢に頬杖で、「ご免を被る。」何しろ大切なお客分、一應挨拶の上どたりと胡坐で居た矢野が、思はず、兩手を膝へ引いて、瞠目した。

衾は女の城郭である、枕は飛道具に相應しい。宵から、自ら、其の門を開いて、飛道具を寝かすとなると……大きななりをした島田の新造が、と愕然とすると、

「お休みなさいな。」

と先づ澄ましたもの。……

「癖になつて居るんでせう。悪い癖だけれど、晩飯におしきせが濟むと……すぐに寝る。」

成程——時々小石川の家へ來ても、然ういふ節は、對手ををばさんに任せて、ごろんと其の傳を行つて知つて爲る、まことに内端な深切である。

こゝは能登國鹿島郡——勝手が違つて澤山睡くもなかつたさうであるが、ありがたしで、何の功名もなく火鉢前の陣を引くと、それには及ばぬといふのに、煙草盆を枕許へ持つて來て、女といふものは、搔卷の裾を押へる。

「これは、恐縮。」

「あら、生意氣な、口を利く……」

はてな？……

唯、柳のしだる、やうに、枕許へ膝をつくくと、高い天井の影を籠めて、島田が寂しく見ゆるまで、急に年増だつた頬を寄せて、肩を落とすと、雪に薪木を抱くやうに、眞綿觸りの袖の香で、瘦せた栴野郎の肩をすりと撫でて、

「坊や、寝ねおし、寝ねおし、い、子の坊や、寝ね、寝ね。」

思ひ得たり、話の端に傳へ聞く師匠か、をばさんかの、人形ごとの直傳である。

と打笑まるゝと、同時に、惘然として思ふ。誓——渠が幼き時、母は都の娘だつたが、北國の冬の破屋に、朝炊ぎの薪木にも、吹落ちて雪の積つたのを。——兒ばかりは暖かく袖の愛に包まれた。……

涙、つとさしぐまれて、人形がそゞろに動く。

——寝かして置いて、鐵瓶の下をいけると、ほてるとかで薄團も敷かずに、机にうしろむきに凭りかゝつて、小遣らしい、持參の萬年筆に小指を刎ねて、紫表紙の手帳にのしかゝつた。が、それにしては、旅行案内を引合はせに開いてある。おや——旅日記と云ふ洒落か知らん。

「可厭だ。」

と急に立つて、背を柔かく振向いて、

「見るんだもの。」

「……………」

「お尻が大きいでせう。鳶が出来ないわ。」

女の國では、鳶といふ。男の目には素足である。

「むかうへ行くわ、ご免なさい、旅ですから。」

で、向うむきに、床の間に座を取つた。が、はじめから用心は届いて居る。其の掛物は、鰈でも、鯉でもない。雲あし早き雨空と云ふ艸書の、詩の二行半ばかりで、をぢさんに讀めないのだから、たとへば、鯉が戀の字でも、互に見かはす顔と顔でも、お李枝に取つて一向に無事なもの。しかし、人形の方は無事でない。

其の澄ました筆の取りやうに、胸のあたりが、むす／＼すると、本來の約束は、こゝを壓せば泣くだけでも、からくり酒が廻つて、ぜんまいが利き出したから、足が突張つて、ドタンと畳へ出る。

「あら。」

ばつちりと上目で見越して、

「お引込めなさい、かぜをひかせるを、をばさんに申譯がありません。お引込めなさいよ、……引込めるの。い、子、い、子——まあ、引込んだと思つたら、また出たのね、いけません。——どうも世話のやけること。」

と起つて来て、ぐつと襟卷の裳を引被せて、

「言ふことをき、ません、——こ、は、いやな子、いやな子、いやな子。」

と其の裳をバタ／＼と邪慳に敲いた。其の手を肩へそつと當て、顔をさし覗いて、

「こ、は、い、子、い、子。——あれ、人がほめれば目を剥いて、……いやな子、いやな子。そんなら、捻、捻。……一寸、何、其の指で鉄を拵へて、兩肘を突張つて、突出して？」

「蟹。」

「挟んで見る。……噛つてやる。」

言の荒さを、色が消して、眉はかへつて藤たける。

静まりかへつて、温泉の湧く音と、波の聲が、さら／＼と聞こえる時、鐵瓶も松風して、——静に餘念なく、手帳に運ぶ、其の机に開いた旅行案内の、折りめの匆ねるのに、簪を鎮めに置いた、半襟の江戸紫を、寝たつもりで掻卷の肩當から見居る人形の目には——かげろふ日記——

は他事でも借越だけれど、あの羽は今何處を飛ぶ、信濃路の山、越路の海、蜻蛉紀行の娘ほどの氣品はある。

ハタと、寝て居られない事を懐つた！

「やあ、其のま。」

あたりのものの身に沁みるため……着る氣で寝々子半纏を小脇に絞つて、起直りしなに、先づ、然う聲を掛けて——足袋六の所謂い、事か、わるい事が存せぬが、上座の床の間に据ゑるやうに、片手で壓へながら、火鉢に向つた。

「お認めの中で恐縮だがね、何、つれ／＼に……と云ふお姿にも見受けるから、推して苦舟から出て参つたよ。——唐突だけれども、一寸真面目に相談がある。」

「旅費？」

その語氣の強さに、をぢさんは面くらつて、肩を引いて、

「え。」

「旅費の事。……」

と密と言ふ——真面目な事は、をぢさん以上で。……あ、お互に、くらしのさもしい中の人知れぬ其の思ひやり、涙ぐましいばかりである。

「似た事だがね、」

と、さすがに、しかし微笑まれた。

「片道、はつく／＼なんでせう。あたし。」

「あたり前さ、すべて、それがしの背中だもの……そんな千早姫を負ふぐらゐる、彦七當分聊も驚かない。心元へ懐剣を當てられるなんぞ、泰然自若としたものだよ。早い處が——一寸、其の懐中ものを貸しておくれ。」

「すぐ手が届く、床の間の亂箱から、」

「はい。」

膝に取つて、先づ置いて、

「怪しからん移り香だ……は、あ、同居をして居た、光榮です——其の李枝ちゃんのを、……」

「あたしの……可厭だ。」

「い、からお見せよ。」

「……此の絲錦の綺麗なのは……お澄をばさんに貰つたのよ。」

「何でもい、からさ。」

「可厭だ、あたし。」

と、肩をくねつて、

「困つちやう……見せられないものが入つて居る。」

「大切なお守りかい。」

「お守は構はないわ、見せたつて。」

「ぢやあ臍の緒か。はてな？……女に限つては臍の緒を言ひたくない、乳の絲……慌てると納豆と間違ふ。緒の臍、緒臍、何だ矢張り。」

「可厭、擦つたい。」

「笑つてる處を見ると——分つた、役者の寫眞だ。映畫か、歌舞伎か。」

「そんな事をいふんなら、さあ。」

「これ、邪慳に扱ふものぢやあない、大切な、おん紙入。……」

手に、ほの暖かく、紫地は、鐵瓶の湯氣を吸つて、しつとりと露の重さに、千種の秋の折目を返す、銅貨の音も松蟲である。

「何だ、新聞だか、雑誌だかの切替ぢやないか。賭場の見せ金といふいかさまものだな——おや、おや、おや。」

と頬を凹ませ、弱つた顔して、額を抑へた。

「李枝ちゃんの懐中へ入つて居やがる、此奴は堪まらない、氣障な野郎だ。」
「氣障な野郎でも構ひません、——道中の氏神様。」

と、正しくいつて、目が清しい。

「藪神だね、一里塚で、馬の草鞋を睨んで居るんだ。せいぐが森の祠で、狸と同居。——ついでに木の葉に似たもの。」

と、紙幣を折つて、お李枝の紙入へ衝と移した。

「——相談と云ふのはだね。」

「筆記だ——をぢさんの私が、此處で……氣取つて——いや氣取りはしない、謹んで話すのを、其の通りに、原稿紙へ寫してくれば可い。」

唯今、絲錦のお袂まで、そつとお目に掛けたのは、私たちの方では、前借といつて、むかうから、これ、作者には慎むべき第一です。……雑誌社、書籍店へ行つて、平にご高配を被つて恐れ入らなければならぬ。處を、當方から進んで差出したのだから、意味が違ふ。

「ご不自由もありますまいが失禮ながら、お使ひ下さいませんでせうかと形式があべこべになつて、お小遣ひを持出す方でいふのだから、受け取る方は偉いんです。ご大儀、とかいつて、見識なもののさ。何うして、——大家で然も工面の好い人でないと然うは行かない。前貸前勘だよ。碎

けて言へば——といふうちにも、婦人に呈するのだから、米鹽、薪炭とは言はない。些少ながらお化粧料だ。白粉と炭とは、大層な相違だらう。

なか／＼のこと、近頃ぢや、東京で、地位ある、令嬢、令夫人が……對手によつては、此の筆記をして下さる。……風説は新聞、雑誌などでご存じだらう、いづれも堂々たる、高女、大學出身の名媛だぜ。

斷髮、洋装、耳隠し、飛機様と云ふ方たちに、机の向うに控へて貰つて、い、と云へば、い。ろ、と言へば、ろ。英獨佛、希臘、ラテン、梵語、何でもです。此方の聲がすらくくと、寶石珠玉の指の中から、インキに成つて、銀線の如く晃々と顯はる、と思へば、ぞく／＼武者ぶるひがするけれども、もつと、づつと作者のはうが先生でないといふ真似が出来ない。をぢさんなどは及びもつかない。

其真似をして貰ふんだ、李枝ちゃんに。——

聊か氣取るやうだが、此地なら構ふまい。和倉ぢや、をぢさんも名家の真似だ。——わるいか、いやか。——何うした。」

お李枝の頸が段々にうつむいて、玉の輝彩のない指が、寂しく、白く、其の面を蔽うたのを視て、且つ驚いたやうに「何うした。」と云つた。

島田の根が幽に揺れる。

「……可厭ではない、可厭ではないが——あ、其の事が。それは心配には及ばない。時々をばさんの許へまるる……おん水莖のあとを内見に及んで心得てるよ。たとへば(澄)の水が、木になつて……(橙)なんぞは洒落てるよ。飲むかはりに食つて了ふから。たゞ細い筆で、きちんと書いてある處が嬉しい。

一つ遣つて見ておくれ、早い話が、李枝ちゃんの内、こゝで土産もの一品買ふにして……實は、をぢさんと聲をかけて貰ひたい。ねだつて貰ひたい。よう、と云つてもらひたい。其の方が勝手だが、それよりは、輕少だけれど、其の輕少なものでも、自分の紙入から、つまみ出す……お待ち——拾出す——探出すか。……其の方が李枝ちゃんとしては心持がい、だらう。

其の上、女の言葉などを書く時は、此のがさくの手が、白く滑かで指が細かつたら、と思ふことがないではない。

是非頼む——字か。字は私の方だつて、そんなに正しく知つてるものか。私かね、李枝ちゃん。矢野は座を正した。

「私の、先生の——知つてる通り、偉い方だが、玄關へ、はじめて弟子入して坐つた晩、二階の書齋からつかくと降りて來なすつて、寒い時だ——玄關火鉢を、ぐい、と割膝へ鐵拐に引挟ん

で、意氣だつたぜ。翌日、新聞へ出る小説の、第何回目かの口授なんです。

(や、ありて挨拶に罷出でたるは、)

——や、は假名でい、——

——は——

(此處に十三人の神官の司とは見るから著き服装なり。)

すぐに、眞赤になつて手がひつする。(官)か、(司)か、(つかさ)が怪しい。(著き)にまごつて、(服装)が覺凍ない。

——司、つかさ、見る、偏のない方——しるき、著、いでたちは服装——

——はッ——

それだもの。——學校の試験の落第には、意地でも、けろりとして驚かなかつた奴も、こゝでは五體に汗を絞つて、筆は軸まで震へが來る。其の十四五字が濟むと……

(白羽二重の袷に白襟三枚襲ね、)

こゝは(襲)と云ふ指圖だけで何うにか運んだ。すぐあとが事なんです。

(雲立涌の葡萄綾の袴の折目正しく、)——どれ、見せな——
今度は、試みに、黙つて筆記をさせて置いて……文庫からお持たせと云ふ半紙を取つて、恠

う脇を離れた袖を広く、片手で翳すやうにして、その草稿を——芬と佳い薫のする巻頁を横に叩へながら見なすつたつけ。(涌)が(粹)に間違つて、それさへ手偏だが木偏だか、猿が戸惑をしたやうな處へ、(葡萄)が、女學生の(蝦)になつて、折目の(目)が假名になつて、皆違つてら。手のつけやうがない。

先生は、其のまゝ、ふい、と立たる。此方は目が眩んで、手も膝も突伏した。頭の上から、襖際で、

——喫みな——

と、其の貰の喫みかけを——恩と威の影をあとに、縁側を行きなすつた大先生の姿は、雲に乗つて居らるゝやうに思はれて、涙がパラ／＼と流れたが、其の巻頁をのんだ時の心持は、甚だ以て不寐だけれども、口うつしに清涼劑と教を受け頂いた氣がしたよ。

あくる日の新聞に、其の一章の顯はれた時の嬉しさといふものを考へてご覧なさい。一字でも筆記をしたと思ふと、自分で出来したやうな氣がして、全國幾十萬の愛讀者に、さあ来い、とお目に掛つたん……ぢやあない……御本尊は二階で寝ておいでの、其の玄關の障子の隙から、此方で、ちよつと覗いたのさ。

と云つたわけだから、よく心得て居る。李枝ちゃんに筆記させるのに、字の違つたのなんぞは

問題ぢやない。

丁ど、和倉へ來がけに、一新聞から頼まれた、と云ふと體裁はいゝがね、頼み込んで引受けの相談の出来たのがある。それを、此の旅行の記念にもしたいから——今夜から始めて見たい。

どうだい、頼まれてくれるかい。

「え、」

と瞼に露を見せた、涙ぐんで居たやうである。

「嬉しいわ。」

「ありがたい。」

と、をぢさんも鼻聲で、

「あとで鮎を騙らう……どんなんだか知らないが、看板は東京です。其の時茶を入れて貰はうと——處でだね。」

おなじ筆記をして貰ふとしても、一應大體の筋道を、其の半襟の下へ入れて置く事になると、何かにつけて、まことに都合が可い。……鮎を、いま言はうか。何、あとにする、……

話と云ふのは——

——長太居るか——

「……い、かね、かたぐ念のために言ふだけども、此の二階の廊下で呼んだのも、ほ、ほ、ほ、などと笑つたのも、みんな、私をなぶらう、からかはうとしてする事で、李枝ちゃんなんかには何の係合もないのは固より、事によると、李枝ちゃんが来たので、相手は遠慮をして、悪戯をやめたかも知れない、と思ふほどだから……」

決して恐怖がつては不可い、いや恐怖がる事は承合つてないんだよ。……此二三日の處置ぶり、何うやら、相手の様子が、軸を解いて、繪巻物でも展くやうに分つたのだが、李枝ちゃんがいま人形を寝かしてくれた時、フト目が覺めたやうに、此の波が眞白な雪に見えて、それと同時に、きつぱりと思ひ出した事がある。はじめ二階にかつて居た、南天燭の花と、猫の繪だ、私も見よう、李枝ちゃんにも見せよう、それから話さう。」

——電話で頼むと、二階はあいて居て、すぐ持つて来た、其の掛ものを——爾く冷たく、こゝに、顔の色の澄むまで見るのであつた。——

姫沼綾羽

却説——

「……其の五割引結構ですよ。——とに角、一軸が、恚うして、電話一つで二階から手に入つて、これが値が高くて、此方が漂泊の身で……めぐりめぐつて、能登の和倉で、うつくしい女が一所だとすると、何うしても此處は情に擲んで、李枝ちゃんが宿場へ身賣りといふ場合になる。」

「可厭だ。」

と色氣なく莞爾するのが、香氣らしい。これは香氣に違ひない。

をぢさんは、巻蓑を横ざま吹かした。が、大先生の煙の薫を誂したあとだけに、其の香ひが別して安ッばい。

「薄情だな、こゝは串戯にも愁敷場にならうと云ふ處ぢやあないか。襲れて、ほろりとしながら、思ひ入があつて、次室に覺悟に立つて行く。……」

「では、すぐ此の宿の女中にでも何にでもなつて、働くわ。」

「その女中を言ふなよ——待合や、カフェーの。……何うにかなる。」

と、ふと眉を曇らしたが、又笑つて、

「だから言つてるぢやあないか。……此の一軸が安いんだから心配には及ばない。……」

——處で、今の——口述筆記——について、肝心の話だが……私も波が雪になつたやうに、別の目が開けて、思ひ當つて、急に取寄せた此の掛ものを見給へ。眞面目だよ。」

といふうちに、其の落款の朱の印に、灰がこぼれるのを、ふつと吹くのが、刀の目き、美術の鑑定には似もつかない。露店で古本を掘出さうとして、……焼焦が出来らあ旦那、と叱られさうな形で、

「こゝに（くれは。）と署名がある。

……たゞ、ふと思つたんだけど、更めてよく見ると、いよ／＼見極めが着いたのは、此の印だが、一寸目には、一字が、くづした(艸)のやうだし、廿廿菩薩といふのに似て居て、一字が、矢張り略した(舍)の字のやうだから、前刻から見て居るんだが、まさか、「菩薩舍」……ではなからう。「艸舍」……なるほど、「艸舍」……かと思ふと、然うでない。これはキリシタンバテレンだ。」

と火鉢の縁に灰を拂いた。

「お待ち——むかし其の宗旨が國禁で、犯したものは、磔、火刑、品川の逆釣、道後の油の地獄

おとしなどと言つた時分に、内證に用ゐたとかいふのに、諸侯の紋にまでこんなのがあつたといふが、そんな煩かしいんぢやあない。……これは羅馬字のAとHだ。で、勿論、私の想像が當つて、これが頭字の組合せだとすると、——

Hの姫沼。Aの綾羽。——それは凄いやうな美人なんだよ。……十七八で、繪を上手に描いた

——國漢文、本も讀める、外國語がすらく行く……數學が出来て、書がうまい。文章が達者と來て、素晴らしい、其の縹緞なんです。

綾羽が名で、雅名を、吳羽——と云つた。早い處は、唄の賤織にあるね、勿論、くれはとりあやにこひしきといふ、漢織吳織から出たものなだけけれども、内々、實は然うでない處があるんだ。

むかうは、女子部——此方は野郎で、學校はそれは別さ。女學校の花園には薔薇が薫つて、此方の畠には、薄に、ばつたが飛んだんだが、同じ西洋人の經營して居る私立の生徒さ、私もだよ。綾羽嬢は高等師範。矢野小僧は、高等學校——試験パスの目的で、私立だけでは抄か行かない、どう抄か行かないんだか、氣ばかり荒立つて居るから、別に又私塾へ通つた。和漢英數の指南所さ。そこで顔を合はせたのははじめなんだが、何しろ久しい以前の地方の事だから、通學は、塾生をませて、出入百二三十人の中に、女といつたら綾羽一人さ。然も其の美人。これは騒がずに

は居られない。町用水の小流れの岸を紫の袴が傳つて來るのを、アントニオこれにあり。——來た、來た、來た、クレオパトラ。——

時代が移ると、今頃では却つて、玄米パンのほや／＼と云つて、變な聲で自轉車に乗つて銀座を歩行しても、サンドキツチと云ふ廣告屋が、行燈を腹と背中へ附着けて廣小路へ立つても、誰も珍しいとも怪しいとも思はないが、其の時分の事だよ——李枝ちゃん。

教會の傳道師か何かで、娑婆氣なのが、大道の辻へ出て、麩包を賣るのに演説をした。神の與へ給ふものを受けよサ、然うかつて無錢ぢやないんだが——豆ほどに斷つて、水を飲めば、七日活きる！と叫ぶ聲が、頤髻頰髻の左右に逆立つた中から口を割つて逆るから、舶來の鐵拐仙人が麥こがしを煉つて賣るやうです。買手：ぢやあない、見物が、遠卷に覗いて氣味を悪がる始末さね、……可いかい。

伴が耶蘇教の學校に通ふといつて、檀那寺の和尚さんに父爺が呼びつけられる時分だもの……歐化の尖端、階子の天邊へ驅上つて、アラビヤの沙漠越に、羅馬、埃及を小手を反らして居るんだから、小野小町や、てるて姫か、此の頃流行るが、淀君なんぞぢや追つかない。李枝ちゃんはじめ、用のないものだけけど、パアレー、スピンソンと云ふ萬國史で、それも奥までは讀めません。口許を行つたり來たりだから、凡そ世の中に、美人といへばクレオパトラさ。

其處で、其の用水べりへ、綾羽嬢の姿が顯れると、シドナス河へ窺欄として黄金の船が、紫の絹の帆に、龍涎香の薄霧を飄舞かせ、嬋娟また豊艶な腰元が、白銀の權を操りながら、虹を纜綱にして漕ぎ進んで來るほどの騒ぎだ。尤も時節だと、紫行燈の前後に赤蜻蛉の羽は白く光つた。李枝ちゃんの簪なんぞは、氣取つて言ふと、(クレオパトラの權)なんです。「可厭だ。」

と、旅行案内を颯と伏せる。

「大分に山氣があつて、鑛山ですつたの、相場で儲けたのと、浮沈さま／＼の風説はしたが、藩の大士族の娘で、世が世ならば上臈です。」

——姫沼綾羽——第一名からして、綺麗ぢやないか。見た處で極彩色の鴛鴦だね。

處が、何うして……おなじ彩色にしても翡翠の牙がある。嘴の劍が鋭く、羽返しが利いて、胸毛の緋が魔の炬火のやうに燃えるんです。で、自から許して、雅名が——(くれは)——任じて、クレオパトラは、凄からう。

此の雅名を用ゐたわけは、いま言つた、和漢英數の塾中で——矢張其の頃の流行だつた、廻覽雜誌を起したのにはじまる。……一卷二巻には、塾の先生も寄稿をしたが、號して曰く、奥田冷州——冷州はすさまじいが、さすがに敵たるだけの見識がある。が、何うだい、吳羽に對して(安

東匂)、(安東庭男)だの、苦しいのが(安東二羽)などといふのがある。劍術つかひの豪傑の癖に、(にはう)とかなで名のつたのもあつて、一時に七人も出来たから驚いたのを覚えて居る。「其の(二羽)といふのは、をぢさんでせう。」
こゝで又力を入れて、

「雑ツ子の時分だから。」

言ひ得て嬉しさうな顔をした。小説家は憮然として、ウキスキイの轡を間越しに睨んで、

「馬鹿を言へ。——其の雑誌ぢやあ、これでも選手だ。はじめからクレオパトラを敵にして居る。……第一其の雑誌の題だが、李枝ちゃんも知つて居るだらう、里見さん——あの人たちが學習院時代に、廻覽雑誌を拵へた。坊やが集つたといふので(望野)、野を望むなんぞは洒落たものだけれど、そんな氣の利いたんぢやない。北國の地方だから(霰)——だ。それは威勢のいゝもんだからね。文章の持寄りだから、(吳漢)はまだ恕すべしだが、一字で(綾)と主張した軟派が多かつたのを、さすがに敵だ。綾羽が(霰)に賛成した。其處で、それがしが其日の装束は、紺村濃の直垂か、洲崎に千鳥の飛散つた鞍置馬で、名のつて、那須與一……は何うだい。」

……氣に入つたかい。氣に入らないかい、——どつちみち大將分の名ではないけれど、大將と
なるとう、お手近な大將なり判官殿から、早死をした重盛。海嶺、朝な。敵役の北條。——源平盛
衰記さては、やがて淨瑠璃になつて、たとへば星の書見えず……夜の大屋などとなると、雅名に
借用どころか、雑誌は其の人たちで食つて居るんです。——その人たちで。

尤も私たちは、大なり小なり皆親の脛を嚙つて居たんだから、食ふのではないが、その人たち
で生きて居たんだ。やあ、討死したのが早い、遅い、壇の浦で、辻つたの轉々だのと、性行
の理非善悪、利害得失を論ずるのが、持寄り原稿の主要點だ。地方の人は理窟ほいからね。わか
るものか——少年に。——ごまめの齒ぎしりと云ふが、霰に因んで、濁の鮒がさかり時で、べち
や、くちや、ぶつぶつ。

いや、話が外れた。

處で、その誌上の論議だがね、綾羽嬢のいふ處は、理路整正、意義明晰、漢文も自由にこなす、
おまけに文章が巧いと來て、その上、少々こんがりかりさうな處へは、原稿に金銀泥の星が輝き、
彩色で董が匂つてゐるから、見たばかりで絢爛目を奪ふ。處へ、家がらが忍ばれて、平家のお嬢
さんが書寫した經文ほどに、見るから貴い。

剩へだ。塾部屋の廣縁の端の安卓子を圍んで、編輯の相談、會費の出しこなぞの時となると、
(お、しんど)とか云つて、穩でねえ！ 右の紫袴の紐を解いて、壁の折釘へふはりと掛ける。
これでさへ可い加減、おのゝ姉の行水より目が澁く、辛く、甘くなる處を、匹田鹿の子の桃色

のぐるぐると巻か何かで、引傾いだ、ぐらぐら椅子へ掛けるんだから、膝が揺れると、下結の緋のところがお邸風で、品よくちらつく。

禁斷の果實も、これだと西王母の三千歳の桃だね。……行水のあとで、梨や、瓜の皮を剥くやうなもんぢやない。

安東句、七人をはじめ、同人残らず筋骨が弛くなつて、唯何事も姫君(くれは)の思召次第。大星が忠たといへば、紙上を天井にして駆け廻る。義経が猪だ、と洒落に逆櫓の聲色を使つてさへ、陣鉦陣太鼓を、アリヤ〜とたき立てる。那須與一、これが黙つて居られますか。慨然として起つたのは矢野冠者、いや小僧さ。

まつ向、一から切まで、何でも綾羽に反對だ。が、目ざす敵の女將軍は、クレオパトラに翼を添へて、静流の薙刀を水車といふ手だれだから、面を向くべきやうもないが、此方は何うだい、滋藤の弓に十二束二伏せの飛道具を心得て居るんだぜ、——揉烏帽子引立て、薄紅梅の鉢巻して、生年十七歳、色白く、……

「ほ、ゝ。」
「笑ふな。生年十七歳、いまのやうなをぢさんぢやあない。南無大八幡大菩薩、別しては下野國、日光宇都宮、氏の御神、弓矢の冥加あるべくば、あの、魔女、座席に定めて給へ。」

舞を見すいなで、一の矢もひよろ〜、二の矢もひよろ〜、でないことはないけれども、敵が迫れば乗つて遁げる、矢頭を見ては狙つて射る。……對手が魔だから、此方も鬼だ。青蜥蜴、螢の燐、松蔭の田螺、などといふ鐵を飛ばして、人身攻撃、匂の鼻の下が伸びてるの、二羽の疵が下つてるの、とあからさまに、面瘡を面瘡といふんだし、爪の垢を汚いといふんだから、これはこたへる。さしつめ、引きつめ、さん〜に射飛ばすと、千の矢さきと降りかゝるもんだから、綾羽嬢だけは水車で寄せつけないまでも、幕下の面々、屈竟な猛卒勇士が、惱み傷くこと一方でなかつた、と思ひたまへ。

(撲らう、おびき寄せて、生どれ、しめツ了へ。)

相談が出来たらしい。丁ど、正月、新年會を兼ね、討論議事相催し候。吳羽嬢も出席いたされ候こと、と念を入れたのを故と封書にして——郵便ぢやない、塾で安東の一人が、ニヤ〜しながら手渡しした。ぎよつとしたよ、随分怯えたのさ。……

——其の新年會の結果が、夜中の吹雪に、私が、大川のへりで打倒された事になるんだが——棕櫚箒が鬼に見える。卑怯で臆病な奴ほど、思ひ過ごしをするもので、眞個の處は、殺されさうな氣がするから、此方も傷ぐらるはつけて遣る氣で、内へは内證で、こゝが可笑い。……ナイフでも事が済む處を、萬事子供の戦争ごつこだ。——なくなつた母親の持つて居た、塗鞘の短刀

を、密と懐中へ呑んだ、は何うです。……

尤も、此の殺氣が、自ら立つたのを、伶俐な綾羽だから、敏捷く悟つて、座席を駭蕩たるものにしたから、其の場が無事に済んだのかも知れません。

それ、討論會といふだらう。鴨越か、逆櫓か何か―第一、場所が敵地でね。……まあ、東京で言へば、山の手と下町で、しかし両方とも大川添で、土地は低い。間に高い丘を一つ隔てただけに、狭い處で様子も違ふし、氣心も違ふ。不斷から人間同士餘り親みがない處い踏込んで、廣室に目に餘る人數に、味方は一人もない。いづれも安東匂一味で、顔も知らない、高等學校の―學生としては皆お歴々が集つた。

處が、其の晩の幹事役なり、おもな世話人、と云ふのが、安東には最も響きの通ふ、安場嘉傳次といふんでね。」

「……まあ、聞いたやうな名ですわね。」

ふと、お李枝が打傾くの、事もなげに打消して、

「李枝ちゃん聞きさうな名ではない。が、とに角、其の男は縣内の農家の子で、城下へ修學に出て居て、居る處が土地の大きな士族邸の素人下宿さ。即ち會場で。席が廣書院といふんです。……私が町人の伴で、安場が農家だから、他がすぐつて、士族の若様の中で、おなじ敵ながら、

何處となく心のとけ合ふ處がある、また氣のい、目鼻も滑稽けた男でね。

——耶蘇教の傳道師の、パンの辻講釋なんぞまだるツこしいと……その時代に、何うだらう、青短衣に、赤い洋袴で、胸へお祭りの小太鼓を釣つて、胴の中へ、パンを仕込んで、生命の糧、神のパン。パン、パン、パン、と拍子を取つて、どんが、どんが、どん／＼と、山の手、下町を廻らうといふ男だ。

其の、同宿の學生も勿論まじつた。——机を書院に寄せ合はせて、方陣です——四角に並んだ、議長——何番といふ意氣込。出て居た煎餅も撮まず、茶もろくに飲まないで、堅唾をのんで、肅然とした處へ——（お、しんど、ほ、）と此の正月、しん／＼と降り積る雪の中に、緋桃と鶯を一時に見るやうだつたのが、議長席を取つた綾羽嬢の吳羽女史で、（堅くるしいわ、真中へ寄つて話させようよ。）といふが早いか、座がぎつしりだから、——ぶんきんの高髻、裾模様で……驚いた、床わきの丸窓をすつと消えて、廊下へ出たぜ。アツといふうちに、入口から真中へ出て來たらう。否も應もあるものか。季節がら、繪がるたを搔集めたやうだけれど、冠も、烏帽子も素袍もなし、ひめは綾羽と三四人、額のかちや澤山に、少々白雲頭の坊さんまで、むら／＼と集つた。

議論が濟むと、さうして座を寄せるのを相圖に、段取が出來て居たと見えて、二品三品づゝ、馳

走が来る、酒が出る。……世話人の嘉傳次少年は、目をぱちつかせたが、追着くものぢやない、若いものに食ひものを見せては一堪りもあるものか。飲むわ、食ふわ。

そのうちに、べろくの神さん、と云ふのがはじまつたんだ。正直の神さんで、と同音に囃すにつれて、杉簀に白紙の振袖が、綾羽の手で、くるくると舞つて居る。それが、ボンと私の胸へ来た。どつと囃して、飲めぬ、といふのに、與一卑怯だ、那須飲め。どつと囃して、べろくの神さんは——綾羽のくるくると廻はすのが、ボンと又私の膝へ来た。どつと囃して、飲めぬ、といふのに、與一卑怯だ、那須飲め。どつと囃して、べろくの神さんは、又それが、ふはりと頬邊へ當つた時は、白い幽霊に舐められたやうに、ぞつとしたよ。

三日の屠蘇にも、眞赤になる奴が、こゝで話すと、嘘のやうさ。其の毎に強ひつけられて身震ひをしながら漸と飲む。それも一人や二人ぢやない。面白づくに、押へ、おツつけ、酌をする。また、べろくの神さんです。不思議に綾羽の手を離れると、宙へ刎ねて、ふはく、ひよろひよろと白い袖が、じとく、濡りを帯びて来て、流れ灌頂の人魂を見るやうに、ひやりと吸着く。どつと囃して、與一卑怯だ、那須、飲め。——

其の癖、一人々々が乗り出して、皆その神を授からうと、浮腰に頭を突出して、囃子の切目を待つて居る圖といふものはなかつたよ。眞個の處、膝に手をちやんとして、懐中の九寸五分で、いやでも胸を突張つて居るのは、小僧一人だつたがね。

怪しからん、クレオパトラはと、もう酔つて居るから、あからさまだ、心あつて、與一にバツカス神を授ける、と苦情が出ると、衆議を容れて、快く、綾羽が白地の手拭で目かくしをした。凄しい。美しさが魔に近い。而うして立つた。眞中に立つと、又どつと囃すに連れて、杉簀の振袖が舞ふのだが、踊りも、三味線も出来るんだから、巧まずに振がついて、神の袖とともに曙染の振袖がひらりと舞ふ。拍子にかゝつて、腰が靡く。裳が撓ふ。爪さきが極つて、トンく、はらりと、羽二重足袋に緋鹿子が宙へ浮く時分には、はずんで、天井に近い處で、白い神がおなじやうに踊つて居る。それだもの、嘉傳次が眞先に、つい、ふらくくと一人立ち、二人立ちして、何うだい、おなじ手つき、腰つきで、べろくの神さんは、總立ちになつて踊り出した。

踊る、刎る、飛上る。舞上つて、其の白い神を取らうとする。

ひらりと躲しながら、踊りながら、然も興に乗じたと見えて、綾羽がね、——床の前を一踊して、あの丸窓をスツと抜ける。雪の洞穴へ消えたやうに。……

——あとについて、妙に静まりながら、一人々々、すとな、すとなと、其の癖手取早く、女まじりに、最後の足が、颯の面に似て、其の窓をふいと隠れると、唯一息つく間、寂然とした。外面の吹雪がざつと鳴るんです。

額の文字は、看柳成梅だが、其の下に、座敷を見れば空になる。唯一人、廢墟に魔の酒宴、鬼の亂舞のあとの如く、狼藉した馳走道具を見ながら、酒の酔ひの苦しさに齒を嚙んで、坐る自分を見た時は、こゝで死ぬか、と思つた。

撲られる。いま其の相談だ。懷中に手を突込んで、いきなり座敷を出ようとする。トタンに、どつと又噓して、綾羽が先登に、踊りながら入つて來た。

——歸ります、僕は——

すつと目かくしを拂ふと、ちつと視て、

——まあ……懷劍を——

と、水が尙ほ氷るやうな、透通る目で、又ちつと見て、

——憎らしい……

言つた切り、通り抜ける。白い袖をまはしながら。……ね、何うして見たらう。匂、みだれどころぢやあない、まつげほど黒鞘の端をさへ見せないのに、凄いと、鋭い目です。

が、其の目に、ハタと近く目を合はせたのは、其の時を最後だと思つていゝ。何十年か、いまに於て。

で、幹事は、斷つて、まだ早いと引留めた。これからつぼんぼしをする。用意がしてある。手

ン手に皆で團扇で煽いで、綾羽の膝か、乳へ吸つかせ、島田の上へ嚙りつかせる。」

「可厭だ。」

と、お李枝が一寸斜めに背いた。

「串戯ぢやあない。——何の話をして居ると思ふのさ。——お前さんのお小遣の材料なんぢやあないか。——

急に立つのも、と負惜みで、一寸ためらつてる中に、さあ、はじまつた。二十本近い、いろいろの團扇が、濛々としたほこりの中に、化鳥の如く羽搏いて、あの、つぼんぼの大蛸の頭が、目を据ゑ、唇を煽つて、宙へふはり、ぶわくぶわと浮いて、一同の叫喚に連れて泳ぐのを見ながら、遁げるやうに會場を出たんだが、……

この、素人下宿が古邸だから、門内の大きな松の半ば雪に埋れたのを潜つて、外へ出ると、すぐ後を沈んだ格子戸の開く音がごろく、と誰かが出るらしい。

つぼんぼの中を抜けて、私が立つたのに、歸風が吹いて、あとへ續いたと思へば、それまでの事だけれど、何にしる懷中に九寸五分の一件です。

屹と、途中を狙ふと思ふから、うっかり先に立つては歩行き出せない。門傍の門松の蔭へ忍んで、素早く堀へ附着いたんだがね、宵から、どんく積つた上へ、いま壯に降つてる、ひどい風

さ。三尺ばかりも積つた雪へ乗つた處へ、吹おろす、吹あげる、身體は宙へ浮くやうで、門松と、塀の屋根へ押被さつた大松の間へ挟つて、枝に木登りをした氣がする。……一つは無理酒が頭へ上つた所爲だらうね。

當人ひらりと枝に乗つて、高い處から——片手を短刀に掛けながら、もの見の氣です。少年で逆上せて居るんだから。

其の、しかし鼻先を、三人、黒い影が、泳いで、握太な洋杖と、大小、こすきだといふ雪搔の得もので漕分けながら、(足あとが見えんぞ、)と凄いことをいつて、驅出すやうに行くのが町家通り。——入組んだ土塀を三處ばかり折曲ると、直ぐ店屋續き——尤も場末ではあるけれども。其の順路だ、私の歸る。……

處を、私は反對の方へ走つた——奴等を、其松の枝から見すこして置いて、——それが打倒れてひどい目に逢つた原因なんだよ。

此の一方は、突抜けると、近い正面がすぐに大川なんです。少年に取つては、他國と、故郷、と真中に直径二十町ばかり高臺の丘を隔てた。……だから、敵の流たね。けれども、昔から遁げるのは間道に限る。そのかはり悪處難場だ。
目前に、山の根へ渡す橋が真中から折挫けて中斷えして居るのさへ、渡るのではないが心細い。

いきなり、白い川瀬がぶつかる低い岸で、一方は何處か邸の背戸續きかも知れないが、垣も塀もない荒庭と畑です。其處へ、向う風の吹雪と來て居る。川風が添つて、吹きまくるのだから、目も口も開かないんだ、が、子供は風の子で、雪の中に生れて育つた。……覺悟はある。

おなじ急流の大川縁を凌いで行くにも、流れに逆ふんぢやあない。瀬について下る順で居たら、吹廻されて、浮いつ、沈みつ、といふ中にも、荒波、荒野の中に、思ひなしか、一筋道が、雪の潮の漲つて落ちるのに乗つた形で、足は早い。が吹倒されさうだから、短刀を抜いて刃に切つた、吹雪と戦ふ氣さ、牙のある野兎が耳に雪しぶきを立てて、八九町は飛んだらう。

漸と片側町だが、町家の端へ取着的。——騒ぐは風ばかり、最う寂然と屋根も、まばらに、寢鎮まつては居けたれど、とに角、吻とする……あとを追つて來る影もないと思ふと、氣が弛んで、道端へ腰をついたが、其切立てない。

——うつ、心に覺えて居るが、其の倒れた處は、軒に高々と俵を圍つた炭屋の前でね、川岸に、濱の砂丘といつたやうに、石炭が積んである。黒く——三角形に——趣きは違ふが、深川に、どわかするとこんな處がある。蛤町のピラミッドと云つた様子さ。しかし、其のすぐ裏へ打寄せる瀬は、雪を蹴し、蹴し、此の時は眞蒼です。

いつの間にか、吹雪が留んで、何處か寒月が冴えるだらうか、それとも幽に夜があげかけたか

知ら、水が冷たく澄んで、石炭がたゞ巖山のやうに光る。……
と思ふ時分には、咽喉が渴いて渴いて、胸を掻裂くやうだ。

あの流れに噛みつきたい。

起きたり轉んだり、漸と水際に寄ると、忽ち、目前が其の石炭の海になつて、むせつぽく寒がるんだね。え、こんな筈はない、とよく見ると、また石炭の根に、甘く冷たさうに水が、たふたふと雪に青い波を打つて居る。——這出すと、立處に、黒い丘が目を遮る。

それを、繰返すもどかしさに、向ううらの流を自當に、其の石炭をのぼりはじめると、其の峻巖とした事と言つたら、手足の爪を削るばかり裂くばかり、精根をつくして、絶頂へ上つたと思ふと、裏の崖が一面に火だ、猛火だ、眞赤になつて燃えて居る。……

——李枝ちゃん、さあ、お茶だ——一つ焙じておくれ。——

唯、あつと其の石炭の尖つた丘から轉がり落ちると、今の炎を見ただけでも、呼吸が火を吹くやうで、其の切なさと言つてはないんだね。……

然うして打倒れた炭屋の屋根から、廂から、二段にもなつて大きな氷柱が簾を掛けて下つて居るが、煎つく舌に噛み折りたいにも、唇は届かず、身體は動かさず……となると、水晶よりは、宛然剣で目を刺して、筋も骨もづき〜瘻む。

餘りの事に、

「お母さん、お母さん。」

眞うつむけに轉じて、

「お乳を。」

と云つて、雪を含んだ。雪がたら〜と甘い。而して雪がほんのりと人肌に暖かつた。——以來、雪を視ると、今でも暖かく美しい氣がするよ。

——一昨年の春寒に、風邪をこじらした時、殆ど人事不省になり掛けが、おなじやうな幻視と錯覺だつた。夢だか、現だか、其の石炭の丘の尖つた、眞黒な根の切目を清く澄んだ青い水が、岸を洗つて流れる。咽喉は焦げつくやうです。——這出すと、水が隠れて、眞黒な丘になる。例の、搔撈つて攀上ると、向うが炎だ。くる〜と轉げ落ちるとね、軒の氷柱を見るまでもない、途中に引掛つて、身體が廻つて居る處へ、崩れかゝる石炭屑がばち〜と當つて、欠片が一つ一つ火になつて身體に刺さつた。其の引掛つて廻つて居ると思つたのは、心臓の激動だね、動悸が波を打つたんださうで。——お澄をばさんが、夢中で確乎と抱くと、

「乳を——」

お乳……といった——嘘をつけ——とか云ふので、後日一寸物議を起した、異論があつたよ。

— あゝ、うまい……至極、お服加減。これで番茶の色が白ければ、李枝ちゃんの乳を頂くやうなものだ。—

嘘でない。島田が黒耀石の如く、衝と黒い丘が聳えて、棲は其の蔭を水のやうに流れた。

「些と薄ら寒い。」

と、瘦せた肩に、半纏を揺り掛けたが、

「とても次手に、血を通して頂かう。」

と次の室へ立つ處を、

「をぢさん。」

「何だ。」

「其處に石炭の山がある。」

「あゝ、驚かすない。悚然とする。」

もの蔭に暗い棚から、ウキスキイを抜いて来て、番茶の湯氣を、芬と分けた。

「どんな味。」

「子供が肉桂を嚙むやうだね——で、聞き給へ。——

私の祖母が、其の新年會の夜中に、孫の身體を受取つた——もう然うなると荷物だよ——毛布に包んで蓑をかけた——受取つたのは櫓の上からださうです。眞黒な坊主合羽で、頭から、爪先まで包んで、藁靴を穿いたのが三人、雪に埋れた格子戸を音づれた。

一人、頭巾を刎ねて挨拶をされたのは、年少な、それはく美しい上藤、たゞ人ではない、證據には、歸りの遅さに、戸に立つて見て居ると、吹雪のやんだ、白い山に、あけの明星の光る前へ、ぼつりと黒く顯はれて、高い處から屋根を迂るやうに櫓が來ての、と漸と二日めかに、人心地になつた時にいつて聞かしたんだ。美しい上藤、たゞ人でない——何です、お祖母さん、其奴は與一が射損じたまとだ、とも、鶴だとも、クレオパトラだとも言へないから、氏の神、白山權現のおつかはしめといふことにして、腰が立つとすぐお參詣に行つたがね。口惜くつて堪まらな。安東一派の女將軍は、敵小僧の倒れたのを、大川べりから、丘の上から、下の町まで、何處までも雅量を示して、送つた櫓は、勝利の看戦車を雪の白銀で飾つたんだ。負腹で、拗ねた拗ねた。誰が、わびや、禮に行くもんか。……

それ切……逢はない。こゝで見るとこの南天燭の根の、(くれは)の名は、其處までの繪巻ものに、自分で箱がき、いや落款をしてくれたやうな氣がするよ。」

と湯呑を置いた、片手捌きの小説家の半纏の衣紋は、やゝ潤い。

「……それ切逢はない。が、しかし、もう一度——七八年あとに其の姿を視た事がある。……これはね、視たのが、視ないより、却つて、綾羽が、世にも人にも遠ざかつて、雲だか、山だか、海だか、づつと私などから離れて、隠れはてたもののやうな気がするんです。

私は東京に居て、曲りなりにも何うにか自分所帯で、自炊ぐらゐるは出来るやうに成つた頃だが——然うだ。……

と瘦せた膝を撫でながら、

「吹雪に倒れて、櫓で我家へ送られた始末だから、大煩ひをしてね、目的の試験を受ける處ぢやない。治つてからも一年あまりぶら／＼して、學校も塾も不沙汰になれば、少年の事だ、いつの間にか附合ひもなくなつて、近所合壁面目もなし、極りは悪しで、夜逃げのやうに東京へまぎれて出て、干ばしになりさうな處を、漸と、先生の玄關で救はれた次第なんだが、——其のうち、何うかすると、千巷萬街の何處かで、郷里から上京して居るアントニオ一派の男に、ふと出逢つて、行きずりに話をした事などある。日も経てば月もすぎ、お互に恩も仇も忘れうちにも、うはさの出るは、クレオパトラで。……地方で、縣知事さんをつかまへた。人の口では妾だが、當人はいろにして居る。……何も消防夫と藝妓でなければいゝでないといふ法はない。知事さんと

綾羽だつた處で、いろならばいろだらう。然うだ、と蕎麥を食つて別れる。兎と狸が仲なほりをしたやうさ、たあいのない事。……

二年もたつたらうか、別なアントニオに逢つた時の話では、綾羽は東京に来て居る。おや。縣から轉任になつた、何某少將の庇護後援のもとに、矢野、きみとおなじ文學を志しとるぞ、競争の氣ださうだ。對手はクレオパトラだぞ、しつかりせい、と焼芋を、もくりと頬張る。

けれども、城下の用水と隅田川では、くらべものにならない。クレオパトラも大都會ぢやあ影が薄くて……李枝ちゃんぢやないから、不忍の蓮が月島の波に咲いたやうに、私の目には映らなかつた。

原稿を賣込みに、本町邊の書籍店へ行くと、三階だかの編輯部へ上らうとして、下の土間で幾山か積重ねた雑誌の上から、ひよこりと丸い面を出したが、安場嘉傳次、例の一番親みのあつた男でね。其處の發送部に勤めて居たんだよ。故郷の町で運送店を開いたが、失敗をしたと言つてね。クレオパトラは、女役者……女優になりたがつて居る、といふのがはじめで。其の次には美術家になる。繪を學んで居ると言ふ——しばらくすると、紫綸子の被布で畫を描いて、地方を廻つて居るさうだ、といふうちに越前の山寺へ籠つて、哲學を研究中だ、と此の手紙の音信のあつた頃は、嘉傳次も土に歸つて、在所の農家で暮して居た。

其の在所といふのが——待つておくれ、いよ／＼原稿として、李枝ちゃんに筆記をして貰ふ時に、あからさまに、其の場所の地名を書かうか、何うしようか——それは今、考へ中なんだがね。

何しろ鐵道のない時分、故郷から東京へ出る、街道の宿に、嘉傳次の其の在所がある。祖母を連れて上京した時に、傳二挺で通りがかりに其の蘘屋を訪ねた。秋日和の眞日向の稲の香は今思つても懐かしい。……土間に積んだ、ほか／＼した刈稻の中から、かさ／＼と出て来て、莞爾。額の糠を拂ひながら、やあ、矢野さん、クレオパトラが、向うの森の白壁づくりの奥に居る。郡の多額納税者の寵妾で——一度貴下に逢ひたがつて居ますよ。

傳の楫の下りたのにつけても、吹雪の夜の櫓を思ひ出さずには居られない。坊主合羽の廂を刎ねた顔を視て、姫神か、と言つた祖母が七十幾つで其處に居る。

——逢へますか——

——是非お逢はせしたい——

が、頭をくる／＼と振つて、一つ引傾いた、短い眉毛が、鼻柱を離れて、額の兩方から、ちよぼりと下り目へ刎ねて居て、べろんとした口でニヤついて——おやち……と云ふ、其が主人、多額納税者の事だね——頗る嫉妬手と来て、對手がたゞ美人だけでは済まない性質だから、土蔵に

納めて鍵を掛けないばかりの用心、また、クレオパトラも、今までに、毒蛇こそ然うでもないが、モルヒネの入つた紫水晶の小さな壺ぐらゐるは、飲まないまでで、白い胸へ押當てたぐらゐる事はあらうから、感心に辛抱しておとなしい。出しもしなければ、自分で、めつたに外出もしないで、時々琴のしらべが松風に通つて村を渡る。……秋ふけて風白く月清い折など、聞くもの斷腸の思ひがある。……それは可いが、村の若い衆で、あの森蔭へ忍んで、尺八を密と合せて、いきなり大身の槍で、おやちにおどかされたのが近い頃だ、などと言ふから、そいつは危険だ、見合はせよう。いや、だから豫め偵察を要するといふだけの事です。一寸でも逢つて下さい。何だか切に一度あなたを見たいと言つて居ましたから、それに、おやち、今日は居ない筈ですが、まあ此方へ、と指さしもししないで、紺絞の兵子帯の下腹へ、弛く兩手を突込んで、かすりの着ものに紺足袋と云ふ出来たてのお百姓で、動くたびに稲の香が、ぼつと立つのが、また、頻りになつかしい。……つい、うか／＼とあとに附くと、街道を挟んだ直ぐ向うの、おなじ農家の門を潜つて、尤も近所だし、懇意らしい。……筵の上で枝豆を揃へて居る女房が居るに挨拶もしない。ご免下さいは、私に言はせて、納屋のわきを薄暗い通り抜けの土間へ入ると、小さな聲で、こゝから御厨子が覗かれるんです、祕佛の。……で、さぐり足で少し出た。やあ、土間が瀧になつたかと吃驚した。餘り不意だつたんだよ。暗い、其處の、雨戸の開いた眞横がすぐ廣い川です。蘘

——さ、一房まるれ——
 埃及の美人も美人だが、これは仙人の媼さんだつたよ。
 ——李枝ちゃん。……」
 矢野は、お李枝の新しくついだ茶を呷んだ。
 「今度は葡萄の味がする。……其處で、前刻から話した、姫沼綾羽が、寂しい川を隔てて、琴にかくれたまでを、これから、文章にして、新聞に出せるやうに口でいふから、お化粧料前納の處を、一つ働いておくれ。」
 ——然う、其の原稿紙へ、ぶつつけに……然う——
 題は考へたが、

で、稻の香に酔つて、太平にとろりとして居て、何處かのおまゐりにでもござつたづらあ——申
 戯ぢやあない、寺も宮も其處等に見えない。クレオパトラの琴などは、雲で沙漠へ飛ばして置いて、血眼になると、土地子だ、安場が見つけた。村の出端の松並木の蔭に、京参詣の往還をあてに、菓物の荷があつて、其處に小さな白髪が見える。
 祖母は葡萄が大好きでね、嫁菜すゝきの、ほかく道を歩行しながら、其の荷で、見つけたものだつた。

茸の横廂の下を、すれく一杯に瀬を打つて居るのが、眞平だから、装束のやうに流れながら、さらくくと音が幽で、もの寂しくつて、幅十四五間だらうけれど、倍くらるには大きく見えた。
 何、地理にも、地圖にも乗つて居る川だけれど、河身によらず、道の屈折が多いと見えて、これから渡るのを知らないでもない。松並木の橋は、つと離れて居るから、こんな、家と家とのあひだに川があらうとは思はなかつた。其處へ横に立向つた正面の立派な座敷だが、床が低い。明いのは、秋の川波ばかりで、金屏風や、磨いた柱が、きらくししながら天井も古びて暗い中に、水あかりに浮いて艶麗に琴を弾いて居る、と此方の岸へ二人が立つ、と同時にだね……其の琴を衝と黄金に紫の總を懸けた盾のやうについて、あらひ髪も、袖も、褌も、翡翠が虹にかくれたやうに、菊の花壇の下へ。——此方の身體は、蘆の穂にふらくと吹かれたよ。
 嘉傳次が伸び上つて、十文字だの、圓いものだの、何だか空へかいて合圖らしい事をする拍子に、ドドウン！と鐵砲が、響いたぢやあないか。ワツ出た、おやぢ、と遁出すから、銃獵のそれ鐵砲だとは思ひながら、小説家も、もろとも、——いや、怎ういふ時にいひたくはないがね。をぢさんといつても、私といつても、我輩でも、どつち道器量は悪いよ。
 遁出す、と高い空を……雁が渡つた。琴柱が夢に散るやうに——
 そりやい、が、俣で待たした祖母さんが紛失した、おやと思ふと、俣夫は二人とも日向ぼつこ

雪中翡翠志

雪の中の、翡翠は河蟬。志は、しるす、志——假名で結構。あとで私が直すから。——お待ちよ。一層拵へずに、假名で(かはせみ)。さつぱりして其で佳い。題から三字ばかり……

——其の一。……」

蜻蛉の羽が、きらりと白紙に輝いて、ペンの尖が睫毛のやうに、

其の一。

歌仙貝

こひしさはおなじ心にあらずとも今宵の月をきみ見ざらめや
琴の音に峰の松風かよふらしいづれのをよりしらべそめけむ
秋の野の萩のにしきをふるさとに鹿のねながらうつしてしかな
櫻ちる木のした風は寒からでそらにしられぬ雪ぞふりける

(妹背貝)

(袖貝)

(千種貝)

(紫貝)

(板屋貝)

(片貝)

和歌の浦に汐みちくればかたをなみあしべをさして田鶴なきわたる
みわの山いかに待ち見むといふともたづぬる人のあらじとおもへば

——當國、富來の濱は、砂白く、浪青うして。——

さをしかの朝たつ小野の秋萩に玉と見るまでおける白露

其の撫子貝。

鶯のこゑなかりせば雪消えぬ山ざといかで春を知らまし

其の梅貝。さて、呼子鳥は、おぼつかなくも馬刀貝か、いははしの夜の契りは、蘇枋貝か、烏

帽子貝か。半島の浦々渚ならぬはなき中に、こゝばかり三十六の歌仙に合せて、貝を數へて、歌

數の揃ふ名所と聞く。……

「奥様が其のお美しさで、歌仙をお拾ひなさいましたら、——富來の濱は、まあ、どんな景色で

ございませう。」

矢野は、お李枝と、ハドソンに乗つて居た。

「おい、穩でない事をいつては不可い。天氣が變ると大變だ。」

送り出して、扉際に、其の臆面のなささうな年増の女中が、

「ほゝ、では若奥様。」

「若奥様は、些と氣障だな。」

「お氣に入りませんか？何と申上げようでございます。」と悪く、ねんばりと言ふ。

「おめいさまも。」

「おや。」

をぢさんは軽く笑つて。

「姪だから、おめい様ぢやあないか。」

「あなた様もや、いかな事でも。」

女隠居も、式臺の端へ出て居たが、尙ほ乗出すばかりに、

「相良さんや。」

無論、運轉手は、和倉一番の渠である。

「富來の濱のお遊びは、私が何でも申しての、お嬢さんをお勧めしましたに、歌仙貝をの、よう見つけてあげておくれなさい。——それから、義經、卿の君の籠られた巖門の狹窟を、ご案内申上げての。」

「承知しました。——貝も十五六種は、直に發見出來ますが、さあ三十種以上は何うでせうか。」

「梅貝、撫子貝、それだけで結構ですわ。」

言葉も薫る花の色。

「お巳代がお供が出來ますと、あれは土地のもので、よく存じて居りますが、一寸お客様が立てこみましての。」

其處へ、庭口から、金兵衛が蟹股で、のこくと、うたつた顔を仰向けに、

「やあ、旦那、ご愉快——今日は快晴、仕事、恐悦で。」

これは言ひさうな事であつた。快晴はお互に、その上、運轉手もともに恐悦でなければならぬ。

「何だか、とのさまにものをいふやうだな、金兵衛さん、お客が違ふよ。」

「違ひますだかね、それでは伯良と申す漁夫にておいでなさる。」

能登も國なみに流行ると見える。……おぢいが話を心得た。

「は、濱の松に、其のコオトを脱いで、お掛け遊ばされ……今日は、大分にほかつきまするで。」

と酔顔をべろりと撫でる。

「あ、時に中尉さんは、其の後どうだね。」

「まだ、おたよりがありませんねえが。」

「然うかね、今日あたり、何處かで逢ひさうな氣がする。……しますよ、ご隠居。……」
と地圖を片手に擴げたまゝ、振向いた。——こゝで地の理を問ひなどして、其がために出足がおくれたのである。

——梅貝、撫子貝といつて、嬉しさうな、あの顔、あの容子を——
五分ばかりの急な間に、矢野はをかしな處に立つて(仔細がある)。一寸顔色を變へて居る。
其處から、玄關に横づけの自動車は見えない。眞直な廊下を一つ折曲つた角の張出しに、庭の植込の陰をうけた、手水鉢で、手を洗つたあとを、ふと身を隠したやうにためらつて居たのであるが。

唯た今、彼處で金兵衛などと口を利いて、もう自動車の出ようとする處へ、こゝから曲つたらう、玄關正面の長い廊下を大急ぎで驅けて来て、カランと下駄を引掛け状に、「あ、唯今、これを……」と新聞に包んだ雑誌ほどのものを、「廊の帳場の俵夫が托つたと云つて持つて来ました。——旦那様に大急ぎと申しまして。」——お巳代の受取つたのは玄關さきださうであるが、二階でけた、ましく手が鳴つて、一寸其の用をきいて引返し、まだ座敷だ、と思つて、空室を覗いて、それから飛んで來たと言ふ。何だらう。確に私にかい。はい、矢野先生に、と申しました。確め

た上は見るのに仔細はないから、合せめを拂ふと、むかつとするほど、ぶんと生臭い。「——いや、あとで話す。」——お李枝の怪んだ目と、寄つた眉を、掌で蔽ふやうにして傍を向かせながら、すぐ、もと通りに包み直した。

半紙判の古原稿紙に、

(現代とおれ！)

！のついた題の表紙から、どす黒い大蜘蛛と、赤い蛞蝓の夥多しく嚙合つたやうな、血と腸で、べたべたと塗つてあつて、じめじめとして持つに重い、綴目も崩れて、どろろとまだ出さうであつた。

「——油紙はありますか、なければ新しいのを買つて、ありますか。……それは結構、お巳代さんぢや不可い、これは金兵衛さんの役だ。憚りですがね、上をよく包んで、預つて置いて下さい。先方が取りに来るかも知れない。然うしたら渡して下さい。來なければ當分其のまゝにして置いて——處で置場處だがね、物置、と炭薪の納屋、それが一番、石炭殻か、炭の粉などの中が結構です、一寸汚いが然う大した事ではない。結核の血や癩病の……では決してないから、しかし、胞衣だの、あと産のおりものだの、墮胎した嬰兒のやうなものさ、いや大丈夫、男が孕んで墮胎したのだから。」

矢野の此の時の語氣と、風采は、冷靜にして鍛鍊なる醫家の趣きがあつた。

「——李枝ちゃん、一寸其の半紙を。」

をぢさんが突込み用の合財袋を、自分の持たないハンドバッグのやうに、いとしさうに優しく両手で膝に持ったのを見て、聲を掛けた。が、よし、それを待たず、迅く自動車の扉を押して出た。

「旦那様。」

「一寸わすれもの。」

一直線に廊下を其のまゝ、こゝへ曲つて、もう一つ折れると浴室づきの洗面所がある、——手を洗はうとしたのである。

つゝ、かけに廊下を曲つて、アツと引返した。渠は見まじきものを見た。其處に三人の婦が居た。年紀ごろは、おなじ若さだが、銀杏返と、島田と、圓鬚と、皆顔が蒼く、肌が白い。其の見まじきといふのは、いづれも、ものの隙に心を許し、肌を解いて、餘りにしどけない帯紐だつたからである。

並びつゝ三人の姿見に向つたのが、不意の客に、巴によつた。就中、其の見まじきといふ意味は、島田の一人の横前に立つたのが、腹帯で、乳の下を。——

「……………」

あとじさりをするばかり。さいはひ手水鉢が見つかつて、汲みおきらしいが、手を洗つた。水の音、おく柄杓が、カタンと聞こえたのに、其の洗面所は風のそよぎもなく、コトリともせぬ。矢野は、二度と其處へ引返して、事實を確める勇氣がなかつた。確めるまでもない。差覗けば消えて居るに相違ない、と思つたからである。

——宿を出端に、原稿を塗つた血と腸の呪といひ：富來行——は見合せようか。……悪い辻占でないまでも、吉兆とは言はれないかも知れぬ。——

あの、腹帯を見たか。

——六人の生命にかゝはる——と脊の高い巫女の媼のいつたことを覚えて居る。古井戸に鬼灯形の、お白神の像を結んで、若い婦の齊しく念願を籠めたといふのは、或は皆揃つて、——式臺前の榎と、ともに、此の青苔の充ちた裏庭に、洗面所を蔽うて且茂つた大木の樺の枝に蔽はれた、其の窓つゞきに、ふと三つ並んで、婦の顔が。……

顔が、古幹の陰に、一層蒼白んで、一人々々の黒髪は、葉のみだれに尙ほ纏れる。……

衝と目を反らした手水鉢に、怪しき影は尙ほ映りつつ、雫の溢るゝのは水である。

や、や、こいつを引傾けて、あふつた酒を忘れたか、其の時の血氣を思へ。笑止なるかな。神

窓の顔の、三つとも、幽に薄く動くのさへ見えて、悲むが如く、泣くが如く、怨むが如く、しかも笑ひなぶるやうである。

われ藁で束ねた、男にして、棚に釘一つ打ち得ないまでも、よし、見よ、いやが上に樗の根が崩れ落ちて、見る間に古井戸にならうとも、筆を取つて、立處に、その呪詛の蠱を薬研に碎き、瑠璃沫に淨化して、これを月光の白露とも、姿見の清水とも稱ふることを得ざらむや。職の力に、それだけの事は心得た。

これを、たとへば、直に座敷に返つて、お李枝にペンを持たせても、其くらるには、客觀して、而して描寫なし得ずや。

屹と視れば、蒼ざめた女の顔は皆消えた。

忽ち目前に顯はるゝは、自動車に待つ、お李枝の粧装。

——梅貝、撫子貝といつて嬉しさうな——

然うだ、あの原稿の一綴を塗つた臊氣は、血迷つた海月が渚の貝の數々を蔽うたとしてもよい。従つて、女の顔は、青い波を縹色に煽つて浮いた、三枚の鰾の、或は威し、或は笑ひ、或は顰んだ面構へと見なされぬ事はない。彼の魚の面は、平家蟹よりも女性にして、中には齒に鐵漿つけ

たのもあると聞く。

其の鰾を見よう、海月を見よう。

自分は——お李枝は、梅貝を、撫子貝を——

祝して、爽にドライブした。

けれども、一度其の場合に悚然とした思ひは、時々膚に寒氣を感じて、袖を引合はせ、引合はせ、温泉の町を離れて、野道を停車場から古沼を左に、踏切を越えて、やがて山懷を和倉の岬の吹さらしへ出た頃よ、——

「顔色がわるくつてよ——寒い、寒くて。」

と且言ひつつ、座席のまゝ、身動きに棲も亂さず、山の崖の木の葉漏る日ざし、それなりに、膚を薄く蔽ふかと思えて、すらりとコオトの片袖を取つて脱ぐと、弱腰を通して又片袖をすつと脱ぐ。……手際であつた。恰も拍子を取つて、あひゞきで颯と装束をかへたやうで、袖たたみを、抜いて、をぢさんの肩を人形の如く包んだのである。富來街道であればこそ。

此の紫は、不思議に矢野の面を、ぱつと明るく若くした。

が、衣紋も直さず、むく／＼と、田舎の空平の如く、頸筋をうめて着て、

「袈裟のやうだね。これで歌仙貝の遊山に赴く處は、僧正遍照といふ形だ。百人一首のあまつ風

か。三十六歌仙のは何だつけ……もとの露、末の雫や世の中の……」
一寸言を切つた。

「……朝顔貝といふのがあると好いね。——今日は五割引の蓮の花ではないよ——馬に乗つて女郎花で……われおちにきと人に語るな。とに角——意気な人さ。」

前刻の——あれは壺田と云つてね、むかし何時か、福井縣の高等官の息子だよ。矢張り其の頃のお友だちの一人でね。——あ、そんな眞面目になつて聞かないでも可い。これは筆記の中へは入らないんだから。——

まあ景色を見ながら……

——お前さんが氣にするから話すんだから。アントニオ一派とは又組が違つてね。私立中學のなまけものなんだよ。——下宿で贅澤ばかりして居る。それがね、英語を教はりたい、といつて知合ひになつた、すくなくとも、其の時分では、西洋人直傳といふので、私の習つたのを正則といつた。下宿へ行つたり、内へ來たりして居るうちに、暑中休暇が來て、越前へ歸ることになると、一夏遊びかたがた福井へ來て、一所に居てくれないかと云ふ相談さ。

其の、病氣あがりて、試験も受けられず、ぶら／＼して居た最中だ。……貸本の小説も大びらに讀めるし、第一本も買へる。いくらかには成るとしみたれて——三日と内を離れて旅行なぞし

た事のないのが出掛けたんだがね。二月ばかり居たらうか。家庭教師とか云つた格だけれど、先方は年紀が上で、内へ歸れば若様だ。

縣で一二の高等官と來ては、その時代だから、田舎の出さきの旅館なぞでは——知るまい、李枝ちやんは——御神燈で見る波の花とは違ふ？……舊藩の領主あつかひだものね。其の若様です。い、加減な屬官でさへ、三尺下つてたてまつるんだ、處を此方は平民の町人の倅です。段々扱ひが太郎冠者になるからね、一度衝突つて、それなりです。

つい近い頃だよ——それでも一二年経つたかなあ。突然、名刺を取次がれた。壺田——は忘れなから小石川の二階で逢つた。が、人様の事は言へないけれども、ひどい落魄れやうで、吃驚した。それよりも可恐く人相が變つて居る。何より、白眼がどろんとして恚う人を見ると血走らんだ。父なき後は、一家みな離散した。……當人は北海道で牧畜を遣つて居たが、健康を損じて、此の次第です。しかし、文學に對する宿志は、昔から斷じて棄てない。で、心血を灌いだのだから、これを——と云つて出したのが、出掛けに受取つた、(現代とおれ!)といふ原稿でね。いづれ拜見をが、忽ち癩に障つたらしい。いづれですか、然うですか、いづれ又伺ひます、ともう喧嘩腰さ。まあ、と此方は言ふのに、悪慫慫にひつたりとお叩頭をして、いづれ伺ひますから——でも、無事に歸つたつけ。

五日とた、ぬうちに、然う……夜分だつた。勢猛に飛込んで、如何ですと、膝詰めで突掛る。おそれをなしたが、さあ些と何うも、と言ふと、何處が悪いんです、何處が、言つて見たまへ、とじろりと睨んだから——此の馬方め……—こゝが田鶴濱、いゝ處だらう、すぐ海だよ。」

と、紫の肩をお李枝に寄せた。が、遍照は、歌もなしに、

「私は馬士にしろ、馬方にしろ、一度も輕蔑した覺はない。どつちかといふと好きなんだ。が、北海道の牧畜屋だ、羊飼といふ柄ではないから、此の馬方め、と思つたつて仕方がなからう。——醫師にたとへれば、何處といつて聴診器の當て處がないのです、到る處に濁音が聞こえますから。——たゞし、藪ですよ、藪が診たんですよ、といふうちに、唇も手もぶるゝと震へ出して、顔を眞暗にしたと思ふと、俺を土左衛門に扱つたな、よし、覺えとれ、と云ふが疾いか、手にまだ預つて居た、あの原稿を引奪つて、引摺んで、肩の骨を鳴らすばかりにすつくり突立つたが、どしん、と壁に打つかつて、階子段をどゞどんさ、もう、ぴしやりと、えらい格子戸の音をさした。

あとで解つたが、私の知合は大がいて居た、方々持廻つた原稿の其の、(おれ!)なんだ。——あ、白濱の橋が小さく見える。運轉手さん、其の梢は綠雲寺の銀杏かね。」

「然うです。一寸お留めしますか。」と振向く時、前屈みに乗出した矢野と、相良は互に顔を見た。

「いや、つツと其のまゝ。——早いな、もう来たか。——大きな銀杏だらう、それ……これは、これは、根の處にも地藏様が、此方に向けて——李枝ちゃん、挨拶をおし、道中の無事なやうに。……」

——聞けば、いかにもと頷かれる。一目其の容子を視てさへ、確に然うらしく思はれた。

のみならず……前日、床しく可憐いまで、機音を聞いた矢野の直覺とでも言はば言ふべき想像では、それが今しがた通抜けて来た、而して、あの日の女房も居合はさないで、鏡の水にも、ふと街道の寂しさを感じた。白濱橋こなたの小さな飲食店の納戸に、人目を避けるやうにして居るといふ、其の婦ではないか、とさへ思つたほどである。

これは、いはれの無い、餘り物語風な當推量であらうも知れない。けれども、偶然は、時に奇遇を生ずる、——わけて音のみの梭の響きは、傳説と事實を織りまぜて、しばゝ落莫の野山を彩る。……斷じて、其の娘でない誰が言ひ得よう。

さて其の婦かと渠が思つた一人は、かよわさうな身姿を、尙ほ肩身を狭く一卷きしめたやうに着莫産を絡つて、薄汚れた手拭で、頬被とまでは思ひ切れないが、色白な若い顔の、眉の隠れるまで、深く後で引結んで、加賀笠——菅笠を被つて居る。

六七人、おなじやうな一群に交つて。――

どれも似たほどな扮装で、籠を掛け、天秤を荷つた――連の中には、他の疲勞をいたはつて、其の天秤を二本に、籠を三人分引かついだ――尤も中味はもう空だが――遅しい大年増があつて、

それなぞは、頬被を超越した、すつとこ被りで居たのである。

みな富來の磯濱から、魚市、問屋の手をへないで、直接に魚の行商をする、五里七里の道を、小坂、峠を越えるのであるから、夜のあけ切らぬ間に、苦屋、蟹の宿を出て、沿道の村々宿場を商ひつつ、和倉がさかり場だけに大の得意で、代をこなして歸るので。……むかしは、いたゞきと稱へて、京の大原女のやうに、頭に戴いた盤臺から、鰈が鰭を刎ねたり、蠔螺が角を覗いたり、鯖鱈が光つたものだけれど、近頃は恠うして荷ふ。……

矢野たちは、午餉を済ましてゆつくりして出た。丁ど二時下りだが、もう其の連中は商賣を済ました歸路。……

とすると、少くとも六七里の足はかけて居るが、達者なもので、脚絆さへ然まで汚さない。思切つた股引もあつて、残らず草鞋穿だのに、其の婦だけは、日焼けのしない脛を、殆ど葉で引殺いたやうな露出しで、素足に草履なのだが、他とは違ひ、あるくのに、股を厭つて、もろ脛をしめるので、着莫産下は一足脚に似たのが、毛を撈りつつた女性の案山子のやうである。あはれ、

しかし女である。引上げた膝のあたりに、ちらりと紅い色の漏れるのを、それさへ隠したさうに悄乎して居る。

「お旦那。」

といった、のつけの呼聲が――大きなおはぐろの口をあけたのは、――すつとこ被りで、天秤二本引受けた、其の遅しい大年増で。

「お旦那、助けて遣つて下さいしよう。後生になるだ。功德でございさあ、此の娘は。」と、群に包んだ娘を指して、

「城端(越中)の女工場から、はあ、勤めが辛いところへ身體をおやしたで遁げて来ただが、些とんべい、此の容色だで、仕事のほかにも、目さ掛けて居る、おへねえ奴等があるだで。追手が鶉の目鷹の目だでね、我等がうちの莫産笠で、晝狐で化けて来てや、在所の富來まで行くだけんど、今にも其處らへ追つて来て、見あらはされて頸首さ引摺られさうでなんねえで、心だまもそはつく處へ、我等とは違つてな、工場で寢足だで、驅走りが出来ましねえ。やつと此處までは、手引き尻押で急いだけんど、はあ、もう何うにもなりましねえ。お旦那、其のぶつかく宙を馳る俣さのつけて、助けて遣つて下せえましたよ。輪島道は、さつき後だで、行かつしやる處は富來づらえ。」

と一息にしゃべつたのであるが。

こゝに魚賣の年増の言の中に聞く中島は、川口に白塗の鐵橋が架つて此のあたり海を漕ぐ船の終點であるらしい。すぐ汐入の川に成つて、それが段々に山間の細谷川の流となる。

たとへば、能登灣の全景は、光琳風の千鳥を右に視て、中を青海波にすかし、周圍の渚を胡粉で流した、恰も其の尾を開き羽を伸べた、その脚の爪にも似て居よう、爪で打つ波を刎ねたしぶきが、やがて溪流の音に響くのである。

白濱橋は、街道を縦に通る、その中島の鐵橋は、折曲つて横に渡る……又、恰も能登灣の緊口に以て、町は一筋だけれども、長く續いて、兩側の商賈は老舗が多く繁昌する。……通り抜ける、街道が兩つに岐れる。

——右が、此の間行つて來た輪島街道、其の留守に——「李枝ちゃんが來て待つたんだよ」——などと、にせ紫の僧正は話したが。

魚賣の女群像は、其の町から出品ぶりに搬出されたものらしい。それから先、田鶴濱、和倉のかへりにしては、時がや、早いのであつた。

其處で——自動車を見掛けて、工女の落人を頼まれたのは、熊木——と云つて、一つさきの村へ進んだ兩方打展いた廣田畝の曠であつた。

馳せつつあるのを呼留めたのではない。その時は、二人が一寸自動車を下りて居た。それは、お李枝が、扉の窓から、白鷺を見つけたからで。……

「あら、鷺が居るわ、居るわ、歩いて居るわ、不思議ねえ。」

芝門前の娘には、白鷺の歩行くのは不思議らしい。淺草田畝の一つ家の森に雁を飛ばす知識はあつても、さしあたり其の所帯では、襖にも掛軸にも、白鷺に知己はありさうもない。

「一寸留めて、運轉手さん、——い、でせう。」

と矢野に瞬きして顔を向けると同時に、きょうにストップした。

「あら、あら、一羽二羽ではない事よ。入らつしやい、をぢさん、まあ、意氣ない、姿。」

と、紫雲英の花の咲き残つた、小流のへりの道端に下り立つたお李枝は、力二郎が汗と力で工面したものは思はれない、見る目も爽かに、涼しく軽さうな淡藍の涼傘を、たゝんだま、眉に青い影。前髪に翳しながら、

「入らつしやいよ、無精だわ。」

「あ、これは綺麗だ。」

をぢさんは、さすがに、僧正の袈裟を脱いで出た。

「居ますなあ——恠ういふ處に居ます。——冬分は、和倉の停車場の、あの古沼に來て、群れて

居ますよ。」

と運轉手、相良も降りた。

「人は苛めないかね。」

「禁鳥になつて居ります。」

「道理で、耕して居る傍を平氣だね、いゝ姿だ。」

「まあ、ちよいと、歩行いて居るのばかりではありませんわ。あの向うの、遠くの蘆の前に——見えて。……小さなおみき徳利のやうな白いのは皆鷺よ。見えて……まあ、何うしよう、嬉しい、十羽や二十羽ぢやないことよ。あゝ、そして歩行いて居るのは、親子づれだわね。ご覧なさい、小どもが眞白な羽をひらくと仰向いて、母さんが、ご馳走を、まあ可愛い、あたし、どうしたらいい、だらう。」

と、うつかりしたやうに、膝をうつて、

「嚙つて遣りたい。」

「はゝゝ、お嚙りになりますか。」

と、相良が無邪氣に莞爾。

さつと色を染めたのが、白鷺の羽をうつつして薄く透通る。

「ご免なさい。」

「そら、そんな嚙るなどといふから立つて遁げる。」

親鳥の、田を低くすつと立つのに、仔はひたひたと翼を合はせて飛ぶと、美女の指の反るやうに、雪を撓はし、もろ羽がひを打つて二羽がひらめく。

親鳥と小鳥と、其の一組が飛立つと、田を漁つて居たのが、續いて又二羽飛んだ。——五羽七羽、數へるうちに、目近なのが、残らず空へ舞上る。……あの、遠くに、イ、イ、イと、字を白く記した、活字よりは大きくて、一寸作者が原稿に認める文字ほどなのが、端から蘆の葉の雪を削るやうに、すらりと飛んで、ひらくと田の面へ降りる。

その降りると、はじめ飛んだのが、しばらく低空で、翼を交はして、入亂れる。が、眞つ先の二羽の、早く宙を翔けるのが、日光に銀光を輝かし、眩く目に消える、と思ふ間もなく、山の端の樹の茂に鮮明に浮いて、やがて遙なる高峰の森の、艶々と黒く聳えた、梢のあたりへ、胡粉の綾をたなびかせつつ隠れるのである。此方では、言合はせた如く、其の最初の二羽を何處までも三人で凝視して居た。峰の森へ隠れた時、思はず、矢野と運轉手が面を合はせたのであつた。

「先生、そつくりですな。」

「あゝ。」

立ちどころ、暴風雨の來らむとする瞬間に、金兵衛の掌を飛び抜けた、紙のお白神の姿を思つた。けれども、傍に恍惚とするまで——また續いて銀の翼を翫すのと、影をはらくと降らして、雪衣を田に掛けるのを視て居るお李枝を、運轉手に目顔で知らして、矢野が然り氣なく、

「返照ヶ嶽かね。」

と云ふ、襟は冷たさうであつた。

何故か。

「返照ヶ嶽は後の方です。同じ方角に見えるですけど、山が故つて居りますので、位置は西と東です。驚の入つた……あの山は鉦打です。」

「なたうち。」

「鉦打峠——これから、あの峠を越えるのです。」

お李枝が漸と田の面から目を離して、

「あ、好いものを視ました、あたし、嬉しいわ。」

と云つて然も謝意を表するやうに、矢野の顔に、睫毛の影を送つたのである。

そゞろに、をぢさんは胸が切つた。恚ばかりの事に、其の喜びやう。……日比谷の公園を覗いてさへ、孔雀も鶴も見えるのに。お李枝が経て來た半生の、ものあはれさが察しられつつも、其

の楽しい言葉を、目頭の滲むまで、渠も嬉しく受けると同時に、もの越が何となく——此が最後で、あきらめた……思ひ残す事はない、——なごりの聲のやうに、ふと、うら悲しく、心細く聞取られた。

但し憂慮は他にはない。前途に、もしや變つた事が……

その瞬間、矢野は、この熊木から和倉へ引返さうとさへ思つたさうである。

が鉦打とか。峠の森は、霞の煙るばかり陽光に包まれて、峰の裏透く青空は、輝く波と、白砂の渚を雲に漾はせる。其處には、梅貝、撫子貝、紫貝。

「乗らう、李枝ちゃん。」

落人の菅笠を中に圍つて、莫産の盾が前後に八九領。暖に脚絆が馳亂れ、荷と天秤が交叉して、足弱を扶けて寄つたのは恰も其の時だつたのであると言ふ。——

「さあ、お乗り。」

大年増の一言に快諾したのは、——前にも言つた——小料理屋の奥の機の音が、若い工女の、すんど切な莫産の袖にも通つたからであつた。不思議に、巨池の底、古沼の中から響く、織機姫

の梭の音を聞く如く、ゆかしく、なつかしく、しかも、寂しく凄く、矢野は身に沁むとともに悚然とした。

「さあ、遠慮なく。」

かく、いふと、追手のかゝる工女の身を引受けた事に成る……一種幽玄怪靈なる梭の音は、どんな糸を織るだらう。

宮前——次の村へ向つて、自動車の進轉しつつあるのを視れば、落人の工女は、前面の座席、助手臺に乗つて居る。これは……無雑作に、しかし殆どいはれなきとも言ふべき、何等かの不安が胸に響いて、ヒヤリとするまで、膚冷たく感じながらためらはず同乗を引受けた矢野は、だから席につくと、お李枝の情の紫のコオトに肩、頸筋を深々と包まつて、一寸沈んだ面色をした。引續いて乗る筈のお李枝が涼傘を軽く、足掛けの臺について、工女を顧みて、

「あなた……」

といった。——優しく謙遜でたて引氣の備つた、片門前の娘は、自分とても頼まれた心になつて、落人を真中に庇はうとしたらしい、と一所に、鐵漿口をはじめ数々の魚賣の媽々姉えの立圍んだ目前り、島田鬚で、小説家にひたと寄るのは、襖捌きにも心づかひされた所爲であらうも知れない。

が、運轉手の差伸ばした腕で、其の助手席の扉がパタンと開いたのが同じ時で。たゞ、笠を傾け、莫産を引蔽ひ引蔽ひして居た工女は、さながら女案山子の身の置きどころ、めなし鳥の巢を見つけたやうな趣で、筈込むばかりに、白脛を長くすぼんと入つた。

お李枝の背を手で押す眞似して、一揖するとともに、扉を閉めつつ運轉手が、却つて安氣で好ささうです。

と言ひすてに、身を翻して乗つて、把手に手を掛けた。

工女が笠を脱いだ、前髪に廣く、頸窪に古手拭を引詰めたまゝ、二人に無言の頭を下げ、窓を覗いて、魚賣たちに又禮をした。

「お旦那、難有うございさあえ。」

「息災になあや。」

「無事でえの。」

「さいならえ。」

聲も手足も入亂れて、數の草鞋の、忽ち健かに動く中を、且押出さるゝ如く車は驟を呑んで進んだ。

皆おなじやうに言が途絶えた。魚賣大勢の異口同音が、しばらくの間、がや／＼と、形なきも

の近く囁くが如く耳に附いて、聲をさまたげたからである。
蛙が高らかに鳴くのが聞える。

ごと、ごと、ごと、がた、がた、がた

ふら、ふら、ふら、ふら。

ごと、ごと、ごと、がた、がた、がた

ふら、ふら、ふら、ふら。

村のかゝり口に、板羽目の裏構へ、廣田畝の日の漲るが如きを吸ひ、紫立つまで、廂に陽炎を満喫した、御堂の旗納屋らしいのと石垣まはりの空地に、まだ學齡ではなささうな幼児が十二三人、——何處とてかはりは無い、棒ちぎれ、抜き刀で騒いで居たのが、同音にどツと囃した。

「ふら、ふら、ふら、ふら。ふら、ふら、ふら、ふら。ふら、ふら、ふら、ふら。——
而して跛の足踏をして、拍子を取つて體を揺つた。

ふら、ふら、ふら、ふら。

蛙の聲よりも、上つたり、下つたり、忽ちとほけて、跛になつたり！

ごと、ごと、ごと、がた、がた、がた。……

いや、何うも……仰せの如く、路のこゝへ乗つて掛ると齊しく、暴風雨のあとの悪道大泥濘が、

それなり干固つた三角波に揺りしらまされて、彌次郎兵衛が乗つた駄馬の如く、半町ばかりは、
座にも堪らず、前後左右に振廻された。

「しやうもない。」

さすがに、把手は引据ゑながら運轉手は、思はずらしく方言を口走つた。

「李枝ちゃん、かはい、坊やたち——囃る氣はないかい。」

「可厭だ、かへりに、もしか、こゝを通つたら、ふら、ふら、ふら、ふら、と言つてやるわ。」

かへりに、もしか、其の疑問の意味が、ふとまた儂く聞かれた。

うしろで、哄と又囃す聲。

車は、やゝ急激に角を曲つて、白木の大鳥居の前を通つた。左右一帯の樹立暗く、村道一時に

蒼々然として、森嚴の氣が襟を襲つて冷たい。

「お宮は——運轉手さん。」

「はあ、白山権現様、わかみや。」

工女は俯向けに面を伏せ、運轉手は血の上つた顔を、あらぬ方に背け、二人は目を見合はせた。

が、そのまゝ澄まして前途を視た。——婆、媽々ともに、血氣な壯漢が八九人、頬被りに、古帽

子。笠を交へて、水田の代を搔いて居たのが、自動車の進むにつれて、むくく、ばらくくと動

き出して、道傍へ寄集ると、摺合つて狭く通る、車體のすぐ傍で、鋤、鍬、馬鍬を亂脈にとつと動かし、上下、左右に振被り、打込んで芻ね、搔きまはして、掬ひ飛ばした。ばしやん、びしやり、泥田の泥を、扉から屋根へ浴びせたのであるから。――
中には、引掬つて、打掛けたらしいのさへ見受けられた。が、故とではあるまい。手勝手で、丁ど打撞つたものであらう。

しかし、其處は、やがてのぼり坂の取着きで、たとへば一田の其の人影は、縦横の畝、暖かさうな泥土とともに、上りかゝる車の屋根の上に、しばらく浮いたほどだから、行向つて眞平になる横面から、鍬、馬鍬の泥を受けるのに、一方は、まだ低いけれど――もう崖で、除けも、かもしも出来なかつたは是非に及ばぬ。
勢ひは凄じい。芻ね飛ばす泥しぶきの飛ぶ中に、田螺がまじつて、日に光つた。
通抜けても、窓硝子の片面の泥は、何となく形が其の田螺に似て、數は人に會はせて少いけれども、皆片目つゝ、附着けて、どろんと覗込むやうな感じがする。
「いやだわ。」
と肩を引くやうに、お李枝が矢野に身を寄せた。
「氣に入らないんでせうかね。」

「まづ、氣には入りますまいね。一寸見た處では拙者も少いらしい。」
と、をぢさんは笑つたが、色は白けた。

運轉手が聞き取つて、

「一村落到、平均一所帯ぐらゐるづゝは、あゝいふ連中があるですよ。」

「いや、私は、はじめは其の姉さんを見知つたのが居て、路傍へ寄つて來たのぢやないかと思つて、一寸驚いたよ。」

「濟みましない、旦那様、――奥様。」

「まあ、何をおつしやるの。」

「氣にする事はありません、安心をしておいでなさい。ついでに此方へ入つては何うです。端といつては、ぞんざいだが、其方がづつと空いて居ます。」

「はあ、わしは馴れねえだし、跨げましねえ、恥かしうてな。」

といふ色澤が、一層沈んで悪いのであつた。

が、其の虐げられた、病身らしい落人の面さへ、ぱつと冴えるまで、花の明い處へ出た。

牡丹であらう、一樹に二三輪づゝ、五株ばかり叢を合はせて、丈は三尺に餘る。枝たわゝに、尙ほ未開紅を葉と葉に含んで、根も明いまで薄紅である。左右に相列つて、蘇枋が又今を盛り

咲いた。一段、石垣が、坂なぞへに高くなり、廣々とした空地の出端に、緋の天女の、紫の雲を踏んでゐんだやうに、思ひも掛けず咲きかゝつて、人を待まうけた風情である。

空地の奥に、緑の森に陰々と包まれて、崩れかゝつた屋根ばかり。たゞ、裂め、朽め、中暗く、雨風に曝れた雨戸の、ひた／＼と閉されて、長く續いたのが、恰も三千、五千石の大船の船底を横にして、落葉朽葉の苦を葺いたやうなのが空しく立残つた。

また路を挟み、谷へ突出た崖端の松の姿の、小様ながら、一本松とも名づくべきに、鎧も羽衣も掛けないけれども、のび上れば手の届きさうな梢に、紫の藤の房々が扉に届くばかり枝垂れて居た。

「前年の大暴風雨で破壊しました、寺の庭です。……花は咲きますな。……此の景色を貝にして、濱へ敷いたのが富來ですよ。」

「まあ、嬉しい。」

「きれいで、ござりますなあ。」

と低い聲で女工も言つた。

「牡丹だね。」

「芍薬です。」

と、スツと出る。その芍薬の丘を載せて動くやうに。

この不思議な、自然の繪襖の裡へ入るのが、何故か急に寂しくて、矢野の手は、思はず運轉手臺のシイツを掴んだ、聲をかけて、引返さうと思ふ衝動をうけたのであつた。

廿三人の馬士

「えい、えい、えい、えい、えい。これ、わい等、皆來てお辭儀をしろえ、旦那が、ご挨拶を下されたんだ、えい、お辭儀をしろえ。」

大聲で喚きながら、煤色の掛け帽子の下で、眇を光らした馬士は——其の癖お辭儀どころではない。自動車の扉に附着き、ぬいと立つて、故とらしく、鳶の尖鼻で、うつむけに掌の吸殻を狙ひつつ、眞鍮駄六張の煙管に、急いでも吸ひつけず、且つ眇で、火玉を追ひ、火氣を引いて、ぎろぎろと車内を睨んで、……又喚いた。

「えい、えい、えい、えい。これ、わい等、皆來てお辭儀をしろえ。旦那が、ご挨拶を下されたんだ。」

——實は、不可であった。

いはれなき、いや、いはれがあつても、會釋、挨拶は、對手の取りやうによつて、惡慫も事過ぎて、却つて頭横柄に取られる場合がないではない。

事のこゝに到るまでも、途中兩三度、そんな覺えが、それも、ないではなかつた。一體此の街道たるや、鐵橋でさへ容易く自動車が替らない。長崎の見通しなどは、行逢ふ、馬、荷車が少しでも畝の開いた足場を選んで、自動車のために二三町もさきで楫を留め、手綱を絞つて待つのである。

和倉一番の運轉手は、軍隊の出だけれども、おとなしいから、其の都度會釋をして驅抜けた。時とすると、進行をさへ弛くする。……乗つてる方でも、お世話様、ご苦勞様と——さて、此だが、いづれ隙費で、面倒に違ひない。それに車力、馬力で、汗水の鹽を舐めて居るのに、此方はのう／＼として、忙しくもないのに道路を引きこそげ、砂煙で飛んで、しかも、ご連中の口を藉りれば、素的な別嬪の新姐をのせて、甘ツたるく伸びた面をして居るのだから、小忌々しく癩に障る。其處で、言合はせたやうに、日向が眩くつて、目は細うしても、唇は何の方角か、屹と曲るのがお定まりだけれども、中には、好意に其の辭儀をうけ入れて、しかんだ眉の紐を解いて、ニコリとするのも見受けられた。

で、途中いろ／＼に加減をして見たが、すぐ今のこと、路傍の打掛け、刎上げ、泥一揆の時から、善惡によらず、拜倒しと量見を極めて居た處へ、——此の馬士等に打撞つた。坂はや、急勾配に、崖は深く、谿河の流が響いて、路は高く、ます／＼上つて、次第に山懷に包まれる。

「あれが鉦打。」

森木村の畷から、遠く、遙に、白鷺の行方を眺めた其の峰が、前面を壓した時であつた。

「これから三十九曲と言ふですよ。」

三十九曲り——次第のぼりに。しかし、乗掛け、引廻し、何等の不安なく、車はや、仰向きつ、細く撓ふやうに進んだが。

「をぢさん、これで十三よ。」

一方が深い崖で、谿河の響きは次第に凄くなりながら、打蔽ふ雜樹越に、田も、畠も、長閑にして、時には海も見はるかされ、片帆も白く雲に浮いて、紫雲英、鼓草、山吹など、一かたまりづ、きれいな鞠を投げたやうに見えて居たのが、此の時は、巖の屏風で切つて隠したやうに道の兩方が山になり、杉、檜、左右に茂つて、暗い影が、黒髪にかぶさると、耳元も頬も、尙ほ透通つて、「——十三——」とかぞへて折つた白い指のさきに、何故か、この美女の、其の月の今日

の運命の怪しい星が宿つたやうに、ふと怪しく凄かつた。

波形に曲らうとする坂の前途の山の根に、眞四角な太い木の、新しい小口が、地上三尺ばかりの處、左側の山の樹の下に横はつて、薄樺色に、するくすると動いて行く。……

「するりするりと行くですな、材木の大きな尻尾が——あれに鱗があつたら大變です。は、」坂が曲つて居るから、その角材の動くのは、後部、四五尺に過ぎないが、見越しがつかないので乗切れない。把手を緩くして、運轉手はそんな串戯口をさへきいたのである。

が、加減をしつつ、つツと近づいて、其の坂口のカアブを轆が廻ると、駭いた。串戯どころではない。敵りはあるが、次の角へ折れるまで随分長い一坂は、同じ馬力の荷車が残らず夥しい材木を積んでづらりと列を造つた居る。二尺角にも餘るのは重量のため大きく一材を積んで居る。

手頃な、それも見事なのは、一臺に十四五本を積累ねて、八臺九臺、十、十一臺、いづれも三間半——四間ぐらゐる丈があつて、殆ど眞新しい。

見た處、玉川の瀬に長筏を組んで流すやうに、馬の背を借りて荷車ぐるみ、さらりと山間に浮棧橋を掛渡した、鬘越に青葉が細流ぐ。かの神通川の船橋の、鰈のぬしのそれではなくて、あまたの馬が列つて、山を浮沈みして渡るやうな玄怪なる光景を呈して居た。揃つて、赤味勝な樺なす材木であるから、山間もおなじ色を籠めて、ぼつと明るく、落葉時で

ない上に、行人も稀な故か、道も掃いたやうで、赤土に埃も立たないで、材木の香が、芬と車を襲ふ。景色にも、其の香にも、はじめは親しさ、可懐さを味はつたほどだつたが。——谷川は響き、松風は聞こえたのに、これほどの馬の蹄爪と、輪の轟きのしなかつたのは、エンヂンの音が相殺したものであらう。

「可恐いわ、あたし、何うしませう、こんなに馬が。」お李枝は一目見ると、もう其の胸のふくらみを殺がれて居た。江戸子の……いや、東京の女性……娘といはう——娘は、悪い癖で馬を嫌ふ。……憎むのではない、其の顔の、のほりと大きいのに、壓迫されて恐怖をなすらしい、……惟ふに孔雀の尾を擴げるより、鶴を折る、血のながれによると見える。

「大丈夫だよ。あの顔が打衝つたつて。此方は金城鐵壁です。——鐵の船に乗つててごらん、鱈や鮫が喰ひついたつて澄ましたものさ。」尤も、矢野は左に居たから、馬の面の、赤く、黒く、二三度扉に摺れくくに成つたのは、この方ではなかつた。

そのうちに、五臺六臺と抽いた。が、それさへ容易な事ではない。

馬士たちは、行儀よく左側によつて、其の馬隊の綱をしめ、材木の丈を餘して、少しづつ、車との間隔は取つて居るものの、みり／＼と重荷を積んで、路は狭し樹の根は堅い。……少しの勾配でも上へ向くと、脚が地を蹴つて鱈爪が空轉を憂々と鳴らすのであるから、其の都度、づらり、ぎらりと馬と車の列がwに亂れて道を塞ぐ。其の間を、この場合では、目に餘る——ハドソングが大きく、然も細く、辛うじて波線を絞つて抜けたのである。

抜けはするが、馬の滞つた時は、幾度も幾度も、運轉を留めなければならなかつた。

さて、後も前も、馬と車と材木に遮られ、八陣を崩した稻妻形の眞中に、今は息苦しいばかりになつた。

爾時たつた。運轉手が扉を開けた。半身を乗出すと、

「前——まだ幾臺ありますか。」

其の乗出したのと、殆ど鼻の打衝つたのは、扁つたい日焼面に、茜木綿、向顔巻を押つ立てた、中でも年の若い馬士だつたが、

「へ、へ、ふ、ふ。」

と唯鼻で刻んで笑つた。

瞭然として、敵意がある。

「引返さう、思ひ切つて、相良くん。」

「そ、そ、それが何うも……バツクで、逆に四五臺を抜けるのは至難です。それに、此の上りにか、つて居ります。無理にあとへ抜けた處で、車を向けかへる處がないですから。——何でも突切るほかありません。一寸、さきの様子を見て來ます。」

投げるやうに運轉手が下りた時、ガクリと膝が浮いて、お李枝の手が密と矢野に絶つた。

不快な汗の出る分秒がや、續いた。

運轉手なきモオタアは障泥を煽つて、間斷なく鳴り響いた。

馬は、湯のむれたやうな凄しい鼻嵐を、ふツふと彼方此方に吹立てる。間近な馬士は、皆揃つて、其の轡頭を押へながら、片手で耳を塞ぎ面を撃めた。——此の場合、皮肉などを言ふべきではないけれども、片耳をさへ塞げば、渠等には音を遮ることが出来るらしい。

向うの坂口を、翻る如くに出て、運轉手が取つて返した。

ドンと横倒しのやうに乗つて、腰を落とすと、帽子のまゝ、額の汗を、拳で横拭して、ぐつと又乗出し、逆に後を見たが、

「七車か。——先生、以上二十三車ありますが。」

「無論、停まらうよ。一度残らず前へ出して置いて、あとへ引返すとも、時間を待つて富來へ行

くとも、とに角それからの思慮にするんだね。」

「然う願ひます。——濟みません。」

「姉さん、氣の毒ですが。」

「はい、なんも。」

と一倍消入りさうな聲があはれに、また心細い。

「さあ、お前たち、少しくつろぎをつけてくれ、一寸戻すぞ。」

と山の右側へ、成るたけ開かうとして、車がじりじりと二三間動いた時、扉にひつたりと近かつたのが、件の眇だつたので……

「お邪魔をします。」

同時に叫び出した次第なのである。

「えい、えい、えい、えい。これ、わい等、旦那が、ご挨拶なさるんだ。皆來てお辭儀をしねえか、よう。」

早く言ひがかりをつけるつもりか、自動車のいま停つた間、馬士等は一步も馬を曳かなかつた。あの、順に前面をずる／＼曳摺る……いつも、おなじ場合におなじ形した、坂口の材木の後部

は尾を切つたやうに、それも留まつた。

のそ／＼、どや／＼どやと、集つたのが、忽ち十人に餘つたらう。

運轉手が向直つた。

「もう、澤山ぢやあないか。」

「うんや、然うでねえ。おれども一同に下さつた挨拶だで、皆が順にお辭儀をしねえでは相濟ま

ねえだ。」

「馬鹿な事を、此奴等。」

「穩に——」

と、制する片手に、お李枝の手が熱いのである。

「此の上、何を挨拶をしようと云ふんだい。」

「皆、集つてから更めてやらかすでな。待たつせえ。」

「待てるものか。」

「余りの事に堪へ兼ねたか。」

「おい。俺は軍人だぞ。」

「はあ、おつしやるの。へ、へ、鐵砲も劍も持たねえ軍人様が何うしただい。」

「先生、ピストルはお持ちにならん!?」
と燃となつた。

「つい、探偵小説をか、ないもんだから。……」

と、うつかり言つて、自分で呆れて、ハツと見ると、首低れたお李枝の顔は、耳朶まで、いま火のやうな、それにさへ且まさる。大人氣なさと自家虚飾と、不用意の極りの悪さ、恥を覚えて、面がほてつた。

がつくり失望したやうに、唯、確と把手に手を掛けて、それとも、尙ほ背後へ乗出して透し見たが、あとの車は、道を横に一臺ごとの堆い材木は、直斜に柵を掛けて壘を築く。人の身ならば、すり抜けても出られよう。自動車の進退は、六尺といへども極まつた。

「うへツへツ、へツ。」

唐突に、眇が茶色の唇を擴げて、高笑ひをして、

「其の顔色はよ。何も案じごとねえだ。おめでたアい祝言のな、婚禮の挨拶だでや。うへツ、へツ、へツ、うへツ、へツ、へツ。」

揺り笑ひを、酒焼の胸と胴腹から揉上げると、何度目か、掌にころがしてた火玉をふつと吹飛ばして、陰氣に上げた毛だらけの手で、のろくと向うを呼んだ。

「えい、早く来う、早く来う。」

恰も其のカアブへ、蟹のやうな面を出した茜顛卷。——此の若い奴は、運轉手が馬の數を算へに驅出した時、すぐあとに續いて飛んだ——が、すたくと返して来た。

馬士は、其のあとへ、もくくと二人三人づつ、巖角を湧いて出る。

茜顛卷は、引返すや否や、扉に併行した其の持分の車の、高い材木の上へ飛上ると、樹は被さつたが、一天晴れた、きやりの音頭でもとりさうに、青空の左右を見廻し、硝子を舐めるほどにべろりと舌を吐いた。

「へい、鼻前へ龍宮が顯はれただ。中に美しい乙姫様がござらつしやる。一つ雲の上から覗くだかな。」

直ちに材木を足場に取、泥草鞋で宙を跨いで、自動車の屋蓋へ、崖の石の崩る、如く、どしんと乗つた。

此の上は、少しでも轍を動かすと同時に、馬士を一人振落して不具者にする覺悟がなければならぬ。——残つた敵の其の時の兇暴を思へ。

自動車は、これで完全に封鎖された。暗礁の窮地に据ゑられたのである。

「よう、へい、些とんべい、甘い、うまい、堪えられねえ香がするぞ。」

と、屋蓋で三尺を解いた曝出の腹這ひで、ぴたりと附着き、お李枝の座の硝子へ、倒に眼を並べて又舌を吐いた。大蛇が板一枚とぐるを巻いて、且つ鎌首が覗いたやうに、お李枝の頬と唇も颯と蒼白い。

——白濱橋のあらしの時、金兵衛が屋根の上を越す浪に、鯨の鰭を見たのさへ、殆ど人をして狂せしめむとした。馬士の腹が島田の上を壓したのである。

矢野の手が、や、堅く、運轉手の肩を引くと、押掛つて、數語を其の耳に囁いた。

「は、は、は。」

尙ほ數語を注込んだ。

「は、は——承知しました。」

ドンと下りて、ネクタイを正しうしたが、

「親方。」

と呼んだ、件の眇を、六七間傍へ導いた。其の肩を組んで揃つて行くのに、むらくと馬士が續いて行く。

「心配をしないで、心配をしないで。」

お李枝の手は、兩手は袴と矢野の膝にわな〜と震へて居る。

ぐいと、向返ると、眇がのろく頭を左右にふりつつ、然も故とらしく、のそり〜と戻つて來た。が、

何等の條件か、談判は、不調だ。

唯、思ふまあらせず、眇の手は扉をドンと開くや否や、胸を圍ひ、膝を緊めた、矢野の不意を打つて、肩に半ば外して居たコートを鷲掴みに引摺つた。

「何をやる。」

將の鎧の紫末濃を分捕つた。戦ひは既に決したのである。

「へ、ん、——早い處が身ぐるみ脱ぐ……財布も時計も身ぐるみ脱ぐ——と言ふでねえけ。」

「うむ、きれいな酒張と脱ぐよ。素裸になつて、空気で生水をしてやらう。汚え手を出すな。」

「處が脱がせねえ。身ぐるみ脱いで貫はねえ——此のコートは、へい樹の根へ敷いて、お座敷を拵えるだ、龍宮の姉様の祝言に、いくら此方人等、對子が馬士でも、地板でもあるめえでねえケ、よう。」

「さあ、わい等、ご婚禮の座敷だ、二十三人が婿様だ、儀式はゆつくり、夜は長いぞ。あとさきの戸緊をよくしろや、えいか。——和倉口と、富來口と確り材木で木戸を鎖せ。人が來めえもんでもねえが、馬おいらが起つて動かねえと吐けい。夜があけるまでも街道ご免だ。軍師でも眞

田でもこんな要害は持つめえが。……えへッへッへッ、おれはこれ、土蜘蛛甚太夫だ。」
眇は、狂せりや、傍若無人に名告をあげた。

「がきの時から、小びねくれた仰々しい名はあるだが、何事も仕出さねえ。薬と水ばかり掻食つて、馬ほどのばりもこかねえで、山裾の尻の穴へ葬られべいと、うんざりしたさに、天道様は無駄ばかりはさつしやらねえ。うみつけた蛆蟲も見通して、眞晝間、こんな、えれえ、へい、初ものを下さるだ、畜類め、寒玉子、うへッへッへッ。」

と又胸ふるひをして黄色に笑ふ。

肩を並べた運轉手は、立ちかはつて、其の反対の、右側から、扉に突込んだ顔の、眉も口も引つらせて居たが、息を切つて、

「先生、言をつくして、くれぐれも説いたです。馬士たちに與へたとも云ふまい。馬と——馬と賭博を打つて、裸にされたとも、狐にばかされたとも言つて、決して皆衆に責任は持たせない、とまで言つても肯きません。で、先生が最後の條件として提出されました、最後となれば……其の最後となれば、……ご婦人の衣類、上着……帯、」

お李枝は横さまに背けた頬を、矢野の肩にくひつくばかり、手で背を揺ぶつた。揺られた矢野の骨々は碎けよう。

「で、で、最後のものさへ、一つ許さるれば、……とまで話した、ですが、頑として背かんのです。」

「然うだ。おれたちは追剥や泥坊ではねえ、しら生頂面な馬士だ。たゞうまいものをお振舞に預るだよ。なにが、些と、呂呂呂でも山蛭と思へさ。肉を喰へばとつて、蜂蝮ほどの毒はねえ。蚤、虱、たかが南京蟲だ。そのかはり可厭だと吐いても、血を見なんば納まらねえぞ。わいら、なぐり合の用意をしたか。花嫁のお寢間は何うだ。」

「甚親方。」

と一人、尖つた口を出した。

「勝手な處へ——早くしろてば。」

カアセエジの市が、羅馬軍の略奪、殘虐に逢つた時も、かばかりの慘毒は、よも、なかつたらう。

目の届く山際の窪みへ、引かなぐられた紫のコオトは、生けるま、膚を解いて、お李枝の姿を、碧血に敷いたに齊しい。

上の枝の鬼つたは、青い鱗の簾である。

「積荷を解いて、丸太などを持つたです。や、つる嘴、シヤベル。平常は、おとなしいもんなん

ですが、狂ひ出すと、暴れ馬同然で、底止る處を知らんのです。
と運轉手は、拳を握つて、ぶる／＼と震へた。ハーツと息して、扉下の足臺へ、額づくとも

「先生、相良には母親が一人あります。自動車を買つたばかりです。……お嬢様、許して下さい。
許して下さい。輕蔑して下さい。——こ、この頭を土足で踏み下さい。そして能登ものの、この
唯一人だけを侮辱して、他は許して下さい。」

と涙は頬を傳つて流れて、脱いで持った帽子を千斷れるばかり掴みしめたのを、たゞきつけて、
其の靴で踏躐ると、片腕を伸ばして、工女の莫産を確と抱いた。

「姉さんも許してくれ。……一目見て、生れてはじめて戀を思つた。……こ、この、姉さんさ
／＼。」

と、いふと齊しく、足もひよろ／＼と、崖下へ寄つたが、汚い半帕で目を蔽つて、電柱の根へ
仰向けに倒れた。

あ、電信がある。一弾指して音信は、全國に通ずるのに、通ずるのに。

「そりや此の娘も引摺め。」

「あ、れ。」

「何だ、ワリや。」

「姉えは、何處のもんだ。」

と、馬士三人が蔽はれかゝつたが、

「富來の在か。ふうん、同國だな。」

「おまけに、山家だ。苞つつみの自然薯とけつかる。」

「自然薯でも、同國では、あと腹が病めべい。」

「そんなものは措けやい。」

と、眇の伸上つた目が光つて、

「村方の娘ツ子ぢや、げえもねえ。」

「然んだ、然んだ。精進ものは、ご祝儀には向かねえだ。」

「そこに、うまいのがござらつしやるで。」

「刺身にも、煮肴にも、鹽にもよ、てん／＼が好きすきだ。」

「堪らねえ。」

「鮪の中膏どころだだよ。」

「此の下郎ら。うへッへッ。そんな魚で、此方人等が咽喉を鳴らすと思はれては、其處な野郎に

恥かしいだ。おらは山へ来た人魚と思ふ。此の初ものさ、一嚙、一口で、三百年づゝ生き延びるだ。

「おらは、何でも、乙姫様の白肉だよ。」

と屋根の舌が、また黒く硝子を舐める。

「お李枝さん。」

矢野はあらたまつて、上ずつた聲ながら、血に濡れたやうに言つた。

「観音様だと思はないか。普賢菩薩だと思はないか。煩惱の衆生を救つてやると思はないか。お李枝さん、待合の女中も、酒場の給仕も、藝妓も、時を刻み、目を延べるばかりで、或意味で言へば、今の此の場合と、餘り違はないものであらうも知れない。長煩か、半日の大病で、熱のひどい時、身體が火の車で宙に廻ると思つて、夢の間の地獄を忍ばないか。名醫は私の名で何うにか呼べる。東京からでも呼べようと思ふ。心氣と、身體、とともに、治れば何でもない。

而して、お互に、活きようではないか。たとひ、どんな事があらうとも、此の私は、いゝか矢野は、斷じて李枝ちゃんの身が、爪のあとほど、亂れた、汚れたとは、寸分も思はないことを誓ふ。——誓、私の名は、これがために前生から撰ばれたのだと信するばかりだ。

敵と戦つて傷つた名將として、跪いて、其の傷を吸はう。でなければ珠玉螺鈿の厨子にかし

づいて、天人、神女として禮拜をしよう。——李枝ちゃん、目を開けて一度、其の、いつはりでない私の顔を見ておくれ。」

と胸に抱取つて、うつむき視る顔は、白蠟に似て、凍り澄んで、堅く封じた唇の奥に、皓齒が霜の薬のやうに震へて迷に響いた。

「何だ、然うでなくつても、此のくらゐな事は。下等な支那料理を食ふつもりで女はいくらでも、そこらに居る。」

たゞ目を眠つたまゝ、矢野の襟を、折れよ、「其の皿數だけ食つて、あたれば反吐を吐くか、胃散を。」と確と緊めるのを振つて、振つて、鬢のおくれ毛は、つと通つた鼻の兩方にもつれ亂れた、息の下で、

「馬も、馬士も、二十……」

皓齒の薬の糸の聲に、轟然として胸に巨弾をうけ、眞暗になつた、矢野の目には、山も、崖も、忽ち石炭の丘を積んで、めら〜と青い炎が立つた。

二十に餘る馬士の面は、一人づゝ、赤き、黒き、灰色の、また蒼い、馬の顔に變じ、其の目は一個づゝ、パチ〜と火の粉を放つて群り射る。その時に、馬の面は鬣を被つた人間の顔となつた。尾は、脚は、馬士の脚とともにすく〜と迫つて、朱の氷柱を縦に貫き、鐵の棒の柵をならべ、

耳の数は、青竹の鋸に似て切立つた。阿鼻、焦熱、餓鬼、畜生、頭を立てる鼻息は皆蒸れて、硫黄を噴いた。

ぐわう、ぐわう、ぐわう、炎の輪は旋風の如く鳴つて、黒煙のなかに、消え残るお李枝の頸肩、頬、咽喉、指さきの白さに渦巻きかゝる。

「水……」

「うむ、水。」

「水一くち、一くち。」

「うむ、尤もだ。」

と熱鐵の涙を絞つた。

土下座して、乞求むれば、這個勝ほこつた敵は、十町、五町を走り、峰に求め、谷に汲んでも、一杯の清水をもたらず事を惜むまい。

けれども、緯々として、これを三々九度の杯と吐き、ほくそ笑をするだらう。
無念である。

矢野は、なき母の乳を思ひつつ胸——いや、胸に齒の届かぬ、片腕を、——左の腕を噛んで裂かうとした。

筆を取る右の手を庇はうとしたのである。

あゝ、わが知る、兵庫岡本には谷崎潤一郎氏。

——もとより東京に、水上、里見、久保田の諸家、もし此處にあらば、其の才能と、機略と、膽勇を以て、一呼吸して、此の危地を脱しよう。

其の他、友一人、誰とても。——また異つた意味では、第一此の人の母、花柳數枝、わが妻の澄とても、お李枝を全うし得ようと信ずる。——甚しきは、反對に地を轉すとせよ。彼奴輩、馬士と雖も、其の愛人を救ひ得ざらんや。

たゞ、われ一人、手段を誤り、前後を忘じ、舉措を失した。

かくて、群狼の毒牙、馬妖の亂脚に、お李枝の自身の四肢を擲つて、其の五體の狼藉委泥さるるを、面のあたり見ねばならない。目を潰せ、胸を裂け、——それで濟むか——腕が何だ！

いま、われお李枝を救ひ得ずして、文章が何だ。小説が何だ。作者が何だ。

「この、しみつたれ。」

自ら罵ると齊しく、ガキツと右の手の手首を噛んで、疵口を溢るゝ血を、血の脈よりも細く弱い、お李枝の口にひたと當てた。

「水。」

「あ、あ。」

「なまぬるくはあるまい、水。……こんな事とは知らないから、睡いおもひをさせて、姫沼綾羽を聞かせたり……那須與一の弓は付うした——矢野の矢も抜けて居る。僧正遍照のむだ口をたいて、恥入つた。——骨まで冷汗を流して居るから、血は氷より冷たいぞ。」

「あ、あ、あ、おいしい。」

「あ、あ、おいしい。」

「血ね。」

「胸が悪いか。」

「いゝえ。」

と、消えむとする燈火の風に蘇つたやうに唇を動かしたが、弛んだ帯に摺れかゝつた懐中かゞみを、撓ゆげに取りつつ、その懐中紙に血を拭ふと、襦袢の袖口で、矢野の疵をぢつと押へ、

「馬士に遣るなら、この血を顔中に塗るんだけれど、をぢさんに見せるんだから。——あたしも、見をさめ。」

と、いつて、かゞみを蓋した。——お李枝は並んでは居ない。腰を空に、床に殆ど膝をついて、

矢野に、背を抱かれて居たのである。両手で搔分けるやうに肩を振つて、雪を欺く襟を寛げ、朱驚色の扱帯を、其の手でするゝと手繰出す。

矢野は新しく戦慄した。……瞬間——

支那の昔の事だが、虎に咬はれた死骸には、いまだ嘗て衣帯の残り留まるものはない、靴さへない。皆殆ど裸であるといふ。……此の事實は怪しまれた。が、月色に山岨を傳ふ樵夫が、巖にかくれて、虎の犠牲となるものを視た。亂國に亡びた落人か、淡粧の女子。其の咽喉を噛まれ、手足仰向けに弓のやうに反り撓ふ。虎は鋭くは齒を入れず、其の喙に曳いて行くらしい。

婦は足を震はして、はじめ靴を脱した。耳その他飾りの珠玉を、光る肉片の如く撈り散らすと、其の手を亂點して襟を開き、帯を解き、裳を裂き、襪を放つて、次第に縷なき、たゞ細長き雪となつて、鬱林に隠れたと言ふのである。

稻妻の如く、目を射て、其の光景が閃いた。

お李枝は、苦惱、悶亂の極、おのが身を皓體に露呈して、猛虎の牙に投げるのであらうか。其の扱帯を、

「首をしめて、これで殺してね。」

と蒼白な笑顔を見せる、と蹴出しも襪も膝に崩れた。

「然うか、さうして、私も死ぬのか。——よし、」
と、矢野は深々と頷いた。

「冥途へは連れ立って行く、が、懺悔をする。李枝ちゃんを好きなをぢさんは、唯二十人以上でないばかりか、其奴等馬士の一人と同じやうな卑劣なものだつたかも知れん。が、構はないか。」

「構ひません。」
顔をあげて、又見まもつて、

「あたしも好きでした。」

「やあ、高い處だけに長いやつを引いた、おらが籤が一番だい。」

と茜顔巻が、倒に又覗く。

眇の目に目が累り腕に腕が争つて、扉に入った、翳した洋杖で一打だけ打拂つた、が、諸手組合はす、打仰向いたお李枝の首へ一捲きして、

「目を開けて、顔を視て。」

此時をたゞ氣高く美しくするため、此の清い目に生れたか。睜いた目は毗かけて新月の眞珠を湛へ、引纏うた扱帯は夜の虹を薄く黒髪に靡かした。

白山の使者

途端に立つた。シイツの隔て唯一重にしては、活きて見るに忍びなかつたらう。衝と立ち上る、……落人の女工の莫蔭が動く、と思ふと、手にした菅笠の端が、拍子に鋭くあがつて、俯向けに扉を覗く茜顔巻の目の球をぐいと突いた。

「きやつ。」

本能的に両手でおさへるはずみに、這つて、もんどり打つて、どしんと地に墮ちた。

「白山の使者。」

と莞爾すると、落ちた馬士とは反對の扉を、頸細く、肩軽く、抜け状に、指で衝くと、又一人の目を突いて、ワツと退らせ、驚いて一人つかみかゝる目を、又突いた。

尙一人に抱かせて、するりと莫蔭を投げた姿を視よ。紗綾形の雪の羽二重に、紅燃ゆる袴をくぐんで、車の輪を傳ふばかり、ひらりと材木の上へ高々と立つが迅いか、押掛つた一人の横面を一聯、六尺の苛高の珠數で拂ひのけ、颯と投げた十尺に餘る勢ひは、狙つて又一人に目潰しをくはした。

馬士どもは、昏迷、惑亂。

しかし多數である。

得ものを取つて、取つて、迫つて、積おろし荷には馴れた、其の車へ、四五人で込上るのを、踏んだ材木を欄干にして、一桁、馬の浮橋をすらくと前へ渡り、濡れ縁の端などを築山へ移る安易さで、庭下駄で突掛けたさうに、馬の尾を跨いで鞍に飛んだ。

これは黒馬、一嘶きした。が、鞍を平にして静まつた。

「白山のお使者です。」

隙間あらせず、詰めかゝる馬側の馬士の一群を、頭から、額から、頬から、耳から。

「痛え。」

「お疼。」

「あ、痛、疼、痛。」

鼻を噛み、唇を齧り、咽喉、頤を別るものを、知らずば聞かせよう。たゞ苛高の珠數と思ふが、

狼の牙、貂の頤、鷲の爪。悍邪毒悪、百年凝石の封を解いて、今こそ猛威を顯はしたれ。翼

も、牙も、爪も、本身全相の影が添つて、馬士等を、噛伏せ、駈散らす……勢ひは、防ぐのでは

なく、祟るのである。

「女神様を知らないか。」

「眇は、ぢだんだを踏んだ。彼奴は修羅の戦ひより、速かに名珠の分捕を急いだ。」

「其方は、其方だ、確りやれ。」

三たび扉を襲はうとした時である。渠等の目は、渠等の目は、馬の背に、一文字に寝て、鞍を抱いて腹這ひになつた奇異なる艶媚の態に聳動した、と同時に、馬は根こそぎに、四足を折つて横に倒れた。

「やあ、おらが青馬。」

と、眇は横飛びに飛んで寄つた。

その鬣、寧ろ耳の間から、白鷺の羽の夕日に染まつて翔けるやうに、ひらりと下りると、車の間の空地にも立留まらず、直ちに次の車に飛び乗つて、材木を爪さき移りに、更に第二の馬に乗つて、背の上に、つツと立つた。

唯、見る間もあらせず、鞍を抱くと、抱こりに、袖が、馬の耳に掛り、目を蔽ふと、見る間に、

莞爾すると、其の馬が又倒れた。

「馬が轉べば、一疋が騒ぐ、と諺にさへ言ふ。……其の一頭を起すにさへ、馬士の全部を要しよう。」

狼狽を見よ、周章を思へ。
また又倒した。

續けて七頭といふものを、右と左に、屏風に倒す——ドドン、ドドン、火薬の岩を裂く幽なる
寂しき音のみ、馬は古夜具の抜綿の如く、たあいなく寝て、聲も立てぬ。

其の第八頭目の背の上に、すつくと顯はれた時は、さすがに髻は刎ね、黒髪は肩に捌け、腰に
亂れた。——汗ばむ額に、涼を呼んで、片手脱ぎに胸を開いて、片袖を打脱ぐ肌は、鱗もなしに、
緋縮緬。

白馬に颯と翻つて、振上げた珠数は、中空に、高く唯一棍の烏金の鞭に硬直して光つたのであ
る。

「白山様のお使者です」

「魔ものだ。」

「魔ものだ。」

「魔ものだ。」

「白山のお使者です。」

「馬は助けて。」

「馬は助けて。」

「馬は助けてやー。」

「馬は助けてやーい。」

「姫神様を知らないか。」

しかしながら、これは、襲撃に隙ありし時よりして、馬を倒さむとする毎に、續いた光景の描
寫である。

「魔ものだ。」

「魔ものだ。」

「魔ものだ。」

「馬は助けて。」

「馬は助けて。」

「馬は助けてやーい。」
「馬は助けてやーい。」

目の下の岨道を、二谷切つて、手庇さがりに見透さるゝ、棚田縁を、運轉手相良彌之助に負はれ、娜々と脊に靡いて、和倉の方へ疾く馳る、お李枝の姿の、亂れた髪を其のまゝに、しつとりと柳で包んだ、遠見の、袖、肩、帯も扱帯も解け落ちて、縮めた膝に吹き添ふ風に、山藤の花、芍薬の影は淡く映しながら、搔垂るゝ裳に守られつつ、爪先の白さの漏れぬをさへ、嬉しいものに、巖の狭間、木根越に見遣りつつ、矢野は圍を脱けて、手の傷をいたみながら、山蔭に憩つて居た。

すぐ、其處にも、一頭の馬が腹に波を立てて倒れて居る。

「——矢野さん、——矢野さん——」

朗かに、駒鳥の唄ふやうな山の端の聲を振仰ぐと、切立の崖の茂りを、ちら／＼と樹傳ひ来て、大樹の杉の梢とばかり高い枝に、袴の紅緑の葉越に白衣を視た。

思はず立つて深禮を加へつつ、

「——姫沼—— 姫沼、綾羽—— 吳羽さんのお身内—— お身内ですか。」

「お師匠さんはあらためて—— またお目にかゝります。……」
といふのさへ、派手な唄の調子で、

「——長太居るか、

——長太居るか——

ほゝゝ。

と聲が葉を染めた。

「——此の唄をお聞きなさいな——」

——長太居るか——

私は曲馬の娘です。

白山様のお使者です。

女神様を知らないか。

魔ものだ、魔ものだ。

魔ものだ。

馬は助けて。

馬は助けて。

長太居るか、
長太居るか、
居るは何ぢや。
白山権現、

此の時の座敷——聞の様子は、讀まるゝ方々の想像にまかせたい。
海の音と、山風と、森の鼻が聲を交へて、

——長太居るか——
また廊下近く、障子の外から、
——長太居るか——
——長太居るか——
海の棧橋際、塀の外から、
——長太居るか——
——長太居るか——

馬は助けて、やーい、

馬は助けて、やーの。……

——唄は何う、唄は何うよ。」

と又笑つた。

「神力、靈驗に恭禮します。」

と其の杉の根に、手をついて跪いた。が、疲れによるめきながら、おなじ木の根に腰を落した。

「ほゝゝ、唄は。」

かばかりの女を自在に使ふ、其の言ふ綾羽の、隠れたる威力を讃歎しながら、

「唄はまづい。」

と、いつた時、うっかり持った洋杖の、いつか折れて、柄のもと少々残つた象牙の、血だらけ

なのを軽く投げた。

其の、真夜中である。

三階の段の上あたりで、はじめ、

——長太居るか——

おん白神の、
姫神様の、

おつげを聞けば――

お李枝、お李枝、

お李枝のきみは、

あなたへやらぬ、

こなたへ渡せ。

山からなりと、

海からなりと。

白い馬には朱の鞍おいて、

青い船には白い帆かけて、

二挺灯して雪洞持つて、

一把燃して松明擧げて、

むかひに参りさふらふ。

むかひに参りさふらふ。

いかに作家、冷静に唄の批判を爲し得るか。

長太居るか、

長太居るか、

居るは何ぢや。

白山権現、

おん白神の、

姫神様の、

.....

斧よき

琴こと

菊きく

——飛でもないこと、盲人が池へ落ちた。——いや、落したもおなじなんです、氣の毒な事をした——

池といつても、築山の松を模様にして、月影に澄まして居るのではない。谿川の急流を水門から取入れ、せき落す、館内を繞る水源で、舟も浮べられる。深くはないが、廣く水を湛へ、中の島の巖の根は、風騒ぎ雨打てば波立つばかり。水の行方は、ざざと咽び、さらりと靡き、とんとと舞ひ、鼓にも三味線の絲にも乗つて、客間、浴室を、隨處お好みの調べで流れる。池を抱いた伊豆修善寺温泉の大旅館、菖葦樓の帳場が、もう戸を閉さうとした、霜月のはじめ、午前二時に近い。——詰合つた番頭、接待がかり、男衆の、自宅から通ふのはそれと歸り、部屋へひくものは引いて、泊り番の孝吉といふ三番番頭どころが、さて、……寝ようと——大玄關正面は、しめると障子が連つた、が横手に渡り廊下の、長く橋がかりに續いた向は、其の池の水がこゝで瀨になつて、湯殿の方へ瀧を掛け、浴客の眺めに供へて、雨戸はたてないのであるから、

板戸を入れる……それを、ばた／＼と閉めかけて、孝吉が心着いた。

「あ、さうだ。お北さん。」

「あい。」

もう寝支度の、襟つき縞物の萎えた袷に、腰紐ばかりで、この四五人づゝ、一組、一方の女中がしらの中年増が、寢部屋から内のもの専用の湯へ行く處を、大火鉢のわきで呼びかけられた。

「霧の三番へ療治に行つてる永庵……だがね、まだ下りて來ないやうだがね。」

「さうですね。え、まだ歸りませんわ。」

火鉢に軽く中腰で、表障子の中硝子から式臺下を覗いた、目は迅い。出入りの面々の脱勝手の極つて居る處に、古足駄が一足あり。ずらりと並べたスリッパの、かゝる霜夜の千鳥に對して、

「成程ね、いつが日にも、かたんどん、按摩の高足駄は古風過ぎると思つたが、かういふ時は、講談本の探偵小説ぢやあないけれど、實地驗證が速でい。」

と欠びまじりに、ははは、と笑つて、灰の中に揉み消した半分の卷莖に火をつけながら、

「一寸行つて見て來ておくれよ、お北さん。」

「なぜさ。」

「何故ぢやあないやね。揉ませながら、うとく寐るといふのが、元龜、天正頃から、道中のお客のお定り見たやうだけれど、揉む方が居睡りでもして居ちや困る……」

「あの、慌てものの、性急やが、居睡りなんかするもんですかよ。」

「だがね、慌てものの性急だつて、居睡りをしないと限らないよ。」

とお北を見て薄笑ひして、

「見て来ておくれ、何しろ遅すぎる……どうせ、ついでぢやあないか。」

「ついでにしては、方角が違ひますわ。それだし、ちつと遠方ですのね。」

「だつて、霧は眞北だよ、此の内では。お北さん、お前さんの劍先ぢやあないか。何も、まはり合せさ、今夜は其の星に當つたんだ。」

「つまらない身の上ね、糠星とやらだわ。」

と上草履で廊下へ出たが、据附の椅子に手拭を預け、廂下りに瀬の上の、まばらな柿の梢を透く、山間の空を覗いて、

「あしたは霜が下りさうよ、寒いお星様が光つてる。」

と腰紐を絞つた胸ふるひを一つしながら、吹込んだ落葉をさらくくと棲さき摺れに、反橋づくりを、流を横ぎつて、向う廊下へ渡ると、槻の大木が陰を浴びせて、角の電燈も薄暗い。其の奥

の巖窟の、もう落したあとの湯の雫が、ばちやん、と流よりも高く響く。

夜が更けると、女中たちには、これから眞直に、錦葉に因んだ綾織ケ池といふ其の大池から、霧の三階へ攀ぢ上る——木曾の棧橋——一本橋——水門から巖組へ吹きぬけの細い橋廊下が約束の難所になつて居る。

途中、客間がぼつ／＼と三つばかり、中に谿川このみの流が、こゝばかり音もなく静に通つて、向うが内證の住居ゆゑ、奉公人の廊下の振舞が直ぐに主人むきの耳へ入つて、はしたないと叱言の種だから、特に取澄ますのが例なので、恚ういふ折は、そつと歩行だけ悪く陰氣で。さういへば、奥山から奉公に出て来た湯番の、愛想ふりに仕掛けて置く、棧俵ほどの小さな水車の、見人があると張合らしく、くるり／＼廻るのが、人影のない時は、動くのも無駄らしく、働くのもチエツ馬鹿々々しいと、嘲けるが如く片づけて居るのさへ、猿が齒を剥いた形である。「いやだ。」内證の雨戸は、ひつたりと閉つて居るが、一方の客間の襖を漏れて、次の間へ映る灯の影の障子の小間の一隅も、古行燈に見えて、うそ寂しい。

「お、氣味が悪い。」

お北は兩袖をすぼめて通つた。

一目、渺として、なほ大い。

池の風の冷たさ。

恰も宵に一時雨した雨上りの水の濁つたのに、中島の燈籠も消えて、星の影も見えず、淀んで暗い。

雨にも風にも驚かぬ、かはりには、陰に籠つた、屋根裏の鐵燈籠が水の上の細廊下に只た一つ。大きな鯉が麩を呑んだやうにぼんやりと點いて居る。

取着的の戸口を、お北が縮まつて抜けて、其の橋へ渡りかゝると、

「……願ひます。」

薄ぼけた、かすれ聲。

檜皮葺の屋根の上か、橋の下か、背後の巖組は、ものは言ふまい……

怯え立ちにすくんだ、お北の耳へ——

「……願ひます、お北さん。」

「イ、イ、イ。」

引きいきになつて、よろけさまに柱に凭れかゝると、池の中で、

「願ひます、……お北さん。お光さん……お浦さんでございますか。」

傍輩の名が様づけに慍う並ぶと、對手が魔ものでも、化ものでも、滿更他人ではなささうで、

一息氣の静まつたお北が、目で泳ぐやうに池を透すと、橋際三四尺の水の中に、朦朧とした坊さまが、琵琶箱を背負はないばかり、半分沈められた人柱に似て、身體はあきらめたが、無念さうな顔をして、つくねんと濡れて立つて、

「誰方様なりとも……へい、願ひます。へい……」

と寂しい聲とともに、ばしや〜と水を刎ねた。

「何だ、池へ——」

岩破といふ勢で、孝吉が障子と板戸を一掴みに引開けると、忽ち半身を敷居へ踏出し、

「按摩が落ちた。」

「一寸、一寸。」

お北が息せいて、引張るやうに兩手を振つて、

「一寸大變よ。」

「やつたか、うむ。……もう土左衛門かい。」

と飛出した氣組に似ず、間の抜けた聲を出す。

「土左衛門だか、何だか知らないけれど、池の中にぼかんと立つてる。……」